

三次元

リニューアルしたモバイルサイトの情報も載ってるよ!

立ち読み版

2D DREAM MAGAZINE

成年向け雑誌

今号の特集

乳責め

清楚で巨乳な巫女を描くのは

黒田晶見

新連載小説



最新作!!
ハーレムシリーズ

ハーレムジェネラル
竹内けん
×かん奈

乳責めに誘われて
変身ヒロイン小説が復活!

サンダー グラフィクス!

羽沢向一 × せんばた楼

マンガ大好評連載中!

超昂閃忍ハルカ

MISS BLACK 原作:アリスソフト

特別
付録

ピンナップポスター

いるまかみり

黒田
晶見

いよいよ単行本化!



コミック化!
シリーズ初の大人気ゲームが

魔法少女イスカ ~after school~

Sacred Feather 七輝静樹

DIGITAL EDITION vol.51 2010 04

表紙&ピンナップテレホンカード
応募者全員サービス



降参の部隊は美女だらけ!?
若き隊長の恋と戦いの日々が始まる!

ハーレムジェネラル

THE LEGEND OF HAREM GENERAL

第一章 王族将軍出陣す

小説 / 竹内けん
NOVEL

挿絵 / かん奈
ILLUSTRATION

「オルタンスです。本日より、リュシアン将軍の副官を拜命しました」

入室してきたのは女のような。感情を見事に排した事務的な口調である。

その新任の副官とやらにまったく興味のなかったリュシアンは一瞥もくれず、執務室の広い机に頬杖をついたまま、野外を見ていた。

視界に広がるは白い砂の海。荒涼とした砂漠だ。

大陸の北西にあるフレイア王国は『熱砂の大地』という通称で呼ばれることもあるが、いわゆる南国にある砂漠の年中灼熱といったイメージとはかけ離れている。

国の北から西にかけて雄大なターキア山脈があり、それにより雨雲が遮られるために、非常に乾いた風が吹きつけ、水蒸気の供給量が少ないため生じる内陸砂漠なのだ。

夏の最高気温は45度を超えることもある一方で、冬は寒風吹きすさぶ厳冬の地となり、最低気温がマイナス40度を割り込むことも少なくない。

人間が住むには過酷すぎる環境と言えるだろう。しかし、この国の名産はその砂漠の地下にある。恐竜など古代の生物の化石が発掘されるのだ。

それらの化石は、魔法の触媒として大変有益なものである。

魔法を使うためには魔法宝珠が使われるのが一般的だが、その魔法宝珠に封じ込める魔力の素が、これだ。

魔法というのはなんにでも応用の利く万能の燃料である。その原料なのだから珍重され、諸外国に非常に高値で輸出される。当然、国内には喰うような金が集まった。

フレイア王家は、いわば商人たちの元締めであり、金だけは腐るほどにある。

ここ国内最大のオアシス『妖精の沐浴場』の湖畔

に築かれていた首都カプスに至っては、国王マドアスの鎮座する宮殿はもちろん、その他さまざまな公共物まで、金殿玉楼と呼ぶにふさわしい広大な作りになっており、至るところに貼られた黄金で目がちかちかするほどだ。

館内の空調も魔法によって完全制御されており、夏でも冬でもまるで南国の翡翠海沿岸のように常夏の環境を楽しめる。

「ああ……ご苦労さん」

リュシアンは、国王の甥というだけで将軍に抜擢されたのである。全軍の総大将たるダングラールはこの王族将軍を戦力外とみなしているだろうし、本人もやる気がない。

しかし、一拍置いて違和感を覚えた。

（ん、オルタンス？ ……どっかで聞いた名だな……だれだっけ？）

自らの副官によく興味を持った新米将軍は、荒涼とした砂漠から視線を前に向けた。

そこに立っていたのは、女としては中肉中背。淡い金髪を肩に届くくらいのセミロングにし、ミントグリーンとボトルグリーンのコントラストで作られた軍の制服を纏っている。下半身がタイトなミニスカートの下からは、後方勤務の女性士官である証。胸元からは白いタートルネックの白いインナーが覗き、スカートの下からはブラウンのタイツに包まれた肉感的な脚。足元はパンプスを履いている。

顔を見れば、二十代の半ば過ぎといったところか。犀利な顔には赤い縁の眼鏡をかけ、肉感的な口元には赤いルージュが引かれ、化粧もぼつちり決まっている。

都会的で垢抜けた美貌。それは計算された美しさと言うべきだろう。典型的なキャリアウーマンと言うべき隙のない装いであり、それだけに没個性的と言える。

だれが見ても、有能で真面目。頭のいい女性なんだろうな、と想像がつく。

悪く言えば、ハイミス一直線といったタイプだろう。男なんかおよびでない雰囲気も全身から発散されていた。

（でも、素材は悪くないな。いいチチしている）

仕事に生きる女として、意図的に色気を消しているが、それでは隠しきれない成熟した肉体を制服の下に隠し持っているようだ。

スーツの上からも見て取れるグラマラスな肢体をしており、特に胸元などはいまにも軍服のボタンを引きちぎりそうだ。

「ごほん！ なにか？」

「いや、なんでもない」

咳払いされてリュシアンは我に返った。思わず彼女の胸元を凝視していたらしい。思わず見ると、いくらなんでも、初対面の女性の胸元ばかり見るのは失礼というものだろう。

（しかし、いい身体しているな。これってやつぱり、ダングラールの配慮ってやつなんだろうか？）

お飾りの将軍といえども、一応は王族である。身の回りの世話をする副官にこのような美女を送ってきたということは、ダングラールなりに気を使ったということだろうか。

そんな身勝手なことを考えながら、リュシアンは赤い縁の眼鏡をかけた犀利な顔を見る。

（ほんと、しみじみいい女だな。こういう知的な女性って好みなんだよなあ。男なんて興味ありません、と言いたげな顔が、快感に歪むさまがなんともたまらない）

現在は二十歳のリュシアンだが、現国王の兄の子であり、世が世であれば、王太子か、国王であっても不思議ではない高貴な存在だ。

なぜ現実が違うか、といえば父親ウルベインが早

くに亡くなったからである。

いまだから十年ほど前、王太子だったウルベインは、若くして治績、武功もともにいくつかな実績を上げて英明を謳われていたが、城内で狂人の手にかかって夭折した。

その逃亡する暗殺者を追って手ずから討ち果たしたのが、現国王マドラスである。

兄の仇討ちの武功と、ウルベインの息子リュシアンが幼すぎるといふ理由で行われた、その王位継承劇に表向き反対する者はいなかったが、裏ではまことしやかに流れている噂がある。

すなわち、暗殺者の黒幕はマドラスで、口封じのために実行犯を殺したのではないか、という疑惑だ。その噂を否定する意味もあるのだろう。マドラスは、兄ウルベインの忘れ形見であるリュシアンを、国内でも特別な大貴族として遇している。

もつとも、実態はていのいい飼い殺しだ。

将来的にも、王位は己が息子に譲るつもりであり、兄の息子などに返すつもりはさらさらないのである。

そういう微妙な立ち位置であるため、リュシアンは昔から廷臣たちに、腫れものに触るようには扱われてきた。大事な仕事は任せられなかったが、大貴族として、何不自由のない生活。

その不自由なくという意味の中には女性も含まれる。

■歳の誕生日の夜に、乳母に聞教育をされて以後、エッチをしたいと言えば、たいていの女は口説くことができた。

「それでは、今後の予定ですが、間もなく閣下の幕僚たちもここに来るように手配してあります」

「ふん……」

真面目に仕事をする副官の言葉など右から左に聞き流し、その喘ぎ顔を想像するという、なかなか失礼なことをしていた。

（結婚はしてないな。結婚していたら、こんな仕事してないだろう。年齢的に考えても処女ってことはないな。昔、悪い男に捕まって痛い目にあっただころかな。こういう一見お堅いタイプに限って、んぼ突っ込まれたら乱れるんだよなあ）

赤い眼鏡をかけた知的美女の、セックス時の痴態を想像していたリュシアンは、その像が妙に具体的に浮かぶので戸惑った。

（それにしても彼女とどこかで会ったことあったっけ？ オルトナスか……、オルタンズ、オルタンズ……そういうえば昔、同じ名前の女性と付きあっていたよなあ……んっ?!）

不意に脳裏で像を結んだ。
記憶にあるその女性は、黒い縁の眼鏡をかけたもつと地味なタイプの女性であったが、確かに面影がある。

「え、先輩?!」

驚愕したりリュシアンは両手を机について、勢いよく椅子から立ち上がった。

「……」

愕然としている上司に、仕事の手を止めた副官は無然としたジト目を返した。

「ああ、一応、わたしのこと覚えていてくれたみたいですね」

「忘れるはずがないでしょ」

皮肉の棘でチクリと刺されたリュシアンだが、誤認ではなかったと知って笑顔になる。

「いや、先輩が副官になってくれて心強いです。いきなり將軍なんて任されてどうなることかと思っていましたからね」

あれは確か、約五年前のことだ。

成人したリュシアンは、形式的に宮廷に出仕を命じられた。しかし、どこに配属すべきか人事部も困つ

たのだろう。とりあえずは後方勤務となり、そのとき直属の上司になったのが彼女だったのだ。
良家の子女の出身で、国家試験に受かった秀才官僚である。

リュシアンと出会った当時も、いかにも頭の切れる才媛といったタイプであったが、黒縁眼鏡をかけた、よりお堅い雰囲気の人であった。しかし、リュシアンは一目惚れしてしまう。というのも、それまでリュシアンが相手にしたことがあるのは、屋敷の侍女か、舞踏会に出席するような美姫ばかり。真面目に仕事をしている女性というのが珍しかったのだ。当然ながら、当初のオルタンズは放蕩者で知られた若さまの求愛など、鼻にもかけなかった。しかし、それがかえってリュシアンの恋心に火を点けてしまった。

意地になったリュシアンに、執拗に口説かれたオルタンズは、ほだされたのか自らショーツを脱ぐ。
二人の関係は、一年ほど続いたのだが、リュシアンが地方のオアシスの総督に人事異動されたとき、自然に消滅した。

「あれから、五年ぶりですか……会いたかったよ」
実のところ、リュシアンにとって、オルタンズとは過去の女性であり、すっかり忘れていたのだが、そんなことはおくびにも出さず声をかける。

また、先ほどとは違って肉関係のある女とわかれば遠慮はいらないだろう。リュシアンは久しぶりに再会した恋人の肢体に魅入っていた。

（しかし、先輩も成長したな。なんだあのおっぱいや、昔から大きかったけど、一段と大きくなった。いや、おっぱいだけではないな、全体的に色気が増して、お洒落になった。これが大人の女になるってことか）
知的な女を装っていても隠しきれない成熟した女性としての魅力。
リュシアンが付きあっていた当時のオルタンズは、

二十歳を超えたばかりの小娘だったのに対して、いまは二十代も後半。いまが食べごろの果物といった感じに、匂いたつようなぶりっぷりの色気が漂っている。

その恋人の舐めるような視線を全身で感じるオルタンスはまんざらではないといった笑みを浮かべると、昔は親しかった男と女ということで砕けた調子になった。

「それにしても、あのスケベなだけが取り柄だったリュシアンくんが、將軍とはね。出世したもんだわ」「からかわないでくださいよ。ぼくなんて家柄だけで抜擢されたお飾りですよ」

謙遜というよりも、身も蓋もない事実。そのことをよく承知しているオルタンスは、わざとらしく腕組みをして溜め息をついてみせた。

「そうだね、リュシアンくんみたいな青鬚筆を前線に出さなくちゃいけないなんて、いよいよ我が国は危ないのかも」

冗談めかしているが、実際の国情を考えると笑えない。

というのも、現在のフレイア王国は、東からドモス王国の先兵たるヒルクルス將軍の侵入を許して、その対応で大わらわだったというのに、西からは西方半島の雄フルセン王国まで侵略の意図を見せているのだ。

ドモスとフルセンが協力しているとは思われないが、挟み撃ちにされた形のフレイアとしては、大変な危機である。

その打開策の一つとして、とりあえずは王族の一人を最前線に向かわせて、士気高揚に使うということにしたらしい。

しかし、国王マダアスの子供は十人以上いるも、未だ一人として成人していなかった。

そこで思い出したのが、亡き兄の息子リュシアン

だったというわけだ。

もつとも、英明の誉れ高かった王太子ウルベインに似て見栄えはよく育ったリュシアンだが、中身は雲泥の差である。

軍事、政治、文化あらゆる分野で、特に見るべき才能はなく、平凡で影の薄い若者だ。

悪くない容姿にしても、内実が伴わないせいかなんとも虚ろに見えて、希少価値を感じさせない毒にも薬にもならない名門貴族さまに育ったと言っべきであろう。

こんな者でも、抜擢すれば、亡き兄の息子を優遇しているのだぞ、という政治パフォーマンスになる。同時に、もし失敗して、失っても惜しくはない人材といったところだろう。

そんな国王の見え透いた思惑で決められた人事であることは、頭のいいオルタンスが見抜けないはずがない。

乾いた笑いで追従しつつ、リュシアンは答えた。「しかし、先輩が副官で安心しました。以後、事務仕事一切はお任せします」

「こちら、いきなり丸投げするな」

窘めるオルタンスの前に、リュシアンは机を回って、その背後に立った。

甘く爽やかな香りが男を誘う。知的でエレガントな大人の女にふさわしい高級な香水の匂いだ。それに誘われて、リュシアンは両腕で抱きしめる。

「いやいや、人間何事も適材適所です。ぼくがやるよりも先輩にやってもらったほうがはるかに効率がいい」

「まったく……五年ぶりに会ったらずうずうしさに拍車がかかっているわね」

あきれ顔で皮肉を言いながらも、男の腕を振り払おうとはしない。

それをいいことにリュシアンは、スーツの上から

乳房を掴んだ。

「その代わり、先輩の疲れが癒えるようにぼくが精いっぱいご奉仕しますから。おっぱいこんなに大きかったら肩凝りとか凄いいんじゃありません？」

「乳房を弄ぶ。」

「こら、いきなり何をするつもりなの？」

さすがにオルタンスは、乳房を捉えた手に自らの手を重ねて咎めるが、そんなことで自重するリュシアンではない。

「だって、五年ぶりの再会ですよ、ぼくもう我慢できなくて」

甘えた声を出しながらリュシアンは、両手の乳房を豪快に採みしだき、ミニスカートに包まれたお尻の谷間に、硬くなつた逸物をグリグリと押しつける。

「やめて、わたしたちはもう恋人同士じゃないのよ」「仕事の都合で逢えなくなっただけで、別れ話をした記憶もありませんが？」

抵抗するオルタンスの美しい左の首筋に接吻し、うなじへと舐め上げながら、上着のボタンを外していく。

無粋な軍服の下には、白とグレーのタートルネックの縞模様の緩いインナーを着ていたが、それは上にたくし上げる。そこにはお洒落なブラウンのブラジャーに包まれた巨大な肉塊があらわとなった。

その下着は透かしが入っていて、いかにも大人の女のオルタンスには似合っているが、普段着としてはちよつとばかりセクシーすぎるであろう。つまり、彼女もまた、今日、リュシアンと再会するにあたり、こういうことになることを予測ないしは、期待していたという証左ではあるまいか。

それなのにオルタンスは意地になつて拒否する。「五年も間があったら、別れたと言うのよ」

「たった五年でしょ。ぼくたちの間に時間は関係あ



りませんよ」

拒絶の言葉とは裏腹に、オルタンスの抵抗は緩い。それをいいことにぬけぬけと語ったリュシアンは、ブラジャーのカップの中に手を押し入れて剥がしてしまった。

ぶるんつと擬音が聞こえてきそうな勢いで白い肉塊が二つ飛び出した。

「ああ、は、恥ずかしい……。あのころに比べるとわたしも年取ったから、おっぱいも垂れちゃっていいでしょ」

「いや、こういうのは実ったと言うんですよ。先輩のおっぱいは昔っから凄かったですけど、いまじゃほとんど凶器ですね」

リュシアンのわけがわからない感嘆に、オルタンスは首を傾げる。

「凶器？」

「ええ、このおっぱいなら、敵の一軍を撃破したとしてもぼくは驚きません」

オルタンスは本気で呆れながらも、まんざらでもないといった表情になってしまふ。

「まったくバカなことばっかり……」

「男ならみんなこのおっぱいの前にひれ伏しますって」

リュシアンは手にした巨乳を根元から頂にかけて豪快に揉み上げる。

「あつ、やめて、もうわたしはきみの女じゃないって言っているでしょ」

「ぼくの女ですよ。ほら、乳首なんてもうこんなに硬くなっている」

白い肌には溶けるような美しいピンク色の乳首は、乳輪が意外に大きい。その乳輪から膨らんできている両の乳首をきゅつと掴んだリュシアンは、くりくりとコネながら左右に引っ張る。

「あん、そんなに引っ張ったら伸びちゃうでしょああ……」

勃起した乳首は、女にとつて強い性感帯だ。オルタンスは口を大きく開いて、牝声を上げてしまった。

そのまま爆乳おっぱいを存分に弄んだリュシアンは、右手で生乳を揉みながら、左手を下半身に下ろした。そして、ブラウンのストッキングに包まれた太腿を撫でまわす。

「はあ、はあ……わたしは副官よ。情婦じゃないわもう二度と男なんて信用しない。まして、わたしを散々玩具にして捨てた、キミを許さないって決めたのよ」

強情にイヤイヤと首を横に振るうオルタンスだが、下半身の抵抗は緩い。膝がガニ股に開いてしまっている。

そこで遠慮なく、スカートの中に手を入れた。

「ああ、ダメえ……」

ストッキングに包まれた滑らかな太腿を撫で上げていき、股間にまで達した。

「ああっ♪」

まるで電流でも流されたかのようにオルタンスの肢体は震えた。

「捨てたなんて人間が悪いな。先輩はぼくのものです。これからも永遠にぼくだけのものですよ」

左手の人差し指と中指と薬指。三本の指が薄い布越しに女性器を包んだ。その状態で激しく擦り上げると同時に右手で生乳を豪快に揉みほぐす。

「あああ……ダメ、ダメって言っているのに……ああ、わたしの身体、喜んでる♪ 喜んでる♪」

お尻を男の高ぶりに擦りつけながら、知的な大人の女としての仮面は剥げた。五年前、すっかり牝に墮とされた肉体が目覚めてしまったのだらう。赤いルーージュの引かれた肉感的な唇は半開きとなり、溢

れ出る涎が細い顎を濡らす。

「くつくつく、先輩ってばかわいいなあ、とりあえずいつてもらいましょうか♪」

ショーツ越しにもぶつくりと膨らんでいることがわかる、コリコリとした陰核を中指で掻き集めてやった。

「ひいああああ……!!!」

熟れた肉体をした淫獣は、あたりをはばからぬ嬌声を張り上げて前屈みに崩れ落ちた。

「はあ……はあ……はあ……」

オルタンスは將軍用の大きな執務机に両手をつき突っ伏した。男の眼前には、濃緑色のミニスカートに包まれた充実した臀部が無防備に差し出されている。

「相変わらず感度いいですね、先輩は♪」

感嘆したリュシアンは、まるやかな尻を手で撫でまわし、その感触を堪能してから、タイトなミニスカートをたくし上げにかかった。

「あつ……」

羞恥とも諦観とも取れる溜め息を聞きながら、薄い布を一枚めくると、中にはパンストの下に、ブラウンのショーツが見えた。

色合いは地味だが、その実シルクであり、かなり気合の入った下着だ。間違いなく男に見られることを意識して穿かれたものであり、俗に言う勝負下着というやつだらう。

その大人の女らしい高級感あるショーツのまたぐり部分にはもう大きなシミができ、焦げ茶色に変色してしまっている。

「パンストまで濡れていますよ。ほんとエッチだなあ、先輩の身体は……。それじゃショーツごと脱がしちゃいますよ。いいですね？」

ダメと言われても脱がすつもりリュシアンは、返事も聞かずにショーツに手をかけると、パンスト

と一緒にぐいっと太腿の半ばまで下ろした。

「はぁん……♪」

女の気の抜けた吐息とともに、成熟した大人の女のむっちりとしたハート型の生尻と、薄紫色のアナル。そして、栗色の陰毛に彩られた肉裂がさらされた。ぶつくらとした肉裂の狭間からは、透明な液体が大量に溢れ出しており、内腿を垂れ濡らしている。

(いい具合にトロトロだな)

生唾を飲むリユシアンとは裏腹に、机に突っ伏すオルタンスは悔しげに嘆息した。

「……どうかしたんですか？」

「五年前にフられて凄く恨んでいたはずなのに。再会すると同時に、こうやってあたり前に身体を開いて、それで喜んでやってるわたくしって、ダメな女だなと思って……」

自己嫌悪に陥っているオルタンスに、リユシアンは忍び笑いをしながら追い打ちをかけた。

「それって、ショーツの中にまで香水を浴びせてきている女の台詞ではありませんね」

リユシアンは陰唇に鼻を近づけるとクンクンと鼻を鳴らして匂いを嗅いだ。

「ああ、やめて♪」

恥辱に震える女の陰唇からは、爽やかで甘い香水の匂いしかなかった。

「いい香りです。それから……」

「あつ」

リユシアンは肉裂の四方に親指と人差し指をかけると、豪快に割り開いた。

「ほら、思った通りだ。先輩のおんこは綺麗すぎますよ。マンカスの欠片もない。これはここに来る前に丁寧に洗ってきたという証拠でしょう？」

「……」

耳まで真っ赤にしているオルタンスに、リユシアンは容赦なく質問する。

「先輩は、今日、ぼくに会いに来る前に、オムソコの中を丁寧に洗い清めたあと、ショーツの中にまで高級な香水を仕込んできた。その下着にしてもすごい洒落な高級品。この意味するところってなんですか？」

「そ、それは……あつ♪」

口ごもる女のむき出しの媚粘膜にリユシアンは口づけをした。そして、ペロリペロリペロリと五年ぶりの女の味を堪能する。

さすがに五年前の味を覚えていないが、この芳醇に熟れた牝の味は男を狂わせるには十分だ。

媚肉を貪られ、全身をピクピクピクと恥辱に震わせていたオルタンスがやがて認めた。

「そ、そうよ。わたしは期待していた。こうやって有無を言わず押し倒されて、リユシアンくんのおんこのおんくの奴隷なんでもん♪」

「おんくの奴隷ですかっ!?!」

その露悪的な自称には、さすがのリユシアンも驚いた。

「ええ、前から薄々気付いていたんだけど、いまこうして慰み者になりながら、しみじみ実感したわ。わたしは、リユシアンくんのおんくの奴隷♪」

自らを貶めることに、オルタンスは酔ってしまっているようだ。リユシアンは苦笑する。

「まったくエッチな人だなあ」

「わたしを、そんなエッチな女にしたのはだれだと思ってるの？ 真面目だけが取り柄だった女の、処女を奪い、アナルを開発し、精液をゲップが出るほどに飲ませた。いや、もうこの身体の中で、リユシアンくんの精液が浴びせられていないところなんて、一つとして残ってないのよ。そこまで徹底的に調教しておいて、五年間も放置するんですもの。酷い男……あああ♪」

恨み骨髄といった様子で睨んでくる女の蜜壺に、リユシアンは指を二本入れると、グリグリと掻き混ぜる。

「それじゃ、先輩は、あれから何人ぐらい男を食べたんですか？」

「バカ、わたしを口説こうなんて命知らずな男はあとにも先にもあんただけよ」

「こんな美人を放置するなんて、王都の奴ら、見る目ないよなあ」

クチュクチュクチュク。

肉穴を指で穿りまわし、恥ずかしい粘着質な音を立てさせる。そうしながら、リユシアンは淫核にしやぶりついた。

「ああつ、お願い、そんなに苛めないで……早く」

「早く、なんですか？」

淫核を包む包皮を完全に剥き上げてから口を離したりリユシアンは、女が求めていることなどわかりきっているが、敢えて聞く。

「お、おんくん……リユシアンくんのおんこちゃんうだい」

五年前にすっかり調教済みの女は、久しぶりに口にする隠語に頬を染めながらも、熱く懇願した。

このような美しい痴女を前にしては、いかに女慣れた貴人といえども操られずにはいられない。

「では、五年ぶりに先輩のおんこの味を堪能させてもらいましょ」

ズボンの中からいきり立つ逸物を取り出したリユシアンは、その切っ先を牝の穴に添える。

しかし、すぐには入れない。亀頭部に女蜜を塗りたくる。

「ああ♪ もう焦らさないで、早く、早く」

もはや部屋に入ってきたときの、知的な女の面影はない。ただの痴女となったオルタンスは腰を後ろに突き出す。しかし、それに合わせてリユシアンも

腰を引く。

「そうがつつかないでくださいよ。じつくりと楽しんでみましょう!」

挿入をしながらも、いきり立つ逸物の切っ先をゆつくりと押し込んでいく。

熱く蕩けた牝の肉壁が、食るように肉棒に絡みついてきた。

「ああ……っ?!」

五年も前のときのオルタンスの膣洞の感触は覚えてはいるが、現在の締めつけが絶品であることは確かだ。

まるで極上のワインを五年間寝かせてから味わうかのように、その抱き心地のよさに酔い痴れた。

そして、根元まで押し込んだときである。オルタンスは突如乱れた。

「はあ、ああ……っ!!!」

ビクッ、ビクビクビクビク……。

華奢な両肩から背中にかけてを痙攣させたかと思うと、同時に肉棒を包みこむ膣洞もまた激しく痙攣し、吸い上げてくる。

「くっ」

驚いたリュシアンは肉棒に気合いを入れて必死に耐える。

キュッ、キュッ、キュッ……。

(うわっと、いきなり先輩、イっちゃっているよ。せめて、イクとか叫んで欲しかったな。危ない危ない)

不意打ちで来た絶頂痙攣の心地よい締めつけを、なんとかやり過ごすことに成功したリュシアンは、オルタンスの背中を抱いてその耳元で挿入する。

「先輩、入れただけでイっちゃったんですか?」

「だあってえ〜久しぶりだから、気持ちよくてえ!」顔を真っ赤にし、眼鏡の奥の瞳をとろんつと潤ませたオルタンスは、だらしなく緩んだ口元からは涎

を垂らし、机に小さなオアシスを作ってしまった。

まさに男に溺れきってしまったている痴女の表情だ。「まあ、仕方ないですね。思いつき楽しんでください。今日はこのまま又カバ六ぐらいしてあげますよ」

逸物を抜かずに、女性を六回イカす。その高等テクニクに挑戦してみようなどという気分になったリュシアンは勢いよく腰を叩きつける。

「あっ、あっ、あっ、あんっ……らめん!」そんなにされたら、わたし、わたし、狂う。狂っちゃう!」

完全に理性が飛んだオルタンスは、ただ牝欲の赴くままに嬌声を張り上げた。

すつかり出来上がった男と女が、心地よく楽しんでいたときである。

コンコンと、部屋の扉がノックされた。

その音に驚いたオルタンスは、色欲の世界から現実の世界へと舞い戻る。

「そ、そうでした。こんなことをやっている場合はありません、閣下の新しい幕僚が来るんです」

「ああ、そういえば、そんなこと言っていましたね」慌てて男を引きはがし身支度を整えようと身を起こそうとするオルタンスを、リュシアンは逆に押さえ込んだ。

「なにをっ?!」

驚く女の両腕を後ろに持ち上げて、室外に声をかける。

「どうぞ」

「えっ、ちよつと……?! どういうつもり?」

男の予想外の対応にオルタンスは慌てるが、リュシアンは委細構わず腰を動かした。

「いいじゃん、見せつけてやるよ。先輩はぼくの女だってことを見せつけておかないと変な虫がつくかもしれない!」

「そ、そんなわたし……」

リュシアンの前では完全な痴女だが、普段の彼女は真面目で仕事のできる女だ。その公人としての仮面を傷つけないと必死になって逃げようとするが、後背から男に串刺しにされ、両腕まで固められてはどうにもできない。

部屋の主の許可が出たのだ。当然ながら、扉が開いた。

「失礼します」

リュシアンは部屋の入口に背を向けていたので、砂漠の映る窓ガラスを鏡代わりに、入室者の様子を見がう。

まずは躊躇色の軍服を纏った女が、肩で風を切りながら入室してきた。

年のころは二十代前半といったところか。女にしてはすらりと背が高く、黄金色の髪を後頭部できつちりと結び上げ、ベレー帽で留めている。

細面の顔で、すつと通った鼻筋に、薄い唇。全体的に肉感が少ないが、それはナイフのようにシャープな印象を与える。

肢体にしても、鞭のようにしなやかで、見るからにできる女であることを全身から醸し出していた。

腰にはサーベルを吊るしていて、まさにどっから見ても女軍人タイプだ。

ついに入ってきたのは、さらに背が高い大柄な女だ。二十代の半ばといったところで、青いビキニ鎧を纏っている。露出の激しい鎧を纏うだけあってスタイルに自信があるのだろう。がちりとした肩幅に、双乳も大きい。それでいて腹部は引き締まっていた。

典型的な女武人といったところだろう。

ただ髪型はかなり奇抜だ。青い豊かな髪が筒状の髪飾りで包まれてツインテールになっている。前髪も右目にかかり、黄色い左目だけを露出させている。いわゆるパサラといった風体だろう。

もつとも、これはそれほど珍しいことではない。戦場で武功を立てる勇士は、自らの武功を誇示するために目立つ格好をするものだ。

まずは先頭切つて入ってきた躑躅色の軍服の女が、踵を鳴らして足を揃えると、背筋を伸ばして、敬礼した。

「本日よりリュシアン閣下の戦目付を拝命しましたクリスティーナです」

キンキンと響く甲高い声だ。しかし、その敬礼姿は実に美しい。その非の打ちどころのない姿勢のよさから、彼女の人となりが出てくるようだ。

真面目で、頑固一徹。己に厳しく他人にも厳しい。軍人の鑑のような女だ。

はつきり言つて、リュシアンの苦手なタイプである。

ついで青いビキニ鎧の大女もまた、机に向かつて立つ男の背中に力強く挨拶をした。

「ルキノです」

風貌は奇抜でも、落ち着いた声音だ。悠揚迫らざるといった雰囲気があり、若いが歴戦の勇士と思わせるものがある。

「ああ、ご苦労さん。いまちよつと手が離せないから、そのまま待つていてくれ」

「はっ」

軍隊において上司の命令は絶対である。クリスティーナとルキノと名乗った女たちは、なんら異議を挟まず直立不動で待つ。

その間、室内には不可解な女の嬌声が流れる。

「あつ……、んつ……、いや、やめて……そこダメ、声でちやう……っ」

オルタンスの姿は、リュシアンの陰になっていたから、クリスティーナとルキノは、その女の囁き声の意味がわからなかったのだろう。

二人は怪訝な顔を浮かべていたが、やがて上司の

前にいる者の存在に気付いた。

「……っ!？」

ほぼ同時に、事態を悟ったクリスティーナとルキノは、凝然と眼を見張る。

その瞬間の二人の表情は見物だった。クリスティーナとか名乗りたいかにも気位の高そうなエリート軍人っぽい女は、顔を真っ赤にして口元から小さな悲鳴を上げた。

ルキノとか名乗った何事にも動じなそうな女武人もまた、顔を赤く染めて、息を呑む。

二人とも若くして、軍の中級指揮官に成り上がった有能な人材たちだ。滅多なことではここまで動じることはないだろう。

「こ、これは……失礼しました」

一時的な自失状態から立ち直った女たちは、慌てて踵を返そうとしたが、リュシアンが留めた。

「あ、いいよ。そのままのまま。なんだつたら彼女の艶姿をよく見てやつてよ」

「あん、そんな晒し者にするなんて……酷い」

余裕なリュシアンとは対照的に、オルタンスは涙ながら訴える。

「先輩って、人と壁作るタイプじゃないですか。こうやってエッチな素顔を見せておいたほうが、打ち解けられますよ。それにほら、彼女たちがやつてきたら愛液の分泌も、一気によくなりましたよ」

「あん♪ だつてえ〜♪」

時として恥辱は女を高める媚薬となるということだろう。特に真面目を売りにしてきたオルタンスのような女にとつて、これは悪夢でありながら、淫夢であるようだ。

「さて、本来なら先輩ともつともっと楽しみたいんだけど、幕僚のみなさんをおんまり待たせても悪いから、一気にいくよ」

宣言と同時にリュシアンは、オルタンスの右足を

抱え上げ、机の上に乗せた。左足は下ろしたままである。その状態で腰使いを一気にトップスピードにする。

「あ、やめて、そんなに立て続けにイカされたら、わたし……っ!？」

女の身体というのは、左右をアンバランスにしたほうが、脳のバランスが崩れるのか、より乱れる。それを知っているリュシアンは、わざとオルタンスの片足だけを机に上げさせたのだ。

それに腔洞もねじれて新鮮である。

男の腰と女の尻がぶつかりあい、パンパンパンと激しい拍手音を立てる。

「ああ、やめて、見られながらなんてダメ、見ないで、お願い見ないでえ……っ!？」

言葉とは裏腹に、その声色は見てと叫んでいるかのように甘く蕩がっていた。

被虐の悦びに悶えているオルタンスを組み敷きながら、リュシアンが見学人たちの様子を確認した。

気の強そうなクリスティーナは見えてはいけないと言いたげに視線を明後日の方角に逸らしながらも、横目でチラリチラリとこちらを見ている。大柄なルキノは、オルタンスに対する武士の情けというかのように、目を閉じて、じつと耐えているが、意識は目の前の出来事に集中しているようだ。

（あれ、二人とも初心だな。まあ、若くして栄達しているくらいだし、男になんかにうつつを抜かしている余裕はなかったってことかな。それじゃ、お近づきの挨拶だ。セックスに興味津々のお二人のために、先輩には派手にイッつもらうとしよう）

リュシアンは目の前の獲物へと集中することにした。

「ダメ、そんな激しくされたら、イッちゃやう、イクッ、イクッ、イクッ、イッちゃやうッ! ひい、ああ、ダメ、またきたッ! きちやつたッ!」

「ダメ、そんな激しくされたら、イッちゃやう、イクッ、イクッ、イクッ、イッちゃやうッ! ひい、ああ、ダメ、またきたッ! きちやつたッ!」

「ダメ、そんな激しくされたら、イッちゃやう、イクッ、イクッ、イクッ、イッちゃやうッ! ひい、ああ、ダメ、またきたッ! きちやつたッ!」

「ダメ、そんな激しくされたら、イッちゃやう、イクッ、イクッ、イクッ、イッちゃやうッ! ひい、ああ、ダメ、またきたッ! きちやつたッ!」

「ダメ、そんな激しくされたら、イッちゃやう、イクッ、イクッ、イクッ、イッちゃやうッ! ひい、ああ、ダメ、またきたッ! きちやつたッ!」

魔法少女陵辱もの超人気ゲームが
待望のコミカライズ!

あははははっ

捕まえたっ
捕まえたわよっ!



くっ
あ

!!

あはははっ！

所詮キミたち魔女は

私達魔女狩りに狩られ
滅ぼされるだけの存在っ！

今まで同胞を何人も逆に
狩ってきたようだけど所詮――





スピラ・
キュアネアアアツ!



なつ!

サテユルメマグネシアオーバードライブ……



げはっ!



負けだっ
負けだっ

この魔女めっ



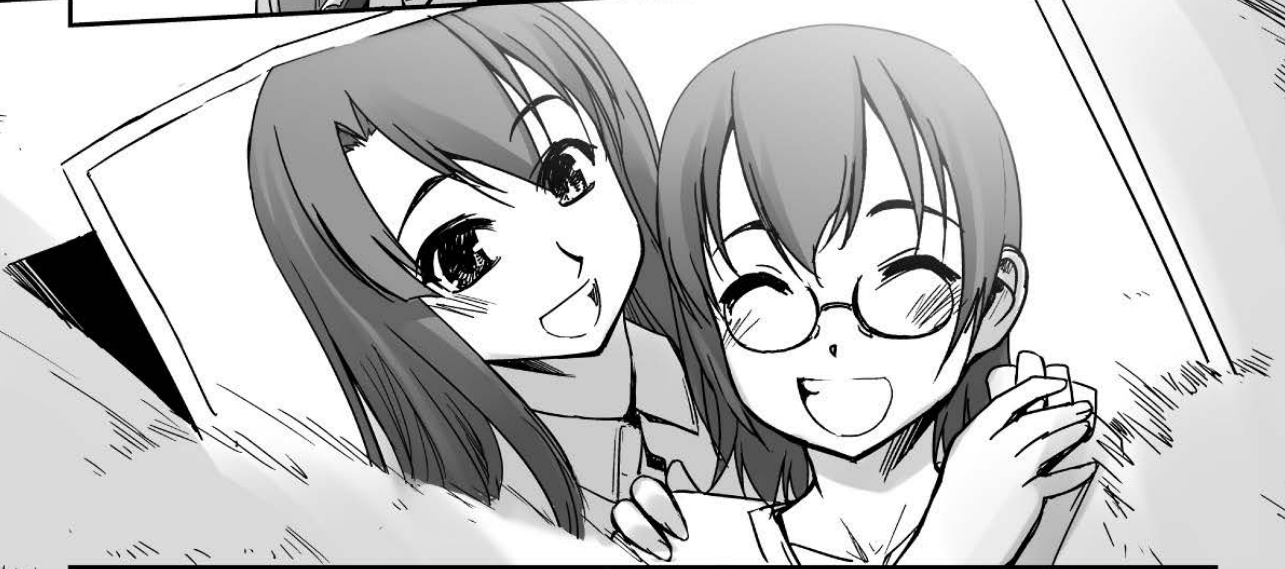
分不相応な
力を得た

魔女狩り
殺しめっ!



せいせい
逃げて
逃げて

震えて
怯え続けろっ!



——手にした勝利から滲み出す罪の匂い
それでも少女たちは**独り戦い**続ける**!**





魔法少女 ~ after school. ~

<magical girl fauko>



第一話

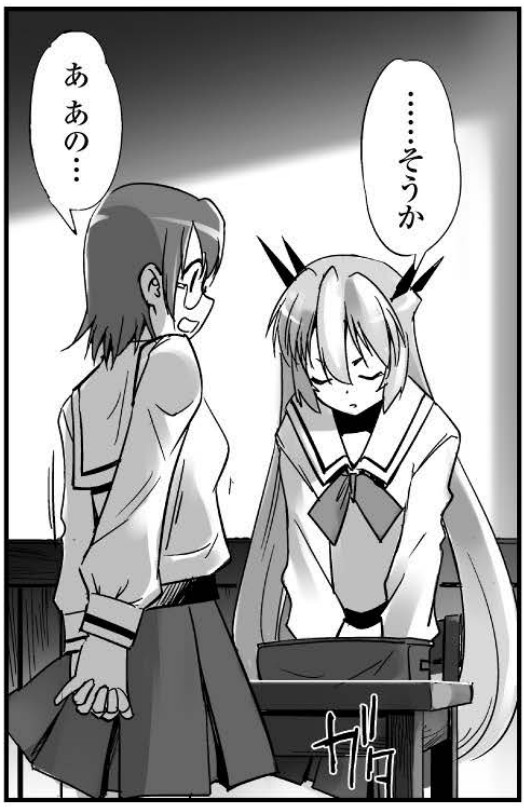
邂逅交差

漫画
COMIC
原作
ORIGINAL
©Lilith

SASAYUKI Lilith



かじき
柏木さん？

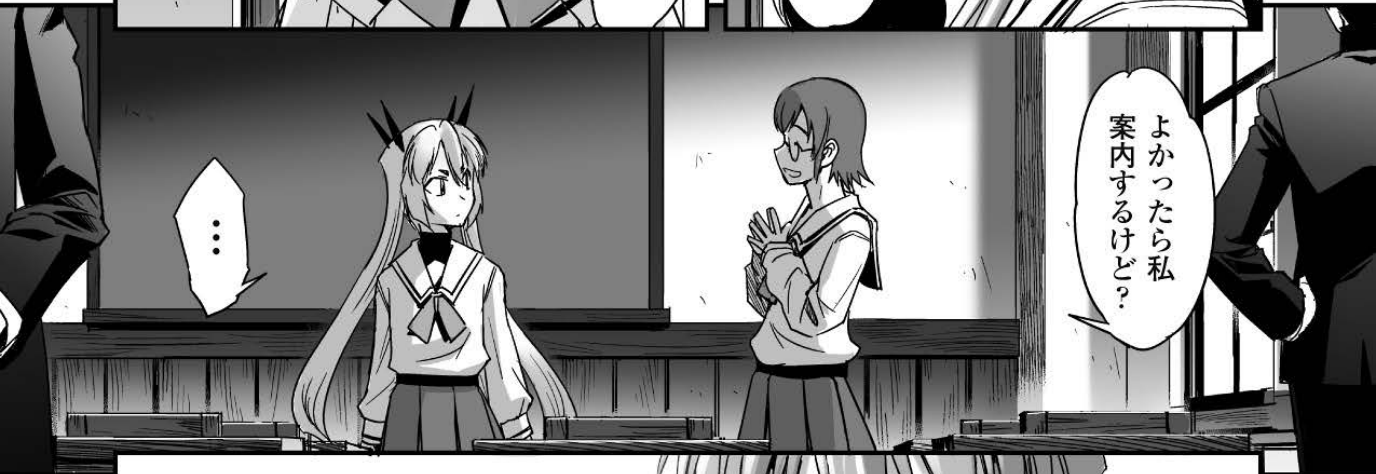


ああの…

……そうか



授業終わったよ？





異世界フィオルシカアヅル

フィオルシカアヅルに住む者すべての敵天敵

その眷属の魔族


十数年前までソコには魔王が存在していた



魔王を打ち破った魔法使い達の
手により生み出された魔女



私たちは魔王の魔力のカケラを
埋め込まれ 異世界に逃れた



魔王復活を企てる
魔族から逃れるために



それが魔女の使命







ダメだって
言ってるでしょ？



や…だ…

…やだあ



…やだ…

だからあ…

天地^{あまた}遍く世界に
ギヤラルホルンは
吹き鳴らされた

ラグナロク

神族と巨人族の
終わり無き――

否……

終わりへ導く
争いは
激しさを増す
のであった

凛々しく羽ばたく戦乙女登場！

Tränen von Walküre



霜の巨人
スルム!
私は貴様の
物などは
ならぬ!!

ハハハハ
戦乙女
フレイア!
幾里も戦場を
探しましたぞ

今日こそ貴女を
我が物にして
あげますよ

そのような
戯れ言で
戦を愚弄
するな!



輝け!

我が神槍!!



ニーベルン

アダ
ル
フ
レ
ヒ
ト
!!



スズ

あ…何これ…
鎧が…服が…

ああ!?

く…
つまらない
こと…を!

鎧が…
溶ける!?

何? や…あ

絡みついで
く…る…

かかり
ましたね!
それは金属や
布を侵食する
スライムですよ

ホラホラ
どうしま
した!?

あ…あ
動かない
で…っ

暴れると乳が
こぼれ出て
しまいますよ

溶けるだけ
じゃなく…て

熱…い?

ああっ





隙アリ!

変なトコ
入って...きた

はうっ

や...だ

ん

はっ

あッ!!

もらい
ましたよ!!



く…

こんな事で
私の首が
獲れると
思ってる？

逆転よ

さあ大人しく
トドメを刺…



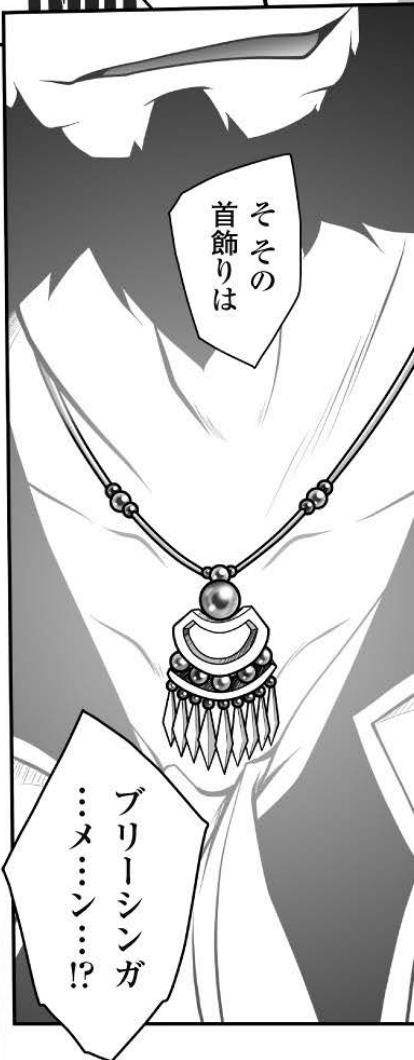
その
首飾りは

バ…かな

どうして
貴様の手…

神をも魅了
する首飾り

ブリーシंगाメン



ブリーシंगा
…メ…ン…!?



我が力では
そこまでは
できないが
戦意を奪う
程度はできる
ようですね

さあ大人しく
我が城に

あ…
そん…な

プリンセス
神器の力を
借りた上
女を拘束…

なんと言われ
ようと結構

あ!!

貴女が手に
入るならば
何でも
しましようぞ

やめ…て
やめろ!

そこは貴さ…
貴方が触れて
ありません!

クク…

戦士の誇りは
無いのか!?
恥を知り
なさい!!

結界か!?

ぬおおツ



フ……
拘束されても
拒絶はできる

誰が貴方と
など……

そうか
ならば



私が欲しく
なるまで
その肉体を
高ぶらせて
あげましょう

おやおや
敏感ですね

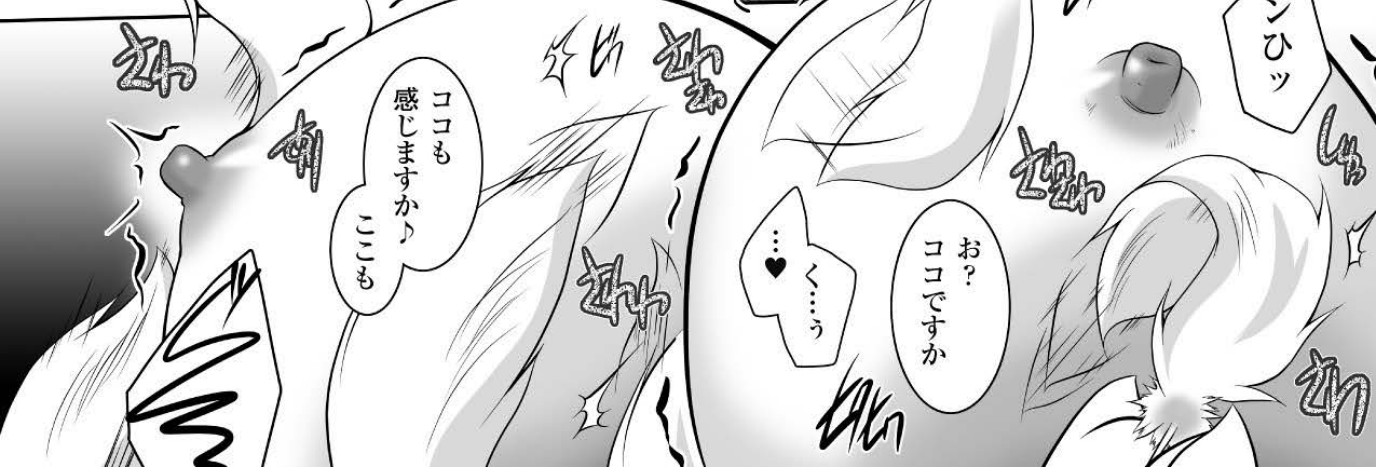
ん……くう
っは……う
……ッ

くすぐられた
くらいで
感じてしまう
のですか

ひゃ
……

おやめ……
な……さ……
くううん

ひあつ
だ……誰が



ココも
感じますか
ココも

お？
ココですか

……
く……う
……



わわわ
だめ
くすくすた...

わわわ
やあ
胸が...
びくんって

わわわ
勝...手に
感じちゃ...う

わわわ
フフ...乳首を
痛いくらい
勃たせて

そんな...あ
先ばかりっ



わわわ
そんな
いやらしい
乳には

はっ
はっ
く...み
見ないで

お仕置きが
必要だね

はうん
ひ...う

う...う

んっ



ひああ
ああ...あ

強い刺激も
好きですか

ああああ
ち...が

それでは

スーパーヒーロー復活!!
フレアとニューオブビートを狙う乳鬃りの悪魔!!

サンダー外伝 クラウドス

ナイトメア
ミルクファームの悪夢

はざわこういち
小説 羽沢向一

挿絵 せんばた楼



原作ノベルズ
1~3巻も好評発売中!

深夜二時すぎ。

東京上空、正確には練馬区郊外の上空を、白い影が音もなく飛んでいる。十階建てのビルの屋上ほどの高さを、うつむきの姿勢で、滑るように移動していく。

フレアだ。

四人組のスーパーヒーローチームのサンダークラブスの一員。強靱な肉体と人間をはるかに超える体力、そして空を飛べる超人だ。

無造作に切った短い髪に縁どられた精悍な美貌が夜風をきる。

フレア本人は普通の表情をしているつもりだが、他人からは力強い顔つきだと見えるに違いない。

身につけたコスチュームは、純白のノースリーブのレオタードに、白いミニスカートが一体になっている。

チャリダーを思わせる、澁刺としたデザインだ。

白い衣装全体に、抜群のプロポーションがはつきりと表れている。

とくに豊かなバストは挑戦的に前へ突き出し、コスチュームの胸に描かれた黄色い炎のシンボルマークがそりかえった。

両肩から背中へは、腰までの長さの白いケープが垂れている。

両手には白い手袋。足には白いロングブーツ。

いずれも普通の衣服より頑丈な材質で作っているが、特別な仕掛けのあるコスチュームではない。自分がスー

パーヒーローであることを示すためのただの制服だ。

今は、空中から路上を観察している。フレアの視力は、街灯の光だけで、歩行者をはつきりと見分けられた。

とはいえ午前二時に、閑静な住宅街の道を歩く人はいない。

(やっばり、やみくもに空を飛んでも意味がないな)

脳裏に、同じ事件を探索している他のチームメイトの顔が浮かぶ。

(麗と静子はハイテクで手がかりを集められるし、ベルは精霊を駆使できるけど、肉体労働専門のわたしにできることは、こうやってパトロールするだけ、あれは!?)

大通りからはずれた路地を歩くひとつの影が、目に入った。

女だ。

二十歳前後の若い女。

その格好は、今夜はかなり暑いといえ、外出するには無防備すぎる。

上は白いTシャツ。下は白いショーツに、サンダルだけ。

フレアは、二日前に警察から協力の依頼を受けた、連続失踪事件の概要を反芻した。

すでに二十人を超える失踪者たちは、いずれも美女だ。報道されていないが、全員が無理やりに拉致された形跡はなく、自分の意志で姿を消したとしか考えられない状況だった。

警察は、オフビートによる、なんらかの精神コントロールを疑っている。

そして最近の二回の怪しい失踪はこの地区で起きた。

眼下の女は、失踪事件がなくとも、正義の味方として、放つてはおけない状況に見えた。

フレアは足を先に下降して、女の前にスタッと降り立った。

「きみ」と、声をかけても、女の態度に変化はない。

口もとに笑みを浮かべ、瞳は目の前のフレアを見ていない。遠い場所か、あるいは自身の内側にあるなにかを見つめているようだ。

(普通じゃない。催眠術か、テレパシーか、とにかく操られている)

女は斜めに足を出し、フレアを除けて進む。

「待つて」

フレアは右手で、女の手をつかもうとした。しかし触れる前に、フレアの手首に黒い布が巻きついた。

「その女のじやまをするな」

暗がりから聞こえたしゃがれた声は、英語だ。フレアの脳の特長な言語中枢が、自動的に日本語に翻訳する。

布の一方の端を、白い手袋が握っていた。

「誰だ」

「俺は牛乳配達人だ」

そう名乗った人物は、たしかにそう見える格好をしていた。

頭には長い鬘が前に伸びた帽子。黒いレザーのコートを着こみ、両手には

白い手袋。藍色のスポンを穿き、茶色のロングブーツを履いている。

しかし普通の牛乳配達人とは違い、首から上全体を、黒い覆面が覆っている。両目の部分にも、白い布があり、顔も髪も完全に隠されてわからない。

(今まで、いろんな名前のヒーローや犯罪者に会ったが、ミルクマンなんて変なのはじめてだ)

フレアは黒い布を握りしめ、黒覆面をにらみつけた。

「ミルクマン、おまえがあの女を操っているのか」

「違う。女が向かう先に、俺の敵がいる。女はそのまま行かせる」

「あの人を危険にはさせない。保護するべきだ」

反論のかわりに、ミルクマンがアスファルトを蹴った。

一気にフレアに迫るスピードは、人間の動きを超越している。

世界チャンピオンのボクサーよりもはるかに速い右のパンチが、フレアの顔に襲いかかった。

(この動き。やはりオフビートか。だ)

フレアにとつては、充分に対応できる速度にすぎない。

顔の前で、左手で拳を受け止めた。パンチの衝撃が、フレアの掌から腕に伝わる。ヘビー級のプロレスラーでもぶつ飛ばされ、気絶する一撃だ。

それもフレアには苦痛ではない。

右手を握られたミルクマンの黒い覆

面が、フレアの顔と向かいあう。

「おまえはフレアだな」

「わたしを知っているのなら、わたしの身体が戦車の砲撃に耐えることも知っているだろう。あつ！」

ミルクマンの背後に、ふいに白い影が立ち上がった。

二メートルを超える長身が、純白のロープで頭から足の先まですっぽりと覆い、身体はまったく見えぬ。

指も長い袖の内側に隠れているが、右手には西洋の長く大きい草刈り鎌を持つている。

唯一外から見える顔は、大鎌にふさわしいものだ。

黒い髑髏。

正確には、髑髏をスタイリッシュにデザインした黒い仮面。

ネガのように白と黒が逆転しているが、西洋の死神の姿だ。

（死神を気取ったコスチュームは大勢いるが、今まで会ったことも、データを見たこともない新人だ）

見た目が死神であろうと、フレアは初対面の者にいきなり殴りかかるつもりはない。

だがミルクマンは違った。フレアのゆるんだ指を振りほどき、身体をひねって宙を跳ぶ。両手のコートの袖から、鋭い両刃の剣が突き出す。

フレアが止める間もなく、左右の刃が、死神の白いロープの胸を切り裂いた。だがミルクマンは勢いのまま、死神の胴体を突き抜ける。

「それは立体映像だ！」

つい叫ぶフレアの背後の空間を裂いて、いきなり大鎌が出現した。刃が、コスチュームの背中に突き刺さる。

「うわああああつ！」

感じたことのない衝撃が、全身に走り、意識に火花が散る。

アスファルトに倒れたフレアの瞳に、目標を失って吠えるミルクマンの姿が映った

「出てこい、クリームリーパー！俺と闘え！」

闇に落ちかけるフレアの意識に、疑問が泡のように浮かぶ。

（クリームリーパー？ 死神は英語でグリムリーパーのはずだけど……）

ねつとりと粘着する声が、どこからか滴った。

「おまえは誰かね？ ミルクマンの死体は、私の手でバラバラに切断したのだがね」

フレアは意識を失った。

最後に目に入ったのは、大鎌を受けて、倒れるミルクマンの姿だった。

★ まぶたが開くと同時に、フレアは罵声を浴びせられた。

「アメリカのヒーローマニアサイトでは、フレアは日本のヒーローのなかでA級にランクインされていたが、たいしたことはないな」

フレアは緑の芝生の上に、うつぶせに横たわっていた。

顔の前には、焦げ茶色のブーツがあ

る。フレアは一度首を振り、俊敏に立ち上がって、ミルクマンの黒い覆面に答えた。

「アメリカのオフビート業界では、わたしをA級だと評価してくれているのか。ありがたいね。それで、ここはどこなんだ」

周囲に視線をめぐらせる。きれいな芝生が広がり、大きな三日月型の花壇に色とりどりの花が咲き誇っている。

ミルクマンの背後には、リゾートのホテルを思わせる、三階建てのおしゃれな白い建物があった。

ホテルのまわりは、心が洗われる大なる風景が、どこまでもつづいている。日本ではなく、スイスアルプスのようだ。

見上げれば、白い雲が点々と浮かぶ爽快な青空だ。

「違う！ 本物の空じゃない。ここは密閉された空間だ」

その証拠に、太陽が空のどこにもない。フレアの目は、空も、周囲の景色も、すべて天井と湾曲した壁に投影された映像だと見ぬいた。

大きな円筒形の空間の中に、実物大のジオラマのごとく、ホテルと芝生の地面が存在している。

「いったい、これはなんだ!？」
「ここは乳を刈り取る者が地下に造った乳牧場だ」

ミルクマンが答えると同時に、音楽が鳴った。牧場の映像のBGMにふさ

わしい牧歌的な曲だ。

ホテルの洒落た玄関の扉が開き、中からわらわらと人があふれてくる。

人数は三十人。

全員が、二十歳前後の若い娘だ。タイプは様々だが美人ぞろいで、陽気に笑い、軽快なスキップで芝生を踏んでいる。

そのうちの二十人の顔を、フレアは記憶していた。警視庁から渡された失踪者リストの写真の顔だ。

リストに記載された女も、警察が把握していない女も、おそろいの白いレオタードを着ている。

やたらと明るい笑顔もあって、これから屋外エアロピクス大会がはじまるようだ。

不思議な服装以上に、目につくものがある。

全員のレオタードの胸が、大きく盛り上がっていた。

写真ではささやかなバスタの娘たちも、いまやFカップやGカップの胸を上下に激しく弾ませる。

たわわに実った乳房の先端では、高く太く勃起する乳首が、くつきりと浮き出ている。

「みんな、だいたいようぶか！ その胸はどうしたんだ!？」
声をかけるフレアを完全に無視して、巨乳美女たちが駆けぬける。

三十人が向かう先で、花壇がスライドした。

女たちは整列すると、いつせいにレオタードの前にあるファスナーを下ろした。

六十の豊満な乳房が、雪崩のごとくあふれ出る。

穴の中から、多数の奇妙なものが出現した。先端に透明なお椀型のカップがついた金属製のチューブが、蛇が鎌首をもたげるように立ち上がり、美女たちの胸に迫る。

六十個のカップが、六十の乳首に被さった。

「あんっ！」

「はあ」

「はじまるわ！」

女たちが口々に甘い声を出し、濡れた息を吐く。

ヴァンソンと機械音が鳴った。

六十の乳房の肉が、いつせいにカップの中に吸いこまれて盛り上がる。

肉の先端で、勃起乳首がさらに長く引き伸ばされた。

女たちが頬を紅潮させ、顔を蕩けさせる。

機械のうなりがつづき、乳首がふるふると振動する。赤く染まった顔が上下左右に動き、腰が大きくくねる。

嬌声が高く、熱くなり、偽物の青空に反響した。

「あひい、出ちゃうー！」
「出るわ、ほおっ！」
「はっんんん、出しますっ」
すべての透明なカップの内側が、白く塗りこめられた。

六十の乳首から母乳が噴き出し、乳房を吸うカップの内側にぶつかってはねかえっている。

呆然とするフレアの耳に、ミルクマンのしゃがれ声が聞こえた。

「あれは女の胸から母乳を搾り取る搾乳機さ。クリームリーパーは洗脳した女の肉体を改造して、特殊な母乳が出るようにしちまうのさ」

「なんのために？」

「母乳から麻薬を作る」

「あの人たちを止めなければ」

フレアは女たちへ近づこうとするが、ミルクマンの手で止められた。

「今は無理だ。改造された女をもとにもどせるのは、クリームリーパーだけだ。治療ができないかぎり、定期的に母乳を搾り出さないと、身体が破壊されちまう」

「なんてひどい！」

フレアは乳牛あつかいされる女たちの凄惨な歓喜の姿を見つめながら、ミルクマンにたずねた。

「そこまで知っているのなら、どうして警察に教えなかった」

「クリームリーパーは、俺だけの敵だ。誰にも渡さない」

「犯罪を社会に知らせるのも、ヒーローの務めだ」

「俺はヒーローなんかじゃない。クリームリーパーを殺したいだけだ」

フレアは、ミルクマンの両肩をつかみ、さらに言葉をつつけようとした。だが不快に粘つく声が、閉ざされた

空間のどこからか聞こえた。

「以前のミルクマンは、そんな物騒な物言いはしなかったがね」

「クリームリーパー！」

ミルクマンの憤怒の叫びを聞いても、姿なき声に変化がない。

「ミルクマンはアメリカの小さな地方都市ベルバレーを守る、無名ながらも立派なヒーローだったね。ベルバレーに私が建造したミルクファームをつぶしたときまでね」

ミルクマンの覆面の中で、歯がギリギリと鳴るのを、フレアは聞いた。

「私はミルクマンを殺し、バラバラに切断したのだがね。どうやって生き返ったのか、教えてくれないかね」

ミルクマンの頭上で空間が裂け、大鎌が振り下ろされた。

驚異的な反射神経を発揮して、ミルクマンが跳躍してかわす。

すかさず次々と大鎌が出現し、ミルクマンに殺到する。

コートとズボンとブーツがズタズタに切り裂かれた。散らばった衣服の下から現れた身体には、しかしかすり傷ひとつなかった。

フレアは目を丸くして、あらわになつたミルクマンの肢体を凝視する。

帽子と黒覆面を被つたままのミルクマンの胴体には、黒いレオタードが貼りつき、身体の凹凸を浮き上がらせた。剥き出しの手足の肌の白さは、白人のもの。

だが胸は、日本人としても小さい。

それでも間違いない、女の胸だ。ウエストのくびれも、尻の盛り上がりも、女の柔らかなライン。

筋肉質ではなく、華奢な体格で、人間以上の身体能力を出せるのは、やはりオフビートならではだろう。

空間を渡る声が、嘲笑をふくんだ音色になった。

「きみはミルクマンことロイ・スノウ君の娘のダナ・スノウ君だね。たしか今年で十八歳だね」

名指しされてミルクマンは覚悟を決めたのか、頭の帽子を捨て、黒覆面をむしり取った。

黒い布の下から、長い金髪が黄金の水のように流れ落ちる。黒いレオタードの背中、人工の陽光を反射してまばゆく輝いた。

白い肌に浮かぶ碧眼は、激しい怒りをたたえて、青い炎と化している。

対照的に、まっすぐな鼻筋と薄い唇は、優しい印象だ。

「そう。あたしはダナよ！」

しゃがれ声も、澄んだ高音に変化していた。覆面に変声機がしこんであったのだろう。

「父が遺した資料で、おまえの痕跡を追い、日本にまで来たわ」

「先代ミルクマンのおかげで、私の麻薬販売ルートは失われたね。日本に新天地を求めたのに、二代目が追ってくるとは困ったことだね。だが娘なら、使い道もあるね」

フレアとダナの背後の芝生の中から、

白い壁がせり上がった。

壁の表面から八つの金属の輪が飛びだし、一瞬でそれぞれフレアとダナの手足と足首にはまる。

輪は壁にもどり、二人とも大の字の形に、壁に貼りつけられた。

「こんなもの！」

フレアは渾身の力をこめて、手足を壁から剥がそうとする。だがびくともしない。

捕獲装置が強靱なのではなく、大鎌から受けた衝撃で、まだ本来の力を発揮できない。

ダナも同じ状態だ。白い美貌を引きつらせてもがくが、歯がたたなかつた。あきらめずに抵抗をつづける二人の前に、白い長身が出現した。

死神のシンボルたる大鎌は持つておらず、両手は純白のローブの袖に隠れている。

黒い髑髏の仮面が、フレアとダナの顔を睥睨した。

「きみたちにも、私の種を植えてつけて、かわいい乳牛にしてやろうね」

ローブの両腕の袖の中から、奇怪な細長いものが現れた。動物の腸に似た、異様な肉質のものだ。

色は毒々しい青で、先端には穴があり、粘液を垂らしながら開閉している。生理的嫌悪感を凝縮した触手の先端が、フレアとダナの口に押しつけられる。二人の唇全体が、キスのように、触手の穴にふさがれた。

生温かい生肉のような感触と、ヌメヌメした粘液で、唇を汚される。

二人とも堅く口を閉じることが、触手がヌチャヌチャと音を鳴らして蠢き、強靱な力で強引にこじ開けられた。

「んぐうっ！」

「むぶうっ！」

わずかに開いたところから、触手がねじこまれた。

唇を押し開かれ、歯列を越えて、侵入してくる。肉の塊で、舌と口蓋の間がいつぱいになる。

（ちくしょうっ！ こんなもの、嘔み切つてやる！）

フレアは顎に力をこめたが、わずかに青い肉の表面をへこませただけだ。

刺激された触手がのたうち、大量の粘液を喉の奥へ流しこまれる。

さらに触手自身がうねくりながら、食道の中へ潜つてきた。

「んっ、むぐううううっ……」

フレアの唇の隙間から、苦鳴が漏れた。

ダナもうめき声と粘液混じりの涎を、大量にあふれさせている。

口だけでなく喉の中まで触手で犯されて、二人は拘束された身体を前後に跳ねさせた。背中と尻が背後の壁に何度もぶつかり、打撃音を連続させる。

触手の先端から、大量の粘液がぶちまけられ、洪水のように胃へ流される。

「んんんっ、んぶるうっ！」

粘液を放出しながら、触手がずるずると後退した。

口から、触手が引き抜かれ、フレアとダナのえずく音がデュエットする。

顔を濡らす粘液をぬぐうこともできずに、フレアはどなった。

「わたしたちに、なにをした！」

「実感はないだろうが、きみたちの体内に、乳牛の種を植えたのだね」

「種だと、はうっ！」

フレアの身体に、熱が発生した。胸の奥が、赤く燃える石炭をつつこまれたように熱い。

「フレア君の胸はもともと大きくて頼もしいが、もっと私の乳牛にふさわしいサイズになるね」

フレアはうめきながら、搾乳機に母乳を吸われつづける巨乳美女たちの列に目を向けた。

（あの姿にされるといふのか！）

クリムリーパーの黒い眼孔が、ダナへ向けられた。炎に炙られて震えるなだらかな胸を見すえる。

「ダナ君の胸は、じつに残念だね。すぐに立派な乳牛になれるからね」

ダナは濡れた唇を堅く閉じて、父親の仇をにらみつける。だが喘ぎ声があふれてしまう。

「うっ、くうんんん……あうう……」

燃え盛る高熱に耐えきれず、仇敵の前で悲鳴に近い声をあげた。

「胸がっ！ はあああ——っ！」

黒いレオタードの胸が、爆発的に膨張した。動きやすさ重視の伸縮性の大きい布が、薄く伸ばされ、今にも引き裂けそうになる。

「うっ、うああ、く、苦しい！ 胸がつぶれるう……」

伸縮性が強いために、肥大した乳房が強烈に締めつけられた。微乳のダナがはじめて味わう苦しみだ。

「窮屈な胸を、解放してあげようね」

袖の中から、また一本の触手が伸びた。今度は真紅で、先端に一本の鉤爪が生えている。

爪の鋭い先端が、伸びきったレオタードの胸に触れる。

プツツ、と布が破れた。

熟したマスカットの皮が剥けるように、右の白い乳房があふれ出る。

左乳房も半分以上が露出したが、乳輪の周囲には黒い布が貼りつき、わずかに隠された。

ダナは自分の目の前の、異常すぎる光景に、愕然とする。

「こ、これが、あたしの胸なの!!」

レオタードの緊縛から解放された乳房は、二個のマスクメロンサイズと化していた。

見るからに重量感がありながら、乳房がパンパンに張りつめて、父の仇へ向かってせり出している。

乳輪と乳首は淡い桜色。色は愛らしいが、乳輪はぶつくりと盛り上がり、乳首は小指の先端ほどの大きさに勃起して、人工の空を指していた。

ダナの体格がスマートなだけに、豊満すぎる乳房がアンバランスだ。均衡の崩れが、かえって淫らな雰囲気醸しだしている。

「ダナ君、すばらしい成長ぶりだね。フレア君の胸はどうかね」

「髑髏仮面が黒い視線を向けると、フレアの胸が巨大化している最中だ。苦しげに左右に動く朱色の顔の下で、白いコスチュームの胸が容赦なく盛り上がっていく。」

「フレアの脳裏に、自分の出自にまでさかのぼる過去の悪夢が浮かんで消える。」

「く、くそつ、あうう、また、身体を他人に、くうつ、いじられるなんて、はああおっ！」

「叫ぶフレアの胸の表面を、赤い触手の爪が走った。コスチュームの胸の部分が、切り取られて落ちる。」

「左右の乳房全体が、隠すところなく露出させられた。」

「わたしの胸が、あううつ、こんな姿に……」

「もともと豊かなフレアの乳房は、ダナの膨張巨乳よりもさらにひとまわり大きい爆乳となっていた。」

「きつく張りつめ、ずっしりとした重みをはねのけて、前へ突出している。今も搾乳されている女たちの誰にも負けない猛迫力だ。」

「ダナとは違って、乳首も赤く色づき、痛々しいほどに高々とそり立って、存在を主張している。」

「二人とも、すてきな乳牛ぶりだね。いい母乳を出せるように、熟成させてあげようね」
「クリームリーパーの両袖から二本ず

つ、紐のように細いオレンジ色の触手が伸びた。」

「フレアとダナの肥大乳首の根もとに、紐触手が何重にも巻きつく。ダナのレオタードの下に隠れた左乳首は、黒い布の上から縛られた。」

「四つの乳首が、くびり切る勢いで締めつけられる。」

「ひつきいっ！」
「フレアの全身が震え、改造爆乳が激しく上下左右に揺れ動く。動きが、触手に縛られた乳首を、さらにいたぶる。」

「くおおうっ！」
「ダナも身体を痙攣させた。豊乳が勝手に暴れて、自身を責めたてる。」

「だが苦痛ではない。二人ともに、同じ感覚を味わわされている。フレアはさらに赤みを増した乳筒から発する疼きに、戦慄した。」

「(き、気持ちいいっ！ 乳首をちぎれるほど縛られているのに、気持ちよくなってしまうなんて！)」

「経験の少ないダナは、つい声に出してしまう。」

「はあう、ミルクファームに囚われた女が、こんなに感じていたなんて！」
「父の遺書がわりのデータで、私たちの肉体的変化については知っていた。しかし知識と現実とは、まったく違う。想像を超えた快感だ。」

「フレア君も、ダナ君も、たまらないだろうね。私の乳牛になると、巨乳が最高の快感発生器官になるからね」
「クリームリーパーが触手を波打たせ

て、乳首を細かく動かした。上下左右に動く乳首に合わせて、二人の悲鳴が次々と音色を変える。「母乳を搾られるのが、うれしくてしかたのない身体になるためには、もつともつと乳房を熟成させなくてはならないね」
「ダナが磔にされている壁の背後から複数のマニピュレーターが現れた。」

「まずは、ダナ君からだね」
「胸に、機械の腕が集まってくる。先端には、曲面を描く無機質な棒がついていた。」

「棒がいつせいにヴヴヴヴヴとうなりをあげて、振動を開始する。」
「ダナの顔がきつくこわはる。ひと目で、その機械がなんなのか、理解してしまった。」

「ダナ君は処女だが、パイプレーターだとわかる知識はあるようだね」
「髑髏面の言葉に、ダナは青い瞳でキッとらみつける。」

「クリームリーパーがクックツツと粘つく笑いを響かせた。」

「処女だと見破られたのが、不思議なようだね。体内に植えた種が、私に教えるのだね。ダナ君は男に貫かれたことがないことをね。はじめての愛撫を楽しむのだね」

「左右の巨乳に、複数のパイプが押しつけられる。」

「ひっ、はひっひっ！」
「張りつめた巨乳の表面のあちこちから、同心円状の波が起きた。」

「波同士がぶつかり、干渉と共鳴をくりかえして、乳房全体を大きく揺らす。女の象徴を、おもちゃにされている。長い金髪が逆立つほどの怒りを抱きながら、ダナの神経は猛々しい快感に触まれた。」

「(気持ちいいっ！)」
「声に出そうになる。」

「パイプの震動が乳房の中で反響するたびに、生まれてはじめて感じる快感の電流が、胸から全身へ伝わっていく。」
「(気持ちいいっ！)」

「同じ言葉が、脳内でリフレインする。」
「ダナは、幼いころから知っていた。牛乳配達人の父親がオフビートであり、職業と同じヒーロー名で、ベルバレー市の正義と安全を守っている。」

「正義のヒーローの父親を誇りに思い、娘である自分も品行方正であらねばならないと誓った。」
「だから気軽には男に身をまかせなかつたのだ。十八歳の今まで、キス以上の経験はない。」

「自慰もいけないことと見なして、官能の悦びをなにも知らなかつた。」

「(気持ちいいっ！)」
「頭の中で反復する悦楽の言葉が、口に出そうになり、ダナは前歯で下唇を強く噛んだ。」

「(だめっ！ 言っただめよ！)」
「勝手に乳悦を訴える声を、懸命に押しとどめる。」

「(父さんを殺した奴に、気持ちいいなんて、聞かせられない！)」

「(父さんを殺した奴に、気持ちいいなんて、聞かせられない！)」

「(父さんを殺した奴に、気持ちいいなんて、聞かせられない！)」

唇から血が出るほどに歯を立てる。望まぬ乳肉の愉悅から気をそらすために、痛みを食った。

（恥ずかしい言葉を、絶対に外へは出さないっ！）

機械の淫具は休みなく蠢く。巨乳の奥から、快楽を掘り出されつつける。

拘束された全身を駆ける快感電流に、神経を焼かれ、歯と唇の隙間から熱いうめき声がこぼれてしまう。

「うんっ……はっううう……んん、くふうううっ！」

パイプにもみくちゃにされる巨乳の揺れが大きくなるとともに、ダナはさらなる自身の変化を感じた。

（なに!? 胸の中で、また、おかしなことが起きているわ!）

振動をつづける巨乳の中で、奇怪な感触が湧いた。比喩ではなく、乳肉の内側に、液体の圧迫感が泉のごとく湧いている。

その意味に気づいて、ダナはつい下唇を離した。

「あ、あたしの中に、母乳が溜まっているわ!」

「先輩の乳牛たちと同じに、ダナ君の巨乳が刺激されて、母乳を分泌しているのだね。母乳が溜まれば溜まるほど、気持ちよくなるからね」

パイプの群れのうなりが高くなる。白い乳肌の表面が複雑に波打ち、胸の中の母乳が渦を巻く。

「ふうああああっ!」
（む、胸を、中から嬲られるわ! 母

乳にあたしの胸を責められて、おかしくなるうッ!）

もはや、まともな快感ではない。処女がはじめて味わう胸への刺激が、ありえない魔性の愛撫へと進化する。

「はああ! あうううッ!」
（胸の中が溶けて、母乳に変えられているみたい……なんて恐ろしくて、なんて気持ちいいの! あああ、負けな

い! あたしは、こんなことには負けなわっ!）
喘ぎ声を連続させながら、なおも抵抗の意志を表すダナの顔を、フレアはじつと見つめている。

その視線が、クリームリーパーとぶつかった。
「待たせたね。フレア君の爆乳も熟成させてあげようね」

フレアの背後から、新たな四本のマニピュレーターが姿を現した。
機械の先端にあるのは、コロコロまわして床のゴミを取る掃除器具にも似た、白い円筒形のローラーだ。

「日本のヒーロー有数の頑強さを誇るフレア君なら、この熟成方法にも耐えられるね」
フレアは体内で大きくなる不安に、背筋を冷たくした。

（わたしの身体は、苦痛にはいくらでも耐えてみせる……でも、性の快感には……）
また忌まわしい過去が、脳裏によみがえる。記憶に反応して、紐触手に縛られた両乳首がズキズキと疼き、口か

ら喘ぎ声が漏れた。

「ううっ!」

四個のローラーが襲いかかってくる。二つの乳房の素肌を、それぞれ二個ずつのローラーが取りついた。

右の乳房は左右から挟まれて、縦に押しつぶされた。

左の乳房が上下に挟まれて、横につぶされる。

乳球がグニヤリとたわむ。乳肉が盛大に前へせり出し、人体とは思えないいびつな形を作った。

乳首の中に肉が移動したかのように、勃起がいつそう大きくなり、紐触手の喰いこみがさらに厳しくなる。

「くおおうっ! 胸が、こっ、壊れるうう——っ!」

フレアは不自由な胴体を暴れさせる。しかし四つのローラーから乳房を抜くことはかなわない。

女なら見ているだけで血の気が引く乳房の惨状だ。フレア自身も、自分の胸から目をそむけたくなる。

だが苦痛は感じない。つぶされ、歪められた爆乳からは、痺れる快感があふれ、拘束された全身を蕩けさせる。

「はうあああ……んくっ……ひざいいっ!」

ローラーが回転をはじめた。
乳肉になかば埋まっていた四個の円筒が、いつせいに乳房を前へ前へと押し出す。

前へせり出した乳肉が、上下左右に跳ねまわり、縛られた乳首が緋色の軌

道を描いた。

すぐに恐れていた感覚が、フレアの胸の中にも生まれる。

「ひいっ、わ、わたしの胸にも、母乳が溜まるっ!」

凄絶な快楽とともに、脳内で記憶のフラッシュバックが閃光を放った。フレアが母乳を溜めるのは、今が最初ではない。

フレアは、狂気の科学者無秩序博士に造られた人工生命体だ。
ドクター・デイスオーダーは自分の歪んだ欲望を満足させるために、フレアに快楽とともに母乳を放出する機能をつけた。

フレアは生みの親と対決したときに、あらゆる肉の快楽をそそぎこまれ、とめどなく母乳を噴きつづけた。

その忌まわしい事件が解決した後に、フレアは自分の意志で母乳を出すことはなくなった。
今、再び、自分の胸を勝手に操られて、望まない母乳を作らされている。

（いやだ! また母乳まみれになって、肉奴隷になるのは、絶対にいやだっ!）

脳が燃えるほどの嫌悪を抱きながら、爆乳を凶暴に刺激される快楽を得てしまう。

（くやしっ! こんな情けない身体に造られたことが、くやしくてたまらない!）

機械の餌食になり、引きつる美貌と歪んだ乳房を快楽の汗で濡らすフレアとダナを、クリームリーパーがじつと

ながめる。表情は曇り顔で隠れているが、自分の作品の完成度を確認する芸術家の風情だ。

「いいね。最後の熟成をしようね」

二人の背後から、新たなマニピュレーターが伸びた。先端は、繊細な毛がびっしりと並ぶブラシになっている。四つの勃起乳首にブラシが押しつけられ、クニヤリと曲げられた。

「はうっ！」

「あぐっ！」

乳首の先端から根もとまで、鋭敏な快感神経の凝集部分が、毛の束に執拗にこすりたてられる。

「ひゃやおおうっ！ ダメっ！ きつ、きつひい——っ！」

外からのローラーの強烈な圧迫。内側からの母乳の水圧。加えて、乳首を蹂躞するブラッシング。

すべてが集まり、爆発的な乳悦の大嵐となつて、フレアを打ちのめす。制御できない快感の暴走が、さらに母乳の分泌を大量にうながした。

ローラーで前に押しだされ、限界まで膨張していた左右の乳房が、母乳の過剰な分泌でさらにミチミチとふくれあがる。

「あおおおおつ、くおおうう——っ、だめえっ！ もう、だめえっ！」

フレアは首をのけぞらせ、後頭部を壁に打ちつけた。

凄絶な絶叫が、偽の青空へ昇る。

「胸がっ、わたしの胸が、壊れるふううううう——ううっ！」

乳首に喰い入った紐触手がちぎれる。ドビュッ！

ビルルルッ！

噴出音を轟かせ、解放された左右の乳首の先端から、二筋の白い水流が放物線を描いた。

「カッ……」

フレアは射乳の衝撃に息をつまらせる。大きく開いた口からは、かすれた音しか出ない。

「……クッ………コフ……」

ドッ、ドッ！

ビュルルルルル——ウッ！

噴乳は止まらない。猛烈な水圧で乳首が激しく震え、母乳が上下左右に飛び散る。飛沫が広範囲の芝生を、白く濡らしていく。

噴乳の圧力が弱まり、乳首からまっすぐ下へ落ちはじめたときに、やっとなフレアは絶頂の声を出せた。

「イクうう……イッちゃうう……」

フレアの後で、ダナの乳首の触手がちぎれた。

二筋の母乳を高々と飛ばすと同時に、ダナは生まれてはじめてのエクスタシーを体験する。

「ハッウウウウウ！！」

しかし、表す言葉が出ない。アメリカ人ならこういうときになんと言おうのか、知識はある。しかし意識に上らせることもできない。

「ウウ——ウウッオオオアッアアア！！」

ひたすら発情期の猫の叫びのような

声、喉から流れる。

「フオウッ………」

母乳を出しきる前に、ダナの首がガクンと前に落ちた。だらしなく開いた唇から涎が滴り、乳首から白い滴を垂らす自身の巨乳を濡らす。

「フレア君も、ダナ君も、熟成したね」

クリームリーパーの言葉が、二人の鼓膜に触れたが、意識にはとどかなかつた。

★

フレアとダナが射乳絶頂の衝撃から正気を回復してから、どれほどの時間がたったのか。

偽の陽光のもとで、二人は昆虫標本さながらに壁に貼りつけられたまま、ぼつたらかきにされている。

時計はどこにもなく、天井の青空には太陽がないので、時間の経過を計りようがない。

フレアの場合は、ダナと二人きりにされてから、二時間あまりがすぎている。

クリームリーパーは二人の母乳を集めて、煙のごとく姿を消した。

搾乳されていた女たちも、ホテルへもどつたようだ。

二人の胸は、大量に母乳を放出しても、少しも縮んだ形跡はなかった。膨張した乳房に視界をさえぎられて、足下の芝生が見えない。

（このまま、わたしたちを干からびさせるつもりじゃないだろうな）

フレアはとなりのダナの横顔と横乳

に目をやった。

ダナはずっと無言のままだったが、ふいに口を開き、大声を放った。

「クリームリーパー！ 出てこい！ あたしと闘うのよ。必ず父さんの仇を取つてやるわっ！」

フレアは心配でたずねないではいられない。

「勝ち目があるのか」

「うるさい。フレアには関係ないわ。奴とは闘わなくてはならないのよ！」

「でも、うっ！」

二人の前に、また空間を裂いてクリームリーパーが出現した。ダナのどなり声を無視して、ねばねばと話しはじめた。

「きみたちの母乳の分析が終わったね。ダナ君の母乳はごく普通だね。他の乳牛の仲間に加わつてもらおうね」

「あたしと闘え！」

「フレア君の母乳はさすがに普通ではないね。私の麻薬には使えないが、乳牛たちに飲ませれば、搾乳量が増える効果が期待できるね」

フレアたちの背後で、ホテルの扉が開いた。また白いレオタードの巨乳美女たちがスキップで出てくる。

フレアとダナを、にこやかな笑顔がかこむ。デパートのサンタクロースに集まった子供のようだ。

いきなりフレアとダナの手足を拘束する輪が開いた。自由になった二人はまっすぐにクリームリーパーへ向かって跳びかかる。

「あおおおおつ、くおおうう——っ、だめえっ！ もう、だめえっ！」





今日の供物の
味も悪くないぞ
もど

ハハハハ
実に愉快じゃ
もど



あ…
ありがとうございます
ございます

ヒルダ様の
お越し以来
畑も十分に
潤いまして…
…その…

水を司る精霊少女



あ…あの…
ヒルダ様…
出来ましたら
そろそろ
水精のお力を…
雨を止めて
頂けない
でしょうか…



まったく
旅の途中
10年ぶりに
この地に来て
みれば…

このような
立派な街が
出ていよう
とはなり

フェアリーレイン
Fairy Rain

ななみしずか
七海静歌
漫画 COMIC



人間風情が

この私に
指図する気か!!

あぐりん

しかし
このままでは
街が……

それが
どうした?

…は!?

お前達は何か
勘違いをして
いるようだな

私はこの街が
気に入った
だから
わざわざ
国中の雨雲を
集めたのだ



雨を止める
予定はない

なんですと!?

そしていずれ
この美しい街を
湖底に沈め
我が屋敷とする

お前達は
それまでの間
私に供物を
捧げ続けるのだ!!



そんな...

明日もまた
美味しい物を
作っておけよ



そうすれば
命だけは
助けてやるぞ
奴隷としてなッ

ハハハハハ
ハハハハハ
ハハハハハ!!



.....司祭
これは何だ!

これは
...その



「ハッ...」



司祭様...!!

うむ...



ちっ



おっと

お前には
こいつが
お似合いだ
悪魔め



大人しく
しておれば
いいものを

人間はいつも
最後は同じ
反応をする



剣など使った
ところで
人間ごときが
水精である
私に勝てる
わけが無からう

はは

ひっ



あああ!!
あああ!!
あああ!!

今すぐ
殺して
やろうか?!

お前達は
黙って供物を
持ってくれ……

ばっ…!?



や…
やった!!

電撃…!?
なんで…!?

は…!?

しまった…
こいつ

魔術師…
だ…た
…のか…

何を
して
いる…!!
早く
縛り
上げな
さい!!

は…!!
は…!!
は…!!

素直になりや
痛い思いをせずに
済むんだぜ

どうだっ
このっ

くそ…
人間なんか
捕まるなんて…
それに…この手枷
おかしい法呪が
かかって…

さっさと
降参しやがれ!!

だれが…
なんだ
その反抗的な
目は!!

どうだ!!

このっこのっ
これで……

どうですか
ヒルダ様？

まだ街から
雨雲を遠ざけて
いただく気に
なりませんか？

フンッ
人間…が

私に指図するなど
言っただろう

街の水没を
待たずに今すぐ
殺してやろうか？

お…？
なんだ？

あくッ

き…汚い手で
…触るな…
家畜の分際で!!

このっ
自分の立場が
分かってるのか!?

魔力を
封じられりゃ
ただの女と
変わらねえ
くせに!!

もに
も

ヒルダ様は
こっちが
弱いのかよ



なっ…
何をするッ

きやあ

^^
^^
^^
まあ試して
みりゃ判るさ

生意気な
おっばい
しやがって

こりやあ
しやぶり甲斐が
ありそうだぜ

セリセリ

貴様ら
それ以上…ッ
ん…んあッ!?



おおっ!?
良い反応じゃ
ねえか!!

きつ
気持ち悪い!!
舐めるなあッ



気持ち悪い?
じゃあこの
ぶつくり膨らんだ
乳首はなんだよ?

あッ!!

こりや本当に
効果があり
そうだぜ

オイ
例のやつ
持って来い



これが何か分かるか？

ただの針じゃねえぜ

司祭様がわざわざ都から取寄せた特別品の一つさ

針…!!
まさかこれを!!

すびすび
びびび

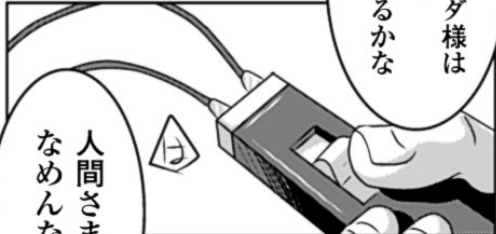


この針は最近都で開発された発電機つてのが付いていて

原理は…よく判らねえが俺達みたいな普通の人間でも電撃魔法が使えるつてわけよ

さてヒルダ様はどこまで耐えられるかな

水精様は電気に弱いらしいじゃねえか



人間さまをなめんなよ!!



電気を……作るだど？そんな馬鹿な……



お...おい...

すげえ
大洪水じゃ
ねえかよ

.....!?
なに...これ...!?
おっほい
...!!!



あかあか
あまあま
あまあま

カカカカ
カカカカ
カカカカ
カカカカ

あまあま
あまあま
あまあま

はははは
こりゃ面白い!!
こいつ刺激されて
乳汁漏らして
やがるぜ!!



そらみんな
手伝ってやれよ
ヒルダ様の
水芸大会だ!!

やめろッ
この無礼者ッ

私に触るなッ
揉むなああああ
あああッ

さすが水精サマだ
こんな芸当も
出来るのかい

味も美味えぜ!!
やっぱ良いもん
食ってるだけは
あるな!!

なんだあ?
俺達の供物は
みんなここに行って
たつてののかよ!!

くそッ
ふざけた
胸だ!!

びゅる
びゅる
びゅる

はむ
はむ
はむ

んんん

それじゃあ
今までの
供物の分
たっぷり
取り返して
やらんとな

あ...!!
うま...!!

カリッ

まったく
だぜ



少年×勝ち気な精霊×不幸体質の眼鏡っ娘で送る
いちやらぶこメデイ登場!!



おしえて 守護亜ま

小説 NOVEL 二空道巨 二空道巨
ながより 長頼
挿絵 ILLUSTRATION

「行ってきます」

「うむ、行くとしようぞ、雄太」

早朝の住宅街。ブレザー姿の少年が扉を閉めた。玄關脇に立つ古風な言葉遣いの少女の髪には豪華な簪が光る。平日早朝からの振袖姿に無邪気な笑顔は違和感ありまくりだ。

「雫姫。今日も……ついてくるの？」

「当たり前じゃ。守護霊たるもの、未熟者の本人から離れたりはせぬ」

はあ、とため息をつく少年の前で女の子がふわりと浮かび上がった。物理法則を完全に無視している。

「独り暮らしの未熟者にもこうして話相手がいるのじゃ。幸せじゃろう」

ふわふわと浮かびながらついてくる守護霊さまは今日も上機嫌だ。

腰にまでかかりそうなほどに長く、艶やかに流れる黒髪。小さめに整った顔には、まつげの長い、気の強そうな誇りに満ちた目と、いかにも勝気そうな太めの眉。小鼻も小さくまとまった可愛らしい造作の鼻。そして、驚くほどに滑らかで白い肌と対照的に赤い、艶やかな唇。要するに、とびきりの美少女がそこにいた。

「それはそうかもしれないけど……って、もう学校じゃないかっ」

（くすくすっ。今さら遅いわ）

慌てて口をつぐんだ少年の後ろを上機嫌でついてくる雫姫。人形のように整った顔立ちと、すつきりとしなやかな肢体を現代風にアレンジされた振袖に包んでいた。

花と流水を配した華のある衣装は裾が極端に短くなっており、太腿の付け根が今にも覗けそうな光景に少年が戸惑うのを楽しむのが彼女の趣味だ。

「お、おはよう、衣谷」

「おはよう、衣谷君」

声をかけてくれる級友たちに控えめな笑いを返す雄太は当たり前の学生にしか見えないが、友人たちの彼に向けて視線には甘く見たり軽んじたりする雰囲気はない。

（うむうむ。衣谷家の当主として、それなりの信頼を得ているようじゃの）

（し、雫姫、もう学校なんだから……）

超強力な守護霊のおかげで、雄太は何をやってもそれなりにできる奴として一目置かれていたけれど、それが自分の実力ではないことは少年自身がよく知っていた。

（ふふん。雄太を幸福に導くのが我が使命。よいことじゃ）

（そうかもしれないけど……守護霊のくせに世話焼きだし傍若無人だし、それでも……家族は雫姫だけだしなあ）

黙ってれば、本当に美形でもあるし、独り暮らしの身としては本当にありがたいのだが、彼女はしばしばやりすぎしてしまう傾向がある。

（わらわがおれば何の心配もいらぬ）

言葉の通り雫姫の霊力は強大だ。霊の身でありながら暖房のスイッチを入れることなど朝飯前だし、テストのヤマかけ、交通事故の回避、商店街のくじ引き、駄菓子店が当たったらもう

一個など、数えきれないほどだ。

（むむ、今日も女子が待っておるぞ）

見覚えのある女生徒が、かすかに頬を上気させてこちらをうかがっている。歩みよるタイミングをはかっているらしい。可愛らしいデザインの前ブレザーの制服の胸は誇らしげに盛り上がりつつあるが、その表情はむしろ控えめというか、オドオドした雰囲気すらある。

（ふふん、雄太にふさわしいかの？）

（いや、ぼくは女の子は……）

雄太は女の子が苦手だ。少女たちが少年たちの目の届かないところで異性をどのように品定めしているかをよく知っている。どんな女の子も、守護霊さまの目はごまかせない。彼女たちの時に無邪気な、時に陰湿な悪戯についてもだ。

それに、雄太の基準は雫姫だ。時代が違うとはいえ、姫というだけあって素晴らしい美少女である雫姫と四六時中一緒にいるのは他の女の子への評価は厳しくならざるをえない。

「あううっ」

駆けようとした少女が何かにつまづいたように上体をつんのめらせ、辛うじて転ぶのをまぬがれながらこちらに向かってくる。

（同じ学年の藍村という娘じゃな）

綺麗というよりは可愛い系……ぐら

いしか思いたせないが、近頃のほっそりとした体型の多い女生徒の中では

ふつくらと女性らしいボディラインが魅惑的だ。何よりも、控えめな表情は

なんだか人をほっとさせる。

（学力は普通、運動は苦手。ドジっ娘のメガネっ娘で、むっちり系のいじめられっ娘として一部で大人気という評判の女の子……と。ふむ。守護霊が弱いばかりか不運に憑かれておるな。不幸体質という奴じゃ）

ドジっ娘というのは不幸体質の表れということらしい。超強力な守護霊である雫姫は、周囲のさまざまな霊からも情報を収集してしまう。

「あ、あのっ。衣谷……雄太さんっ」

気付いた時には藍村めぐみは目の前にやってきていた。間近で見るとかなり可愛い。童顔ぎみな顔にカチューシャが可愛さを強調し、垂れ目ぎみの大きな目と下フレームのメガネが、八の字ぎみな眉毛をさらに強調していたりする。

「は、はいっ」

めぐみの慌てぶりに思わずどもりがうつつてしまった。

「あ、あたし藍村めぐみっていつて」

「うん、知ってる」

その瞬間、少女の顔が輝いたようだった。雄太が自分を知っていたことがよほど嬉しいのか、めぐみの表情は歡喜に彩られていた。

「突然ですけど、あ、あたし、衣谷

さんのこと、好きですっ。……よっ、よかつたら……その……」

せつかくの勢いも一瞬のうちに失速してしまい、最後の方は口ごもってしま

った。

「ふむふむ、本気のようにやぞ？」
「よ、よしてよ雫姫。どうせ……」

大抵の少女は、親の遺産で独り暮らしをしている少年に興味があるだけだ。そんなヒソヒソ話をよそに、うつむいてしまっためぐみはもじもじと自分の手をコネコネしはじめていた。

見下ろす守護霊の顔に皮肉な笑みが浮かんだ。

「ほほう。この娘は、雄太を思っ自分をも慰めたこともあるようじゃの」

「ぼ、ぼくをつ!!」

雄太は奥手だが、性への興味はもちろんなある。思わずこの藍村めぐみがその豊かな胸や滑らかな肌を自らまさぐっているところを想像してしまう。

「はっ、はううっ」

顔をあげた少女の目には涙が今にもこぼれそうなほどにたまって、まつげの上で揺れていた。頬が真っ赤に染まり、眉が悲しげに歪められている。

「わ、私、その、ごめんさいいつ」

同学年の少女はそれだけ言うと、困惑している少年に背を向けて小走り駆けて去った。まるで逃げるようなその姿に罪悪感を覚える。

「どうしたのかな、彼女……」

「さあな。雄太との格の違いじゃろう」

じつと見つめる雄太の前で雫姫は何知らぬ顔で微笑んでみせる。雫姫が何かをしたのだらう。彼女は自分のお眼鏡にかなわぬ女は雄太に近づけないと断言しているくらいだ。

「藍村……めぐみさん、か。ちよつと

気になる子だったなあ……」

普段は女の子をそれとなく追い払ってくれる雫姫の存在はありがたいけれど、今日は少し惜しい気がした。

「ねえ、雫姫」

返事はなくても彼女は必ずそこにいることを、少年は知っている。

「昼間の女の子とつきあったら、まづいのかな」

「あの不幸体質の娘か。感心せんな」

やけに裾の短い振袖はミニスカ風。ストッキングに足袋という組み合わせが不思議に色っぽい守護霊さまは、意外なほどに現代社会に適應している。

「でも、いい口みたいだったけどな」

ふう、と大きいため息をついた美少女霊は肩をすくめてみせる。

「不幸体質の嫁など、衣谷家に迎えるわけにはいかん」

「雫姫があのコを守ってくれるのは？」

「何気ない一言だったが、守護霊さまの眉ががりあがった。」

「なんでわらわがあのような娘をつ」

「ぼくの好きな女の子なら、一緒に守ってくれるかと思つて」

ひくひくと気の強そうな眉が震える。

「わらわは衣谷家の守護霊であつて、お主人の守護霊ではないぞ」

その声にかすかな動揺がまじっているのに、少年は気付かない。

「だつて、ぼくだつて将来は結婚した

り子供ができたりとか……」

幼いころに両親を失った雄太は家族願望が強い。

「だから、いつもぼくに付けてくれる力を他にも付けてくれないかな」

珍しく攻勢に出た雄太の前で振袖姿の美少女霊は顔をこわばらせていた。

「雫姫にはそれだけの力がないの？」

「わらわは第一等の力を持った守護霊じゃぞつ。いい加減にせんかつ」

いつの間にか、二人とも熱くなつてしまつていふことに気付かなかつたのが不幸だった。少年の口から、決して出してはいけない一言が出てしまう。

「第一等だつて？ だつたら、なんで父さんや母さんは……つ」

口に出した瞬間、もう後悔していた。雫姫は衣谷家の守護霊だが、この土地にその力を依存している。他の土地にまでは力が及ばない。両親の死は誰にでも平等に訪れるもので、雫姫のせいではなかった。

「わ、わらわだつて……も、もうよいつ

お主の守護霊も今日かぎりじゃつ」

今にもつかみかかりそうな、間近での雫姫の顔。彼女のこれほど余裕のない表情は初めてだった。

「し、雫姫……つ」

引き止めようとする前でツツとかき消すように消える振袖姿。彼女のまつげに光るものがあつたのが、少年の心にトゲとなつて突き刺さつていた。

こうして体験することになった、生

まれて初めて雫姫のいない生活。それ

は、完全な独り暮らしというものがいかに味気なく、また寂しいものであるかを思い知らせてくれた。

朝の起き抜けにかけてくれる声もなく、朝食を食べる時も、登校時に見守つてくれていた姿もない。

その上、第一等の力を持つ守護霊である雫姫によつて集められていた幸運が残らず逃げ出してしまつたかのよう

に不運が押し寄せてきたりする。

犬のフンを踏むのを皮切りに、授業中には教師にあてられ、購買でのパン

は売り切れていて買えない。校舎から出るたびに流れボールが命中し、下校時には自動車にはねられそうになる。

「ぼ、ぼくつて、もしかして本当はすごい不幸体質……?」

そんなことを思うほどに、トラブルの連続に見舞われた雄太だった。

その一方で、雫姫といえは……。

「まったく、衣谷家の当主ともあろうものが器の小さいことをつ」

守護すべき家を飛び出た守護霊は、腹を立てたまま町をうろろして

どれほどの時間が経つたものか、街はすでに夕方になつていた。

「雄太はどうしておるのか……つて、もう関係ないのじゃつ」

不安そうに歪められる眉。勝気そう

な姫君の表情には明らかに憂慮があるのに、自分から折れることなど考えられないのが彼女だった。

「雄太さん……」

衣谷家を離れても、つい少年の名前

を追ってしまふ。その思念はかなり強く、強力な霊体である彼女にとつては漏れでた思念をたどるのは何の造作もなかった。

「雄太さん、どうしたのかな……すぐくつらそうな顔してた」

思わずドキリとした雫姫が思念を追ってたどりついたのは、あの藍村めぐみの家だった。それは気弱な女の子の独り言。部屋の窓の外からも制服姿のまま机に突っ伏しているのがわかる。守護霊たる雫姫が引き寄せていた幸運がなくなつた今、その反動で雄太にはさまざま不幸がふりかかっているはずだ。並々ならぬ不運に遭遇しても不思議はない。

「わらわとしたことが……いや、雄太が悪いのじゃつ」

ぶんぶんとき長い髪を振り乱しながら意地を張る守護霊さまは、ついつい女の子の独り言に聞き入ってしまった。

「こんなドジをするなんて珍しいって笑ってたけど、寂しそうだったな……」

少年は外では感情をあまり外に出さなかった。一人の時か、雫姫と二人だけの時以外は静かな、おとなしい姿しか見せない。

（雄太の変化に気付くとは……よほど思いつめておるのじゃな）

衣谷家の守護霊たる彼女は、不幸体質の娘を雄太の嫁に迎えるつもりはまったくくない。だが、めぐみの思いもわかつてしまった雫姫は二階の窓の外

からべこりと頭を下げた。

「すまんの。雄太にお主を近づけることはできないのじゃ」

「くすん。あ、あたしなんかじゃつりあわないってわかつてますけど……」

ぽかん。雫姫の勝気そうな、どちらかといえばシャープな美貌から緊張感が消失した。この百年ほどで覚えた疑問符が頭の中を駆けめぐる。

「そ、それで、わざわざ謝りに来てくれた……わけじゃなさそうですね」

「うむ、実は……って、わらわが見えるのかつっ?!」

当たり前だが、普通の人間には霊魂である雫姫の姿は見えない。もちろん声だつて聞こえるはずがない。

「あ、あたしは霊媒体質ですから。あははつ」

「こんなに緊張感のない霊媒体質があつてたまるかつつ!」

霊媒体質の人間というものは、悪霊から身を守るために緊張感に満ちているのが当たり前だ。めぐみのように思念を垂れ流しにするなど考えられない。

（そ、そういうえば、この前は貧乏神が憑いておつたが……）

今現在は何も憑いてはいないようだが不幸レベルも今日は多少下がっている。

「あつ、だめですつ。守護霊さん、雄太さんから離れますよつつ」

「それは雄太が悪いのじゃ。わらわはもう奴の守護霊じゃないのじゃつ」

どうやら思った以上にめぐみの霊力は強いらしい。かなりのことがわかる

ようだ。

「うーつ、雄太さんの調子が悪かったのは、守護霊さんとケンカしたからだったんでね……」

「ちよ、調子が悪かったじゃと、雄太が?」

思わず声が上ずってしまった。めぐみはそこに畳みかけるようにして、今日の雄太の災難を羅列しはじめる。

「購買でパンが売切れでお腹を空かせて、友達にもらったパンが古くてお腹を下したり、サッカーの授業では敵のボールを止めようとしてまともにボールを受けてしばらく立ち上がれなかつたり、飛んでいる鳥のウンチをひっかかれたり……」

「そつ、そんなにひどかつたのか」

普段の幸運の分、不運がたまつていたのだろう。がつくりとくだれる雫姫の前で、めぐみまで目が涙をためているほどだ。

「そうですね。まるで普段のあたしみたいで……早く戻つてあげてください」

「だめじゃ。もう雄太の守護霊はやめたのじゃ」

ぶんぶんときそばを向いて腕を組んでみせる雫姫の髪がブルブルと震えていた。

「あう。ゆ、雄太さんが可哀想ですう」

「大丈夫じゃ。雄太はお主と違って不幸体質じゃないからの」

「あううつ。そんなあ……」

両手を胸の前で握つたままのめぐみ

の必死な表情に、雫姫の心が動いた。

（こうしてみると顔立ちも性格も悪くないのじゃが……どうもこう、意地悪したくなるというか……）

雫姫の表情に笑みが浮かんだ。心を慰めるのによさそうだった。

「それよりは、むしろお主を幸せにしてやる方がやりがいがある」

「は、はいい?」

すつと窓ガラスを通り抜けてきた雫姫がめぐみの目の前で悪戯っぽく笑う。いかにも霊体と言わんばかりの浮きつぶりだ。

「わらわの力で、お主に幸せをもたらしてやろうぞ」

「あ、あたしはいいんですつ」

至近距離から雫姫の美貌を見てしまっためぐみが真っ赤になる。

「そんなことはあるまい。言ってみるがよい。かなうかもしれないぞ」

自信満々に言う雫姫。そう、彼女が本気になれば金銭にしろ名譽にしろ、普通に願う分くらいならばかなえることができるはずだった。

「あ、あたしは今のままでも……その……あの……（雄太さんと）……」

「雄太はだめじゃつ」

いきなりの台詞にめぐみが目を白黒させる。

「えつ、あたし、何も言つてない……」

「思念が垂れ流しじゃつ。未熟者つ!」

「あううつ。でもでもおつ」



「こ、この困り顔がわらわを……」

どうもめぐみを相手にしていると調子が狂ってしまう雫姫だった。

「雄太のつれあいにはよほどの女性でない」と認めん」

「ううっ。それでも好きなものは好きなんですっ」

いつの間にかごく普通に会話が成立していた。雄太との会話と変わらぬほどの自然さだ。さすが霊媒体質というべきか。

「ふうむ……じゃがなあ……」

気持ちはずっかり雄太の守護霊に戻っていた。雫姫の表情に憂いが浮かぶのに、少女は必死に頼み込んだ。

「お願いしますっ。せめて告白だけでもしつかり、そのお……あれじゃっ」

そこでうつむいためぐみは、耳まで真っ赤になっていた。

「ああ、わらわの声が聞こえたから逃げ出したのか。悪いことをしたの。まさか聞こえておるとは……」

雄太本人が聞いているところで、彼を想ってオナニーしたことがあるのを暴露されたわけだ。少女がいたたまれなくなったのも無理はなかった。

「あわわわっ。そ、それはいいですから、お願いですっ」

次の日になると、雄太の不幸のオンパレードも品切れになったようだが、少年は家族とも感じていた守護霊の姿が見えないことを受け入れられないまま、沈んだ気持ちで学校に通っていた。

「さよなら、衣谷君」

「また明日な、雄太」

そんな級友たちの別れの言葉もいつも通りで、何も変わることはない。けれど、いつも一緒にいた雫姫の姿は、あれきり見えることはなかった。

（あれつきりつけないよな、雫姫……）
そんなことを呟きながらの帰り道、いつも通る公園の前で見覚えのある女の子に呼び止められる。先日彼の前から逃げ出した少女、藍村めぐみだ。

「なんだか背筋に定規でも入っついそうなほどに緊張しているのが、姿勢を見ただけでもわかる。」

「あ、あのっ。すっ、好きですっ」

「うん、この前もそう言ってくれたね」

真っ赤になった少女には少年の言葉はほとんど耳に入らないようだ。

ブレザーの前が誇らしげに持ち上がった胸の前で手を握りしめながら、どもりながら少女は口に出す。

「わ、わわわっ……あたしとっ」

「うん、いいよ」

緊張と興奮のあまりに耳まで真っ赤になっていく様子が好ましいと思った。真面目そうな、優しい少女だ。この前も思っただけだし、答えはもう決まっていた。

「つつ、つきあって……くださいっ」

「だから、つきあうてば」
空白があった。言葉が理解できないまま彼女の脳内を駆け回っているらしい。湯気が立ちそうほど真っ赤になってしまふ。

「えええええっ!?!」

「そこで驚かれても困るけど……」

考えてみれば、今まで彼は女の子とつきあうことがない。それをほとんど不満に思わなかったのは、やはり雫姫がいたからだろう。

とびきりの美少女と四六時中一緒にいたのだから、欲求不満などなかなか気付かないのも無理はなかった。

（でも……雫姫がいない今は、自分の意思で決めてもいいよな、きつと……）
たった今告白をしたはずの少女は、少年が受け入れてくれた事実を信じられないように目を見開いたまま硬直している。こんな時にまで困ったような顔をしているのが可愛いと、素直に思えるのが新鮮だった。

ほとんど意識していなかったけれど、藍村めぐみという少女は弱気な表情で損をしてはいるが、なかなかの美少女だった。困り顔がとても似合う、薄幸の美少女といった感じだ。

「帰り道はこっちの方？ それなら、少し一緒に歩こうか」

「えっ……はううっ、はっ、はひっ」

耳まで真っ赤になってしまっためぐみはすっぴん舞い上がって、言葉もほとんど続かないくらいに混乱している。雫姫以外と一緒に歩くことなどほとんどないのだが、めぐみがわたわたしているおかげで雄太は逆に冷静でいることができた。

（これって、喜んでくれているんだよね？ うん、可愛いよ、このコ……）

「あ、あのっ。あたしで……本当に」

「だから、いいんだって、藍村さんで」

そう。彼女のこんな控えめな性格がいい。頭のどこかで勝負そうな髪の長い女の子の顔が浮かぶのを振り払ってめぐみと肩を並べて歩く雄太だった。

「あっ、もうウチの前だ……ちよっと待ってて」

「えっ、あっ、ゆっ、雄太さん……」
速攻で荷物を置いて彼女を家まで送ろうと思っていたのに玄関に戻るとめぐみの姿はなかった。

まだ彼女と肩を並べて歩くことができると胸が弾む思いでいた少年の心は一気にしぼみそうになる。

（藍村さん……帰っちゃったのかな）
自分でも驚くほどの落胆を感じながら家を出ようとした瞬間、後ろから誰かに抱きつかれた。もちろん、めぐみのはずだった。

「びっくりしたよ。ん……んんっ」

それ以上声が出なかった。彼女に向きなおろうとした瞬間、唇が柔らかいものにふさがれていた。

柔らかい少女の身体の温かみと鼻腔を満たす甘い香りが少年の血液の温度を急上昇させていく。

「んんふっ、んちゅっ……んんくっ」

唇どころか、彼女に触れている部分全体がとろけてしまいそうだ。その柔らかさは少年の想像をはるかに超え、密着する唇はあまりに甘美だった。

（こ、こんなに柔らかいんだ……）
まるで別人のようなめぐみの変貌ぶ

りが若者の欲望を刺激する。

「すっ、すごい積極的だ……あんなに緊張していたのに」

痺れてしまいそうな両手で彼女の柔媚な身体を抱きしめると、それだけで少女の喉の奥から可愛い呻きが漏れるのが脳を激しく熱していく。

「はうんっ……んんっ」

初めてのキス。それが自分からのものでなかったことも気にならない。彼女のかすかな抵抗が自分の腕の中で柔らかく溶けていくのがたまらなく心地よく、征服欲を快く刺激する。

腕の中で甘い喘ぎと身もだえを繰り返す少女は、雄太だけのものだった。

手の届くところにいるのに触れない存在とだけ過ごしてきた時間。両親を失ってからただ空虚に過ごしてきた時間が、今は熱く魅惑的な時間へと変貌を遂げていた。

「ああ、こっつ、こんなの、やあつ……」

普通ならこんな時の『いや』は否定ではないと考えるだろうが、雄太は違った。唇を離すと真剣な表情で彼女の女の子を見つめる。

「ごめん。嫌なら……やめるよ？」

めぐみの不安そうな、けれども熱っぽい顔。少女の身ながら十二分に発達した胸のふくらみが、腰のくびれが今彼の腕の中にあつた。

（こんなに柔らかくて、温かいんだ）

むせかえるほどに濃厚な、甘やかな少女の香り。首筋までほの赤く染まっただ肌が誘惑的で、このままでは自制が

きかなくなりそうだ。

「い、いいの。あ、あたしもしてほしいの」

順序を追って、段階を踏むべきだという理性の声はこの瞬間に消え去った。相手が求めているのならば、躊躇することはない。求めに応じ、自分の欲望を、激情を迸らせればいい。

自分と彼女の間のクッションになるかのように、形を歪めながらも優しく、柔らかく受け止める胸のふくらみの感触が目がくらみそうだった。

（む……胸、本当に大きいんだ……）

この胸に触れたい。柔らかい、暖かい肌、乳房に指を触れ、そのジュシーな果実を喰りたいと、身体の奥に欲望が燃え盛っていた。

「あう……い、痛い……雄太……」

「ご、ごめん。優しくするつもりだったのに」

感動のあまり、知らないうちに力が入ってた。それでも少女は彼を拒否するそぶりは見せない。

「そ、それより……こ、ここは……恥ずかしいの」

「そ、そうだね。それじゃあ奥へ……」

二人は激情にまかせて玄関で抱きあつたままだった。彼女の手を取って居間に向かう少年の心臓は激しく脈打ち、熱い欲望を全身に送り込む。

リビングで少女がソファの上に倒れ込むようにして座ると、彼女におおいかぶさるようにして、ブレザーに指をかける。

びくん、とめぐみの身体に緊張が走ったけれど、拒否の言葉はなかった。「あ……」

かすかな喘ぎとともに上着がはだけられると、童顔ぎみの彼女には似合わないほどに豊満な胸がブラウスを押し上げているのがわかった。

小さなボタンを半ばさぐり外しながら、彼女の首筋に唇を押しつけ、彼女の喘ぎを引き出していく。

「ああんっ……ゆ、雄太っ、いやあつ」

「ごめんっ、痛かった？ 嫌なら……」

突然の拒否に動転する少年の前で、少女はひどく複雑な表情をしていた。嬉しそうに、それでいて苛立たしげな……。

「い、嫌じゃ、嫌じゃないですっ。でも、こんなの……」

泣き出しそうな声。かと思えば、次の言葉は彼女には似合わぬ傲慢な言葉。

「そ、そうじゃ。嫌だなどと言うわけじゃないではないか」

どこかで聞いたような言葉遣いだ。めぐみの、気弱そうな表情が一瞬だけ強く、気位の高そうなものに変わったような気がした。

「藍村さん、どうかしたの？ なんだか変だよ」

「す、すいません……何も……変なことなどあるものかっ。この未熟者っ」

その瞬間、違和感の正体がわかった。彼女の言葉遣いだ。「し、雫姫？」

「ち、違うっ。わらわは藍村めぐみ

じゃっ」

めぐみ……いや、雫姫というべきか。同級生に乗り移った守護霊さまらしい。本人は否定しているが、このうるたえぶりは間違いないだろう。

「どういうこと？ ぼくをだましていたの？ 雫姫……藍村さんは……」

自分でも驚くような沈痛な声。少女から身体を離そうとする雄太の腕を、めぐみがつかむ。

「ち、違いますっ。雫姫さんはあたしを助けてくれたんですっ」

めぐみ雫姫の瞳は一瞬で涙があふれそうになっていた。

「あ、あたしがちゃんと告白できるよいうに……。それで、それで……」

よくわからないが、雫姫がめぐみの告白に協力したらしい。そこまではわかったが、なぜこんなことになったのかはさっぱりだ。

「玄関であたし、逃げ出そうとしちゃったんです。それで雫姫さんが……」

ようやく話が繋がってきた。雫姫がめぐみに乗り移って、場を持たせようとしてくれたらしい。

「状況はなんとなくわかった。でも、なんで……」

「それは……その、あたしたちが雄太さんを好きだからです」

（めっ、めめめめめ、めぐみっ！）

動揺しまくった思念が雄太とめぐみの心を震わせる。

「あたしには隠せませんよ、雫姫さん。同じ身体で同居しているんですから」

ぎゅつと雄太の手を強く握っためぐみ、その手を自分の胸にもつていきぎゅつと抱きしめる。

「知ってましたか。雫姫さん、ずっと雄太さんのことを好きだったんですよ。小さいころから、誰よりも……」

ブラジャーとブラウスの上からも、めぐみのバスタブの立派さはよくわかる。こんな時にもかかわらず、少年は口の中がカラカラに渴くのを感じた。

（やめんか、めぐみっ!! ……あ、あうううっ）

めぐみに誘導された少年の手が、ブラウスのボタンを外していく。

白く滑らかな背中の中のホックを外すことができず、ブラジャーをずらしてしまふ。カップが外れた瞬間にブルンと大きく乳房が震えた。

（すごい……柔らかいんだ……）

思わず生唾を飲み込んでしまった。形よく、優しい丸みの頂点には淡く色づいた乳輪。その中心の突起が呼吸とともに揺れている。

「藍村さん。い、いいの……?」

状況はまだまだわからないことだらけだったが、目の前の女の子の存在だけは間違いない本物で、その柔らかさも温かさも、たまらない心地よさだった。

「め、めぐみって、呼んでください……はあんっ」

たっぷりとして綺麗なお椀型の乳房は童顔ぎみの彼女とは思えないボリュームだった。そこに指を這わせる

とすべすべと滑らかで柔らかい肌の感触にゾクゾクする。

「雫姫さん、雄太さんのことが好きなんです。それも、すごく好きなの……」（こ、これっ、めぐみっ……はうううっ）

守護霊の思念は激しい狼狽を見せていた。それだけでなく、どこか熱っぽい。少年の指が柔肉に食い込むとかすかにめぐみが震え、雫姫の思念がさらに激しい反応を示すのが不思議だった。

両方の手でもみたとすると、二人の反応は抑えきれないほどになっていた。

「あつ、ああつ、だつ、だから、雫姫さんは雄太さんを独占したくて……」

「うあつ……も、もう……めぐみっ、それ以上は……っ」

雫姫の泣き出しそうな、羞恥にまみれ、消え入りそうな思念。いつでも強気で、雄太に対しては絶対的強者の立場にあつた守護霊さまが、今は弱々しく思えた。

「ぼくも……雫姫のこと、好きだよ……んちゅっ」

「きやううっ」

（あおおっ……ゆ、雄太あつ）

丸みの中心の敏感な突起に吸いついた瞬間、めぐみの柔らかな肢体に衝撃が走った。

「今まで他の女の子を好きになつたことなかったのは……ちゅるっ……雫姫がいたからだと思う」

でも、と続ける雄太の心の中には、わずかなうちに心の中で大きな位置を

占めるようになった女の子がいる。

「それ以外で好きになつたのは、めぐみさんが初めてかな」

（ゆ、雄太さん……ひあつ）

（はわわっ……そんなんっ）

はだけさせたブラウスの下に手を入れ、乳首に吸いついたまま脇腹にまで手を滑らせるとめぐみの身体がわななき、雫姫の思考が震えた。二人は身体と感覚を共有しているらしい。

（雫姫がぼくを好き……当たり前だよな。ぼくだって……それに……）

その気持ちを気付かせてくれたのは、めぐみだ。雫姫以外に、少年が初めて気になった女の子は、不幸体質で弱気なくせに自分だけじゃなくて雫姫のためにかんばってくれた。そう思うと彼女のことがすごく愛おしく感じられる。

（ゆ、雄太さん……。彼女が、感じすぎて……あんっ）

（こ、これっ……くふううっ）

確かに雫姫の反応の方が激しい気がする。いつも自分に指図していた守護霊さまが反応してくれているのが嬉しくて、もっとしてあげたくなってしまう。

ぎゅうっ。

もう一度彼女を抱きしめてから、彼女の大きく形のよい胸を両手で触れていく。

（すごいな。柔らかくて、暖かい……）

「ああんっ……」

両手でもみしだくようにして指を食い込ませるとめぐみが喉を反らせて呻

いた。苦悶と快感とが入り混じつた表情にゾクゾクする。

（これ。めぐみは生娘じゃぞ。もっとう、うん）

（う、うん）

どうやら強すぎたらしい。今度は優しく心がけながら、うっすらとピンク色に染まっている乳房を掌全体で味わっていく。

（そうじゃ。指で乳首を挟んで、軽くこすりながら……くふううっ）

いつの間にか、雫姫の言う通りの愛撫になっていた。まったく初めてのエッチ体験で頭に血が上っている少年にとってはそれは天の声のようなものだ。それに従うだけで目の前の柔らかくすべやかな肌が甘く震えるのが欲望をさらにかきたてる。

「ああつ……いやあつ……雫姫さん、心、読んでるうっ」

（その方がより気持ちよくなれるじゃろう? そら、雄太……）

目の前に、ふっくらとした乳房の頂点で息づく小さな果実。それを口に含むだけで少女の身体は激しく反応した。少年たちのワイ談で聞く誇張されたエロ話にも劣らない豊かな反応に驚くほどだ。

「きやううっ。おつ、おっぱい……吸われてるうっ」

唇で扶むようにしてチュウチュウと音を立てながら吸いたると少女が口元を押さえながら喘ぎ悶える。悲鳴のように漏れる喘ぎ声が恥ずかしいらし

い。
「お、おいしいよ。めぐみさんのおっぱいっ」
「きゃうんっ」

ぶつくりとふくらんだ乳首を甘噛みすると全身が痙攣するように震えた。両手で口元を押さえながらいやいやをしている様子が淫らで、そして愛しいと思つた。

（どうした。めぐみは乳が好きなのじゃ。もつと吸つてやらぬか）
「う、うん……」

滑らかな娘の肌を自分の肌で感じるだけで気持ちいいというのに、唇に両手に形よくふくらんだ双乳を味わう少年の中でも際限なく快感と欲望のポルテージが上がっていく。

「アッ、アンン——ッ」

びくん。雄太の指と唇に繊細で豊かな感受性を示す乳房がかすかに震えた。いや、震えたのではなく、膨張しているような気がした。

（いや……錯覚じゃない。大きくなっているみたいだ）

興奮とともにふつくらと、確かにポリュームを増している。これが女体の不思議というものだろうか。少年の高ぶりはさらに激しく、目の前の美肉が愛しく全てを自分のものにしてしまいたいと思う。

「あんっ……おっ、おっぱいすごいですっ……」

たぶたと叩くようにして撫でさすり、唇で、舌で柔らかくも温かい美肉

をひたすらに食るのは眩暈がするほどの肉悦をもたらした。
（な、なんだか……すごく、おいしい……）

（ふふふっ。めぐみの乳はおいしからう。もつと吸うがよい）

「もつと、もつと吸つてください」

実際には乳首に味というほどの味があるわけではない。そのはずなのに、めぐみの乳首は、乳輪が驚くほどに甘美な味わいで舌がとろけそうだ。
雄太の熱心に吸いつきに、ついに乳首から何かが出るのだった。

（んんぐっ……まさかっ）

母乳なわけがない、と思いつつも真っ白な液体が彼女の両方の乳房から噴出してきている。

「あつ……ああつ、なっ、何これえっ」

びくん、びくんとめぐみの全身が痙攣していた。あまりに激しい快感に言葉もはつきりしない。

「ち、ちから、つよすぎいっ——」

少年が両の掌で豊かに盛り上がる乳房をもみほぐすごとに彼女の身もだえや喘ぎは激しくなり、ついに——。

「ひあつ、んああつ、あああーっ」

イク。言葉に聞いたことはあっても目にするのはもちろん初めてだ。奥手の少年は、雫姫がいたこともあってまともに女性とつきあったことすらない。そんな雄太の目の前で、めぐみは乳房への愛撫だけで絶頂に達してしまつたようだ。

ピュルッ、ピュルルル——ッ！

めぐみの二つの乳首から噴出する乳白色の液体は驚くほどの量だ。しかもこれは単なる母乳ではなかった。二人の肌にかかった瞬間、まるで蒸発するかのようにならなくなる。

「し、雫姫さん……これ、はあ……」

色白の頬が赤く染まり、メガネの下の目はあまりの快感に堅く閉じられたまま涙を一筋こぼしていた。

いつしか口元を隠すことすらできなくなっていた両手は少年の頭を抱きかかえるような姿勢になっている。

はあつ、はあつ、はあつ——。

雄太とめぐみの荒い呼吸だけが他に誰もいない衣谷邸に響くと思われた瞬間、新たな人の気配が忽然と出現したのだった。

「ふふふ。よほど気持ちよかつたのじゃな、雄太」

「う、うん……つて、雫姫!!」

後ろから少年の首筋を撫で上げるほっそりとした指。この手には確かに覚えがある。

「う、うそつ。雫姫さん、確かに……」

「うむ。ずいぶん久しぶりの実体じゃぞ。ほら……ちゅっ」

上機嫌な守護霊さまは後ろから雄太に抱きつくようにして頬に口づける。

柔らかく溶けてしまふような赤い唇が押しつけられた感触に全身の毛が逆立つほどだ。

「めぐみのおかげで久方ぶりに実体を持てたのじゃ。礼を言うぞ……ちゅっ」

「ああんっ。そんなことが……っ」

雫姫に首筋にキスされためぐみの声が震えていた。にわかには信じられないが、雫姫が現実の肉体を手に入れたのは間違いないことらしい。

「めぐみも雄太も強い霊力を持つているからのお。まさかこれほどとは」

勝気そうな美貌に満面の喜色をたたえ、雫姫は何度も二人にキスを繰り返す。その巧みな接吻は二人のガードを確実に崩していく。

「そ、それにしたつて……」

「ふふふっ。野暮なことは言わぬじゃろうな、雄太？」

ミニスカ和服の守護霊さまが、いきなり唇を重ねてくる。数百年を経ているという守護霊さまのキスはさすがに上手で、ねっとりとした快感に雄太はクラクラしてしまう。めぐみは真っ赤になつたまま、驚くほどの美少女と雄太のキスを目を丸くして見つめていた。

「ふふふっ。二人とも初々しいのお」

二人に抱きついたままの雫姫の裾の短すぎる振袖の裾が乱れ、まばゆいばかりに白い太腿が付け根近くまで露わになっている。思わず目をそらす少年の手を取つた守護霊は若者の指を自分の唇にもつていき、口に含んだ。

「ううっ」

背筋がぞくりとした。美しく長い黒髪に挑発的な視線。背筋を舐めあげられるような感覚だ。

「ふふふ。わらわが教授してやるゆえ、安心していいがよいぞ」

「い、いたすがよいつて……」



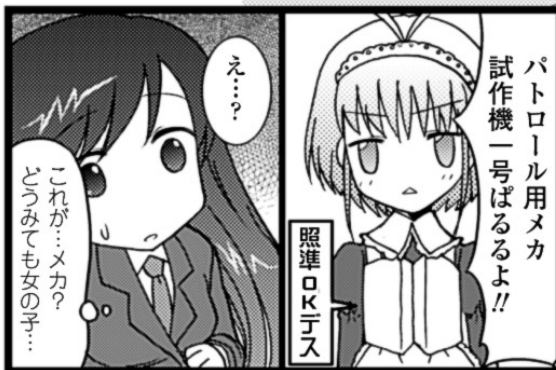
新米捜査員!

麗子発動!!

File 3!!

おっぱいメイドロボ発進!

宇都宮麗子まどろみ中...



漫画 COMIC

嘉納あいら

実は繊細なのデス…



宇都宮麗子
世周知らずで生懸命な新米刑事らしい
ろんなキワモノ捜査に参加する。

最後は別のお楽しみ？



潤子先輩
麗子の先輩刑事。キワモノ捜査を麗
子に回す派本人。



ドンバゲチャピン
アヤシイメカを次々に発明する謎の
博士。異種武闘会に出資する富豪。



麗子たちの活躍は Vol.39、41でも読めるよ!

初パトロール!!



好感度- (マイナス)



一件落着…?



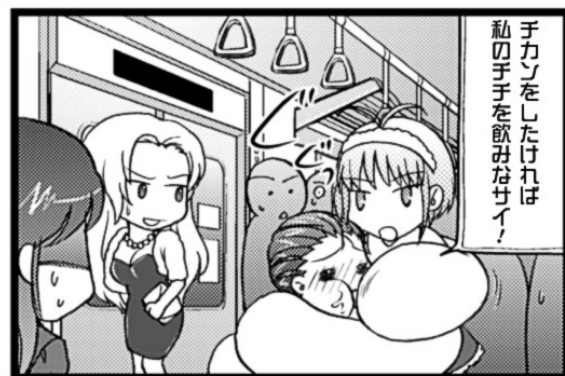
ミ○キーはママの味



PTA 会長 怒る !!



大手列!?





ガンバレ
あみちやーん♥

はい
ホラホラ
ゆうっくり
息して
ごらーん♥



ゲスがはびこる荒んだ地上

カメラ
見えるか
あみちやーん♥
あのむこうで
ママとパパが
見てるぞー♥

ママとパパ
心配しちゃうじや
ないか
悪い子だな

ホーラ
につこり笑って
あげようねー♥

天使の零と リアリエル

前編



漫画 おおたたくし
COMIC



また
コールドショックを
おこしてる
これ以上の投葉は
危険だな

ダメだあいつ
ビヨーキだよ
ビヨーキ

お偉いさん方は
こんなビデオの方が
好きなんだよ
売れるぞー…
って何の音だ？



あぶなかった
です！

もう
人間界は
おしまいだわ…

お姉様は
すでに善悪の見境が
つかなくなっている
…

このまま人間の魂を
むさぼりつづければ
魔界のヨロイの様に
ふきとんでしまう！

こんな量の
魂が熱量に
かわってしまったら
この星すら
とけて蒸発して
しまうわ！

フフフ

ご名答だ

エグザニエル!

爆発を防ぐには
先に人間を
全滅させるか

絶賛暴走中の
ミラルエルを
殺すかの
どちらかだね

キミの持つてる
槍なら
どちらも
カンタンだ

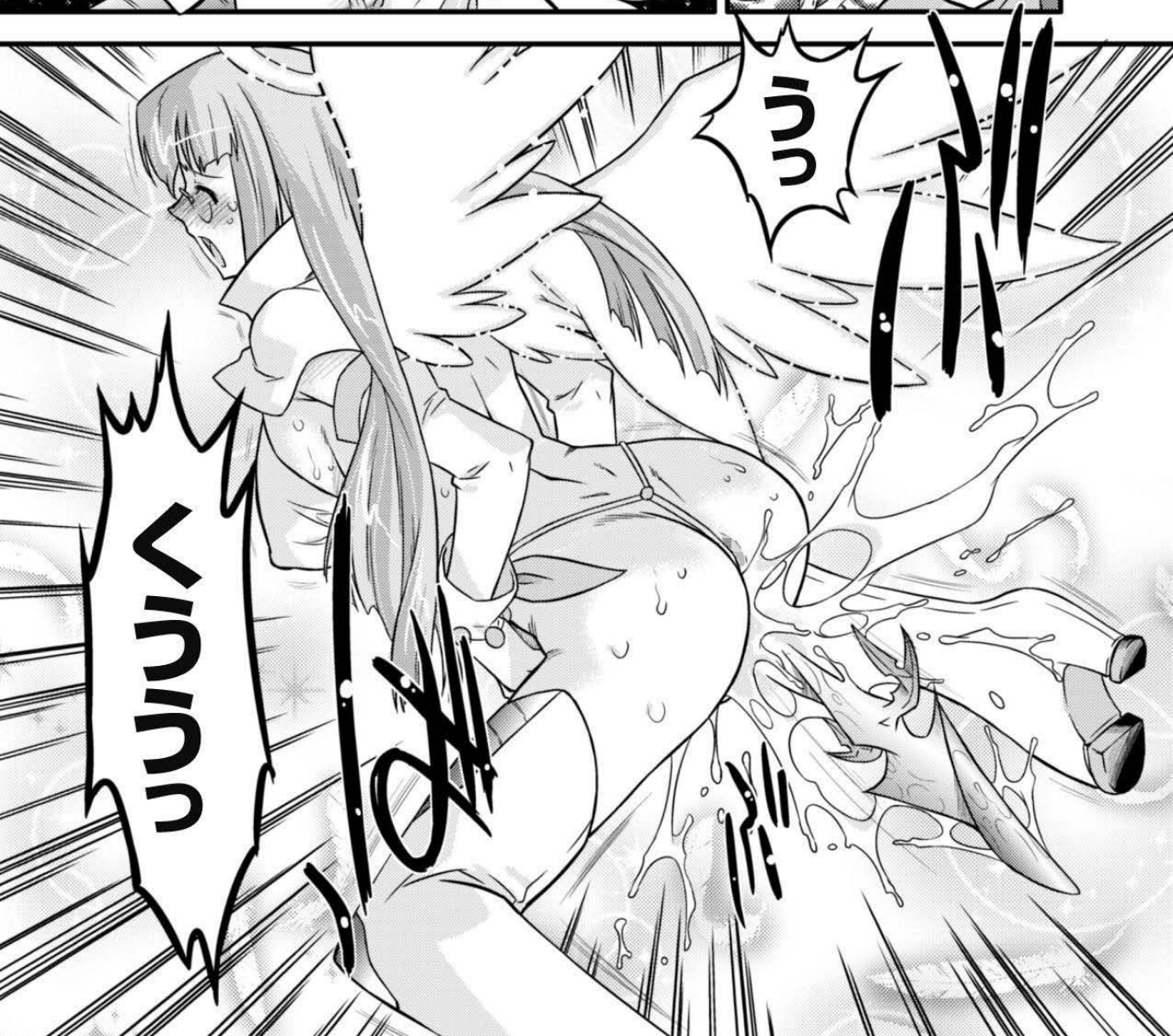
もっとも
人間がいなくなれば
天界と魔界も
おしまいだけどね♥

さあ

ボクのカワイイ
人間たちを
救ってくれないか
リアリエル

や...

槍よ...っ





何をっ

あっ



そりゃ
そうさ

槍は常に
魔力を必要と
してるのさ



ち…小さくなってる…!?



あっ
いやっ!

槍の母としては
ちゃんと魔力を与えて
元の姿をとり戻させないとね

ボクが
手伝って
あげるよ

ジュ

ぐっ





なっ...!!

!?

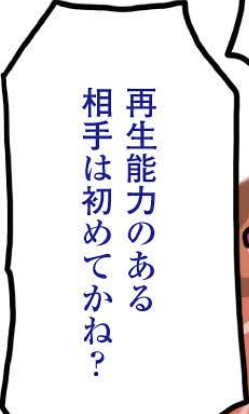
ん
ん
そんな

さつき
確かに...

くっ...



クフフフフ!
ようやく
捕らえたぞ...!!



再生能力のある
相手は初めてかね?

まじやち

まじやち



産んでな!!

なっ

そんな事でき

ひあつ!?

君の身体で

ズリッ!



私の最新作「ヌキブタ」だよ!

君には散々私の実験体を壊されてきたからねえ

そろそろ返してもらおうと思ってるね...



それじゃー早速...

これからの君のパートナーを紹介しよう



クフフフフフ! 良い返事をありがとう...

ち違っ... やっ...

ズッー

陰陽生徒会

淫呪の鎖

最終話 淫式墮悦

たかおか ちから
小説 NOVEL 高岡智空

ふじおか
挿絵 ILLUSTRATION 藤岡とき

色情に潤んだ瞳に映ったのは
ギヤグを囓まされ煩悶するパートナーの痴態！



登場人物紹介



神坂理央

八雲学園で生徒会長を務める陰陽師少女。早苗と共に、学園に紛れ込んだ六道を捕らえようとする。



神門早苗

理央と同様の陰陽師少女。学園では副会長を務める。攻撃を放つ理央の後方支援を行なう。

六道彰光

学園に潜入し、女性を手駒とするべく研究を行なう陰陽師。十全に力を使いこなす才を持つ。

前号までのあらすじ

逃亡した陰陽師・六道が学内に潜んでいることを知った理央と早苗は彼と対峙する。しかし六道の力に及ばなかった2人は性感帯を付加され、3回絶頂しなければ勝ちというゲームに参加することに。抵抗するも操られた生徒によって屈辱の絶頂を迎えさせられた美少女達はまたも敗北を喫してしまふ。

立ち上る生臭い栗の花臭は、男子生徒たちが浴びせかけた大量の精液——ブレザーの表面だけでなく内側も、袖の中までがドロドロにされている。スカートも、まるで水に落とされたかのようにグチョグチョで、ズッシリとした重量感さえ感じる。ニーソックスの爪先は粘液の塊を詰め込まれて大きく膨らみ、チャパン……と水音まで聞こえていた。

しかも、残されているのはその三つだけで、ブラウスもなければ下着もない。保健室内を調べてみたが、着替え用の衣服はすべてなくなっていた。

（これを、着ろってことっ……バカにしてっ！）

けれど早苗が捕らわれている以上、思惑に乗らなければ、彼女がどうなってしまうかわからない。

（っっ……従うしか、ないって言うの……）

こんな汚らわしいものを身に着け、校内を歩かねばならないことに嫌悪と抵抗を感じながら、理央はどうすることもできず——。

「早苗、少しだけ待って……すぐに行くわ」

グチョオ……と淫粘液の糸を引いて、異臭を放つ衣装に袖を通し、廊下への扉を開いた。

◇

絡みつく湿った布地の感触が、背筋に悪寒を奔らせて汚辱を味わわせる。どれだけ遠くへ行こうと自分の衣服から立ち上げる精臭からは逃れられず、ツンと鼻先から突き抜け、脳内を混濁させてくる。

「んっ、はっ、ああ……っく、ううん……」

ブレザーに染み込んだ精液が、窮屈そうに詰め込まれた豊乳をニチャニチャと撫で回し、荒い淫声ももれる。冷たい感触を伝えるスカートの裾が太ももを擦ると、膝が崩れ落ちそうになるほどの快感が走り、足早に駆ける脚が震えて止まってしまう。

（はあっ、んううっ……こんな、ダメえ……ひうっ、か、身体中……こ、擦れてえ……ひやうっ！）

床を踏みしめる爪先からは、ニーソックスの奥に溜まった精液を混ぜ捏ねるいやらしい音と感触が伝わり、身体中がゾクゾクと痺れる。絡みつく粘液の感触に乳房を揉み捏ねられ、腋を舐め上げられ、嫌悪感に寒気が走るも、肉体がはつきりと快感を覚えているのが、自分でも理解できてしまう。

「うっわ……ねえ、見てよ……」「生徒会長のくせに、シャツもブラもなしでブレザーだけなんて……自慢の胸でも見せつけてるのかしら」「しかも精液塗れ……頭おかしいんじゃない?」「さいつてー」

廊下をひた走る理央の背に、女生徒たちの押搦の声飛び、羞恥で顔が真っ赤に火照る。

（っ……み、見られてるっ、こんな姿を……）

授業中の痴態に続き、校舎内で大勢の生徒を前に

「んあ……あ、れ……」

ゴロンと転がった身体に優しい衣擦れの感触を覚え、理央は目を開く。見慣れない景色だが、清潔そうなシートと布団から、ここは保健室なのだと理解できた。だが、なぜこんなところにいるのか——それに気づいた瞬間、凄まじい自己嫌悪が襲ってくる。

「っっ……そう、だ、あっ……あたし、んっ……結局……ふっ、んあ……」

唇に疼きと痺れが走り、同時に陵辱の記憶と自分が口にした数々の言葉が頭の中に甦って、羞恥のあまり消え入りたくなる。そしてなにより、六道とのゲームに敗れてしまったいま、自分たちに待っているのは、あまりにも過酷な運命だけなのだ。

（そんなわけないっ……まだ、諦めちゃ……）

ブンブンと頭を振って、羞恥と屈辱に塗れた未来を否定する。と——そこでふと思いついたように顔を上げ、室内を見回してドクンッと鼓動が高鳴る。

「さ、早苗は……あくっ……ど、どうして……っ」

保健室は無人で、ベッドを使用しているのは自分だけだ。嫌な予感に胸の奥をチリチリと刺激されたそのとき、サイドテーブルの上に小さなメモ用紙を見つける。震える手で広げると、そこには——。

【早苗ちゃん、生徒会室で運動部を激励中!】

「なっ……こ、これって……そんなっ……」

この異常な状況で、ただ激励を行っているだけのはずがない。行われていることは間違いない。と低俗で汚らわしい行為に違いはないのだ。

（っ、こんなところで寝ている余裕なんて……）

布団をはねのけ、すぐさまベッドを飛びだそうとする理央。けれどその瞬間、肌を撫で上げるヒヤリとした感触に動きが止まり——そして、小さく悲鳴を上げさせられる。

「ひっ……いやっ、な、なんでっ……」

シートと布団の感触で気づかなかった自身の状態に気づき、全身を寒気が襲う。身に着けていたはずの衣服も下着も、なにもかもが失せていた。

「そんなっ、制服と、体操着は……あ」

ベッドの脇に目をやると、置かれていた脱衣カゴへ制服が無造作に放り込まれている。けれど、よく見ればその衣服は至る所にベットリと汚れが付着しており、濃厚な異臭を漂わせていた。それらの正体に気づいた理央は顔を紅潮させる。

（あ……いつ、らっ……なんてことっ……）

（っっ……従うしか、ないって言うの……）

こんな汚らわしいものを身に着け、校内を歩かねばならないことに嫌悪と抵抗を感じながら、理央はどうすることもできず——。

「早苗、少しだけ待って……すぐに行くわ」

グチョオ……と淫粘液の糸を引いて、異臭を放つ衣装に袖を通し、廊下への扉を開いた。

◇

絡みつく湿った布地の感触が、背筋に悪寒を奔らせて汚辱を味わわせる。どれだけ遠くへ行こうと自分の衣服から立ち上げる精臭からは逃れられず、ツンと鼻先から突き抜け、脳内を混濁させてくる。

「んっ、はっ、ああ……っく、ううん……」

ブレザーに染み込んだ精液が、窮屈そうに詰め込まれた豊乳をニチャニチャと撫で回し、荒い淫声ももれる。冷たい感触を伝えるスカートの裾が太ももを擦ると、膝が崩れ落ちそうになるほどの快感が走り、足早に駆ける脚が震えて止まってしまう。

（はあっ、んううっ……こんな、ダメえ……ひうっ、か、身体中……こ、擦れてえ……ひやうっ！）

床を踏みしめる爪先からは、ニーソックスの奥に溜まった精液を混ぜ捏ねるいやらしい音と感触が伝わり、身体中がゾクゾクと痺れる。絡みつく粘液の感触に乳房を揉み捏ねられ、腋を舐め上げられ、嫌悪感に寒気が走るも、肉体がはつきりと快感を覚えているのが、自分でも理解できてしまう。

「うっわ……ねえ、見てよ……」「生徒会長のくせに、シャツもブラもなしでブレザーだけなんて……自慢の胸でも見せつけてるのかしら」「しかも精液塗れ……頭おかしいんじゃない?」「さいつてー」

廊下をひた走る理央の背に、女生徒たちの押搦の声飛び、羞恥で顔が真っ赤に火照る。

（っ……み、見られてるっ、こんな姿を……）

授業中の痴態に続き、校舎内で大勢の生徒を前に



淫らな格好を晒していることを自覚し、恥ずかしく
てたまらない。もはや自分は生徒会長などではなく、
学園一の淫乱女だというレッテルを貼られているの
では——そんな被虐的な妄想が込み上げてくる。

「つ……許さないわよ、六道……か、必ず、この
報いを受けさせてやるわ……覚悟なさいっ」

投げかけられる擲楯の声も視線もすべてを無視し、
一歩を踏みだす。グジュッ……と精液を踏みしめ、
身体中を擦られる感覚に何度も腰をくねらせ——。

「や、つと……着いた……あつ、ふうつ、んうう……
……ひうつ、う……」

ジンジンと鈍く熱い疼きを放つ身体中からの肉欲
を意志の力でねじ伏せ、生徒会室の扉の前に立って
深呼吸する。結界でもあるのか、中からは物音一つ
もれてはおらず、気配が窺えない。だが——。

「いないわけ……ないでしょっ!」
覚悟を決めた理央は、勢いよく扉を押し開く。

「り……六道っ、いることはわかっているわ! す
ぐに、早苗を解放し——え……」

唇に奔る肉悦を噛み殺して叫んだその矢先、視界
に広がったあまりの状況に声が途切れてしまう。

「んっうううっ、んふっ、ふうう——っつ! んふ
うっ、ふあつ、ああああんっつ!」

普段の仕事で使っている大机の上、一人の男子が
横たわっている。その腰の上に跨がった長い黒髪の
少女は手首と足首を手錠で繋がれ、接合部から激し
く淫水飛沫を噴きだして、何度も何度も剛直で突き
上げられていた。それだけではなく、突きだしたお
尻を別の男子生徒に鷺掴みにされ、パンパンと打
擲音を響かせながら、直腸を犯さされている。

「んぐっ、んんんううう——っつっ!」
「さ……な、え……」

唇には大きなボール型の口枷を嵌められており、
満足にしゃべることはできないようだった。スカー

トもなく、ブレーザー一枚を羽織っただけの早苗は苦
悶の表情を浮かべ、汗びっしょりの顔を男子の胸板
に擦りつけながら、感極まった喘ぎを喉奥から吐き
だして、全身を跳ねさせている。

手錠で繋がれていながらも手の平にペニスを掴ん
で捏ね回し、何人もの男子が髪の毛を掴み取って汚
らわしい肉棒に絡めているというのに、嫌がる様子
さえない。美しかった黒髪も白雪のようなきめ細か
い肌も、すべてが白濁汚液で汚されており、鼻の曲
がるような淫猥な臭気をブンブンと放っている。

「あ……あ、ああ……そんな、早苗……」
シヨックのあまり顔からは血の気が引き、青い顔
のまま倒れてしまいそうになる。けれど視界の端
生徒会長としての理央がいつも腰かけている肘掛け
椅子に、人を馬鹿にした笑みを浮かべている六道の
姿を見たことで、萎えかけた心に覇気が戻る。

「っつ! 六道、あんたっつてヤツはっ……」
「ん……あれ、会長さん? 目が覚めたんだ、よか
ったね。心配してたよ……ふふ」

そのニヤけ顔を見た瞬間、弾かれたように床を蹴
り、身体中の疼きも忘れて駆けだした。

「フザけたこと……言ってるんじゃないわよ!」
手元には一枚の術符もない。けれど生徒会室には
結界が張られ、攻撃用の術符も隠してある。油断し
きっている六道を拘束することは可能はずだ。

「うかうかと、あたしたちのホームに踏み込んだこ
と……後悔しなさい!」
今度こそ防がれはしないと確信し、片手で印を結
ぼうとする理央。けれど——。

「ふう……やれやれ、せつちちなあ」
肘掛けに腕を置いたままの体勢で、六道が軽くだ
め息をついてパキンと指を鳴らした。その瞬間、室
内の空気がまるで真冬のように冷え込み、ニースッ
クス一枚に守られた足の底から激痛が走る。

「つぎっ……いあああああ——っつっ!」
それと同時に、電撃でも流されたかと思うほど強
烈な衝撃が突き抜け、理央は絶叫を迸らせながら床
に倒れ伏してしまふ。足底の痛みはすぐに消え、外
傷や出血の感覚もない。ただ全身の震えが止まらず、
ジンジンとした痺れに襲われ、動けなくなる。

「な、にを……い、まのつ、んうう……」
「ふふ、覚えてないかなあ? 前に月詠に使ってく
れたあの結界だよ……今回は、会長の力に反応する
よう、調整してくれたみたいだけどね」

言いながら六道が、犯されている早苗のほうへ視
線を向ける。それに気づいた男子が口枷を外すと、
涎塗れになったギグボールを吐きだして、涙と唾液
に汚れた顔で早苗が泣きじゃくりながら叫んだ。

「し、しましたあつ! い、いううううんっ、言う
とおろっ、にひい……ひ、ひまひたからあ……は
ひっ、ひいひいんっ! はやつ、くうう! イカセ
てえええっつ、イカせてくださいいっつ!」

「なっ……早苗、どうしてっ……ふっ、くうっ!」
目の前で理央が束縛されているというのに、それ
に構うこともなく喘ぎを上げ、イカせて欲しいと狂
ったように叫ぶその姿に恐怖すら感じる。

「い、言う通りっ……どういうことよっ、早苗え
え……うぐっ、はっ、ああ……」
ヒクつく身体を抱えながら、理央はすべてを知っ
ているであろう六道を睨みつける。

「聞いている通りだよ。会長を束縛しているのは、副会
長の結界ってわけさ。信頼していたパートナーに裏
切られるっていうのは、どんな気分かなあ?」

「う、そよ……ひやうっ、あうう……き、早苗が、
そんなこと……嘘でしょっ、早苗ええっつ!」
信じられない一心で、理央は懸命に相棒へ呼びか
ける。すると六道は、愉快でたまらないというよう
な甲高い笑いを響かせ、大声で告げてくる。



のか、六道がニヤリと笑い、声のトーンを上げる。「そうだ、会長にも副会長と同じ目に遭ってもらうかな？もちろん、素直になるまでは……副会長にも、連帯責任で付きあってもらうからね？」

「んえ……え……」

呆けたような顔を上向かせた早苗に聞こえるよう、六道はその残酷な思いつきを口に作る。

「また、イケなくなってもらうのさ。どうしようもなくイケたいのに、絶対にイケないままで……ピンピンになったクリトリス弄って、マココの奥もお尻の奥も穿り返して、全身艶り続けて……」

「やつ……やらあああつっつ！」

その言葉を聞いた瞬間、快感に打ち震えていたはずの早苗が、手枷足枷をカチャカチャと鳴らし、机の上から飛び降りんばかりに暴れて叫びを上げる。

「いやっ、いやですううっ！ お、お願いっ、ですからあああつ！ もう、イケないの……いやあああつっ！ なんでもしますからっ、やめてえっつ！」

と——そのとき微かにだが、早苗がこちらに視線を向けた気がして、理央は目を見開いた。慌てて注意を払うも、すでに早苗はなにも見えないほどに頭を下げ、それを六道に撫でられている。

（え……い、いまのっ……あうっ、んっ、も……もしか、してえ……くっ、ふうんっ……）

心に浮かぶ疑問と期待、けれどそれに答えは出ない。早苗はもはやこちらに顔を向けることもなく、媚びた態度で懇願の言葉を叫び続けている。

「んー？ そんなに嫌なんだ。だつたらさあ……」

暴れる早苗の手枷と足枷の結合を解き、六道がその耳元に小さくささやきかける。一瞬、ピクッと肩を震わせた少女だつたが、その躊躇いを見咎めた六道の冷たい表情を見て、迷いをかたがり捨てる。

「わ……わたくし、神門早苗は……彰光様に生涯の忠誠を尽くし、決して逆らわぬことをここに誓い

申し上げます！ どうか……どうかっ、この哀れな牝犬に、お慈悲をお与えくださいませえっ！」

涙みない口調で声高に、奴隷宣言に他ならない宣誓を言い放つと、早苗は濡れた瞳で許しを請うように、六道をジッと見つめる。

「へえ？ だけど言葉だけじゃ信じられない……態度で示してもらえないかなあ？」

早苗の態度に口元を緩めた六道は、椅子にもう一度腰かけた。早苗は慌てて机から飛び降りると、四つん這いになって少年の股間に顔を擦り寄せ、唇でファスナーを下ろし、甘えた口調で訴えかける。

「こ、これより……誠心誠意、オコノボ様にご奉仕させていただきます……どうぞ、早苗の淫乱口マコを躑けてくださいませえ……んっ、ふう……」

スンスンと鼻を鳴らし、蕩けた瞳でペニスに吸いついてゆくその姿は、絶頂を盾に強制されているというよりは圧倒的な快楽を餌にされ、心まで支配されてしまっている——そんな風に見えた。

（あ、れも……作戦、なの……？ でも、あれくらいいや、ないと……うっ、六道も、油断しない……かも……んっ、くっ、はああ……）

あの美しく聡明だつた早苗が、こんな姿を晒すほどに追い込まれたなどと、到底信じられない。きつと演技だ、そうに決まっている——そう思いはするが、確認するために理央はもう一度口を開く。

「さ、早苗……ダメよ、そんなこと……っ!!」

なにか考えているなら、こちらを見て欲しい。そんな期待を込めて、なおも訴えかけようとした理央の前に、いつの間にか男子生徒たちが集まっていた。先ほどまで相手をしていた早苗が六道にかしずいて

いるせいで、欲望の捌け口を失ってしまった男子たちは、息を荒くしてジリジリと迫ってくる。

「ちよっ……こ、来ないでよっ、来るなっ……」

「まあ、そう言うなよ……へへ」

なザーメン臭え格好で言われても、説得力ねえよ」

椰揄する男子の言葉に、いまの自分の最低の姿を思いだしてカァアッ……と耳まで真っ赤に染まってゆく。それを意識した瞬間、身体中から立ち上るおぞましいはずの精臭が、鼻の奥を擦って喉奥に突き刺さり、肺を満たして肉体を火照らせてしまう。

「はうっ、ううん……んはっ、あはああ……」

（ダメっ……早苗に思惑があるなら、六道が油断するまであたしも耐えないと……っ）

血流が沸騰したかのように鼓動は激しく高鳴り、暑さのあまり噴きだした汗の甘い香りが立ち込める。その匂いに誘われるのか、十数人の男子生徒が一斉に手を伸ばしてくる。

「やつ——いやああああつっ！」

「ふふふ……たつぷりと愉しむといいよ。そのイケない肉体でさ……ふふっ、あはははははっ！」

悔しくてたまらないのに、身体が言うことを聞かない。運動部男子の武骨な手が動けない理央の胸を、太ももを、尻肉をなんの遠慮もなく撫で回してくる。度重なる陵辱で敏感にされた柔肉がひしゃげ、捏ね潰される感触だけで肉欲が爆発し、しなやかな肢体がピクピクンツと大きく跳ね上がる。

「あひゅううんっ!! いひやっ、ひはあつ……」

「おら、やつば期待してたんじゃねえか！」

背後から抱きすくめてくる男子にブレザーの裾から手をつつままれ、汗でヌルヌルになった乳肉を痛

いほどに驚掴みにされる。刹那、胸奥に甘い悦びが突き抜けて身体中が弛緩し、抵抗するような筋肉の強張りが蕩けてしまう。熱く火照っていた乳房は男子の手で吸いつくように形をひしやげさせ、目の眩むような快感を脳髓に注ぎ込んでくる。

「やめ、へええ……んあっ、あひいんっ！」

肉欲電流が脊髄を走り、だらしなく唇が綻んでゆくのがわかる。豊乳をグニユグニユと揉みしだかれ、

太い指でニブルを挟まれると目の前が真っ白に染まり、もつと気持ちよくなりたいとばかりに硬く尖り勃ってしまふ。

「やっ……胸、はっ……あううっ、んっ……こ、こんなっ、か、んじ……ないい……ひうっ！」

男子の腕の中でビクビクと悶えていると、下半身に熱い塊が触れて痺れるような悦びが迸った。

「んっ……なっ、なに……ひてんの、よお……ひやううっ、あっ、はああっ！」

「なにして、決まってんだろ？」「やらしい会長の太ももで、チ●ポ擦ってやってんだよ！」

ニチャ、クチュウ……とくぐもつた水音が耳から流れ込み、ゾクゾクと背筋が震える。蕩けきつた腫で脚を見下ろすと、スカートはお腹にかかるほどにめくられており、晒された肌に汚粘液を絡ませながら、数本のペニスが擦りつけられている。

「やっ、はあ……んひっ、ひい……」

誰の精液で汚れたかもわからぬニーソックスにも、男子たちはお構いなしに剛直を捻じ込んで、疑似性交のように腰を叩きつけてくる。パンパンとぶつかる肉の感触に腰は震え、いくつもの亀頭が押しつけられた太ももの奥——恥毛に覆われた淫らな肉襲からは、トロトロと濃厚な牝汁が垂れこぼれていた。

「イヤだつてわりには、全然抵抗しねえなあ？」

「ひうんっ……んっ、そ、んな、ことお……」

言われてようやく、微かな身動きさえもせずに、されるがままになっていくことに気づく。肉の悦びに支配されていた——そんな思いに悔しさが込み上げ、椰揄を否定するように口を開こうとする。けれど、熱い牝槍が太ももに這わされると身体中がペニスの感触を、そして味を思いだしてしまい、舌先がジンと痺れてしまふ。

「ちっ……違うっ、違う違ううっ！ あたしは、感じてなんて……んくっ、な、ないい……っ!!」

情欲とシヨックで潤んだその視界に、ツンと強烈な刺激臭を孕んだなにかが突きつけられる。

「ほれ、神坂あ。なにか言いてえことでもあんなら、言ってみろよ……このマイクによお？」

「ふあ、ああ……うくっ、うううっ……」

緩んでしまひそうになった唇を、歯を食い縛ってなんとか開かないようにする。けれどガチガチにそそり立った肉棒から漂う、生臭く濃厚な牝の臭いが鼻奥に突き刺さると、自制心が蕩かされるようだった。閉ざされた歯の隙間から唾液が滝のように溢れぬめり光りながら流れ落ちてゆく。

（ひあ……いあ、ないい……耐え、るう……耐えられる……っ、は、ああ……）

宿された二枚舌に、舌も唇も、そして喉奥までも完全に支配されてしまつており、牝の気配が近くだけで汚塊を求めさせられてしまふ。その感覚に、否が応にも自分が発情しているのだと思ひ知らされ、恥辱と情けなさに襲われる。

「んひや、ひやふうう……はふっ、んあ……」

「おら、どうしたあ？ なんか言えよ！」

硬く張り詰めた血管を震わせながら躍動するペニスに、プニプニと頬を突かれて肩が大きく跳ね上がる。口の外側から擦られているだけなのに、まるで口内粘膜を直接擦られたように痺れてしまい、顔の筋肉が瞬く間に弛緩してゆく。

（ダメっ、だ、め……ら、めえ……んうっ、欲し、く、ないのにい……どう、してえ……）

懸命にその欲望を拒絶するも、ぬるついた先走りの感触に顔を舐められた瞬間、理性の鎖が断ち切られてしまふのを感じた。

「はあ……あむっ、んじゅうう……」

自分がなにをしているのか、冷静に考えることができな。ただ頭の中は桃色一色に染まつており、目の前に突きつけられた剛直をズブズブと喉奥まで

飲み込んで、躍動する肉幹の感触を粘膜全体で堪能しながら、情熱的に舌を這わせてしまふ。

「ん……んぐっ、じゅぶっ、じゅぶるるう……」

汗の塩辛さと牝の青臭い味わいが口いっぱいに広がり、たちまち神経が灼かれ、蕩かされてゆく。下腹部はキュンツと締めつけられるように疼き、溜まっていた唾液を肉棒に絡ませ、丁寧に洗浄しながら舌先でこそぐのが、気持ちよくて仕方がない。

（んふっ、うううん……や、やめないとお……はむっ、んぐうっ……お、おかひくう、なりゅう……）

心の奥でそんなささやきが聞こえるのに、本能と肉欲が止まつてくれない。理央の意思を離れたように唇は蠢き、男子の汚塊に奉仕しながら、注がれる快感を貪ってしまう。

「おいおい、なんも言わずにいきなり啜え込むとか……どこまで下変態なんだよ、ええ？」

「んうっ……んぐうううっ?! んぶあっ、はあ……あううんっ、んじゅっ、じゅりゅっ……」

発情しきつた喉奥を硬い亀頭に扶られ、嘔吐きそうになりながら、くぐもつた悲鳴をもらす。けれどそれも一瞬のこと、たちまち痺れるような甘い快感が頭の裏側へ突き抜け、腫がトロンと垂れ下がりが、口内粘膜を締めつけて肉棒を欲待たしてしまふ。

（はあっ、あぐうう……こ、こんなの、感じない……あむっ、んううっ、ら、らけるお……はうっ、美味しい、よお……たまん、ないい……）

熱く滾る牝の欲情に、舌がジンジンと疼いてくる。それに合わせて胸からも脚からも、堪えきれないほどの悦びを送り込まれ、床にお尻をつけて座り込んだ体勢のまま、身体が抵抗の力を失っていた。

「はははっ、見なよ早苗。君の相棒だった会長とさたら、嫌がるフリしてチ●ポしゃぶってるよ！」

「れろっ、れろお……んふっ、理央ちゃんは変態ですから、無理やりされてる気分浸つて、興奮し



てるのではないかと……んっ、ちゅっ、ちゅぶう」
 呼び捨てにされ、頭を撫でられて嬉しそうに瞳を細めた早苗が口を開く。その言葉を耳にした理央は、羞恥で顔を真っ赤にしながらブンブンと首を振る。

「ち、違うっ……どうして、そんな風にっ……あたしは、早苗のために、ただ……んむっ、んうっ」

口内に溜まった唾液をチャブチャブと掻き混ぜながら、肉棒が粘膜を撫で擦ってくる。それと同時に、背後から豊乳を揉みしだく手が乳首を掴み、乳肉を持ち上げるようにして刺激を送り込んでくる。

「あきゅっ、んはあっ……あむっ、んぐううっ」
 乳頭を挟み潰す強烈な痛みがすぐさま快楽に変換され、子宮深くに突き刺さった。その肉の悦びに催促され、口いっぱい頬張ったベニスヘジュルジュルと音を立ててさらに強く吸いつくと、頭を振って何度も何度も熱い肉幹を抜き上げる。

「んふっ、ふみゅうう……んぐっ、んふううっ!」
 唇で牡を味わえば味わうほど、太ももや足裏を撫でる硬い感触が際立つて感じられてしまう。慣れたくもないのに馴染まれた肉の悦びに、身体中の性感が開き、肉体を受け入れの準備をさせてくる。

「おお、すっげえトロトロじゃねえか」「へへっ、見ろよ……クリなんか完全に勃起してるぜ」
 「ひううっ、や、やらああっ……触らないでっ、そこはっ……あくっ、うううっ……」

腰をグイグイと押しつけながら、男子たちは理央の太ももを大きく割り開かせ、その奥の蜜壺へと指を伸ばしてくる。プルマ越しに肉棒を擦りつけられた以外は一切の接触を受けなかった淫肉だというのに、身体中を包む性感の波に、牝の本能は完全に目覚めさせられていた。

「んああっ! なにっ、これええ……全然、違うううっ! 胸とか、脚よりいっ……んくっ、くるっ、スゴいのっ……ひいいんっ!」

しどどに濡れそぼった陰唇は抵抗もなく男子たちの指を飲み込んで咀嚼し、クチククチと媚粘膜を吸いつかせ、狂おしいほどの快感を生みだす。
 「そこお……ダメえ……あうっ! んっ……い、弄ら、ないでえ……ひきゅううっ!」

純潔の証を破らない程度に潜り込んだ指先が、奥から大量に溢れる淫粘液を絡めながら、肉壁をいやらしく撫で回してくる。ヒクついて硬く尖った肉芽の包皮は片手で簡単に剥き上げられ、早苗が肉棒にそうしていたように、コシコシと上下に激しく扱かれる。式神の影響を受けているわけでもない、元々の性感体である敏感な女陰から目の眩むような快感が突き抜け、背中を大きくはね上げながら、理央はより強く肉棒に吸いついて快感を訴える。

「あぐっ、んじゅうううっ! はみゅっ、ちゅぶっ、れお……んぐっ、じゅっ、じゅぶるう……」
 「やううう……感じちゃ、だめ、なのにいっ……んううっ! 気持ち……いいのっ、なんでえっ!」

抵抗を失った身体を何人も男子に抱えられ、豊乳を玩具のようにタブタブと弄ばれる。下劣な行為に晒される屈辱が心を苛んでくるのに、満足に動けない肉体を好き勝手に嬲られる被虐の快感が、ゾクゾクと悦びの波を生んで身体を包み込んでくる。
 「ひうんっ! やらっ、こんな……こんなので、イイ力ないっ……イキたく、ない……」

四肢を痺れさせたまま頭の奥で叫ぶも、熱く蕩けた肉体は淫猥な誘惑を退けることができない。膣道を通り上がり、背筋を震えさせ、全身を激しく痙攣させる肉快楽は、一瞬にして脳天へ突き刺さる。
 「気持ちよさそうにしやがって……おらっ!」
 「はむっ、あむううっ、んぐっ、んふうううっ!」
 「やらっ、イクッ、イっちやうううっ!」

コリッと硬い感触が喉粘膜を擦り上げ、絶頂の縁まで上り詰めていた官能が、そのまま弾け――。

「つつつ――え……?」
 「そうに、なる。それだけだった。」
 「じゅぶっ、んぐっ、んううっ……ひうんっ!」
 喉奥をなんの遠慮も加減もなく抉られ、吐き気を伴う息苦しさを感ずるとともに、狂おしいほどの悦びが押し寄せる。それでも、絶頂を迎える半歩手前で止められた官能は、ただ切なさだけを身に刻んで膨れ上がるばかりで、達することができない。
 「なっ、なんでっ、どうしてええっ! んくっ、くひいっ……あひっ、ひはあああっ!」

両方の乳首と陰核がキュッと掴まれ、強く引つ張られると、腰がバネ仕掛けの玩具のように跳ね上がる。男子たちの指先一つで乱れさせられながら、理央は頭を振り乱し、苦悶の表情を浮かべる。
 「どうしてえ……ひううっ、あっ、やはああんっ! こ、れが、早苗の受けた、呪いの……ひんっ!」

それが原因だと気づいたところで、どうしようもない。術と身体を自由を奪われ、過敏すぎる肉体を獣欲に晒された状況は、絶望しか感じられない。
 「へへっ、すげえ痙攣だなあ、会長さんよお?」
 イクことができない理央の状態に気づいているのだろう、男たちが下卑た笑みで見下ろしてくる。それを見透かされ、その上で嬲られることが悔しくてたまらないのに、身体は素直に反応してしまう。
 「ふああっ……んぐうううっ、んむっ、じゅるうう……んふうう、んっ、ぐぶううっ……」

経験もないのに理解する。勃起した肉塊を包み込む口内粘膜をビクビクと震えさせ、その形を刻んで覚えるように締めつける無意識の動きは間違いない、性交で見せしめようとする本能だ。そして――
 「んぐっ、んっ……んうう、れおっ、むちゅ……」

昂りを訴える躍動に瞳を細め、唾液とともに舌を絡めて吸い上げてしまうその行為は、ご褒美を求め奉仕する奴隷の浅ましい本性なのだ。





「やうつ、はあつ、あああ……また、おつきく、な
つてるう……んつ、すぐく、ピクピクしてつ……」

「牡の絶頂の気配を感じ、ニチャニチャと粘液に塗
れるいやらしい水音を奏で、頭を大きく振り立てる
のを止められない。身体中が絶頂寸前の肉悦に満た
され、けれど決して到達点へ辿りつけない焦れつた
さに頭が火照ってクラクラしてくる。」

「へへ、イキたそうなお口顔して吸いついてきや
がるつ……いいぜ、射精してやるよ！」

「んぐううつ?! んむつ、んぢゅううつ……」

「龟头の先が喉奥を擦り、広がった肉傘が上顎粘膜
を引掻いて、ペニスが引き抜かれてゆく。背筋を
痺れさせる快感に瞳を大きく見開き、激しく腰を叩
きつけられるたびに唾液の飛沫を噴きながら、鼻息
を荒くして興奮を見せつけてしまう。」

「やらつ、ダメエエツ……こ、これ、いじよ……ひ
うつ、んああ……き、気持ち、よく……んつ、し
ないでええ……あひつ、ひいひいっ!」

「グブツ、ドブドブウツ! ビュルツ、ピクピ
クツ、ピクンツツ!」

「んひゅうううつ、んぐつ、んらううつ!」

「口内のペニスが弾けた瞬間、喉が灼け焦げるよう
な白いマグマの奔流を浴びせられ、脳内がジンと重
い疼きと痺れで埋め尽くされてしまう。唇だけでな
く、ニーソックス越しに足裏へ、太ももと布地との
隙間へ、熱くまとわりつく精液の感触で全身の神経
がゾクゾクと震えさせられる。」

「あひいっ、ひやつ、ひやめええ……んうつ、は
あつ、熱い、のお……んぐつ、臭、いい……」

「新鮮なザーメンの生臭さが喉から鼻へ滑り込み、
下半身から這い上がる精臭に心が酔わされる。肺全
体に満ちたおぞましい牡の臭気に、肉悦がまた一段
引き上げられ、焦燥感がチリチリと肌を焦がす。」

「うっ……くうう、ふう……」 「へへへ、会長の太

「もも最高だったぜ!」 「おい、さつきと交代しろよ」
「あぐつ、うう……ひやふうんっ?!」

「萎えた肉棒が唇を擦りながら引き抜かれ、ザーメ
ンを塗り込めるようにニーソックス越しに脚を撫で
回され、ピクンツと腰が跳ねた。絶頂を与えられず
に感度ばかりが高まり、唇を支配する式神は食欲に
餌と快楽を求め、口内に溢れた精液を舌で掻き回し、
何度も歯で噛み潰して味わわせてくる。」

「あむつ、ぐちゅつ、くちゅう……んじゅつ、はむ
つ、んぐう……ちやぶつ、ちゅぶう……」

「やつ……こんな臭くて、濃ゆいの……あうつ、ん
つ……ひやつ、の、飲ませちゃ……やああ……」

「理性の拒絶を無視し、言うことを聞かぬ身体は勝
手に精液を咀嚼し、喉全体で熱さと感触を味わうよ
うにゆつくりと飲み下してゆく。胃腸へ生温かい粘
液が流れ込むと、カアツと全身が火照り、感極まっ
たように小さく震えてしまった。」

「うっへ……ザーメン飲んで感じてやがる!」 「イケ
ないのが辛いああ? へつ、もつと感じるよ!」

「はひゅうううつ! ひやつ、はな、ひえ……」

「股間に伸びた指先が膣口を撫でると、淫肉が勝手に
に割れ開いて蜜液が溢れる。毎日のようにオナベツ
トとして利用していた理央を感じさせる欲望に、男
子たちはすつかり魅了されているようだった。」

「会長のエロ乳、妄想以外で採めるなんて、最高で
すよ……」 「学校で見かけるたびに、この熱々マ
コにプチ込んでやりにて思ってたんだぜ?」

「捌っぽい口調でささやかれる、自分の肉体を欲望
の捌け口とした妄想を耳にし、羞恥と屈辱が込み上
げてくる。けれど、それ以上に感じる言い知れぬ興
奮に理央は恐怖し、震える全身に力を入れる。」

「んくつ……ダメツ、こ……このまま、されてたら
……あたし、変になるつ、こんなつ……」
「なんとか逃れようと震える四肢を叱咤して、男子

「の拘束を振り払おうとする。だが——」
「いいねえ、その抵抗! 妄想してたまんまだ!」
「ひううつ! いやつ……やめてええつ!」

「汗と汚液に塗られて濡れ光る太ももをゴツゴツした
手で掴まれ、腰が頭の上にくるような格好に持ち上
げられてしまう。テラテラといやらしい輝きを放ち、
肌を撫でられるだけでヒクウツと蠢く淫肉の動きが
はつきりと視界に映り、精神が羞恥の渦に叩き込ま
れる。ダラダラと流れる淫蜜は、そのまま理央の顔
に降り注いで、汚れた顔をさらに汚してゆく。」

「い、や……なに、する気よお……」

「おーい、六道。ヤツちまつてもいいんだよね?」

「もちろん、好きにしてくれていいよ!」

「簡潔な言葉を交わすその会話を聞いて、肩がピ
クツと大きく震えた。こんな格好をさせられ、周囲
には硬くなった肉棒を滾らせる男子たち——なにを
されるのか想像した瞬間、顔が真っ青に染まる。」

「う、嘘でしょ……や、やめつ……」

「へへ、俺一番乗りね。神門に挿れてねえし!」

「みつともない状態で拘束されたまま、男子の指に
陰唇を大きく割り広げられる。トロトロになつてい
た媚肉は淫涎を垂れ流し、飢えを訴えていた。」

「ひふうううつ! そこつ、やつ……ああ……」

「ニチュ……グチュウウ、グチュル……」

「男子の股間にそそり立つ、六道のモノと同じくら
い巨大な男根を目にし、その巨根で蜜壺を抉られる
のかと、恐怖に背筋が凍る。」

「こ、こんなつ……いやよつ、やめてつ……こ、
壊れちゃうつ、無理い……んひゅううつ!」

「けれど肉傘で陰唇を擦られ、淫肉芽を剥き上げる
ように刺激されながら、大きく膨らんだ龟头を肉壁
に押しつけられると、それだけでお尻が跳ねてしま
い、肉穴から激しく噴き出した淫液の滴が、パタバ
タと顔を濡らしてゆく。」

たぶん——っ!?

ん〜…
多分……

ほ…
本当にこの洞窟
なんかあるん
でしょうね!?

「聖鈴の樹海」の
自然洞窟
だからなあ

何も無い
ワケはない
んじゃ…

ん?

…おお
先客だ

すれ違ったのは
美人巫女さん!

探索して
らっしやる
冒険者さん
ですか?

こんにちは!

エマさん
ライバルよ
ライバル…

聖なる鈴の 啼くセカイ

第5話 行き交う者達

漫画 COMIC
と 琴 慈



ここから奥はぐっと敵が強くなっている

気をつけることだな

…では

あつ
ありがとうございます
ございます

戻るぞ
策をねり
なおさねば

ああ…

やけに強い
視線を
送っているな

何か
気になる
事でも…

あの
少女…

—いや
もじゃ…
感づかれたのか?



—しっ
声を
荒らげるな

…だから
何度も言ってる
いるだろう

そう私の
術ばかりアテに
されても困る

先程の…

神聖な巫女である
私があのような…

…んじゃどうすんだ
こんなせまい所で

いつこつから
出られるかも…

まだ魔物達が
完全に去ったと
いうわけではない

おちつけたって
こんな岩の隙間に

何時間も
隠れられ
ねーだろ

そっだな
やけに魔物の
レベルが高い

その分
奥には
何か……

なんだ
これは……

びっく!?

様子を見て
スキを窺うしか
ないだろうな

たたく……
なんでこんな
浅い地点で……

……ん?

あ……ちよつ!!

さわ……るな
つて……つ

もしやそなたが
妙にあせつて
いたのは

ここが……
こんなになって
いたからなのか?

……んな
せまい所で
お前と密着
してたら

反応するに
決まってるんだろ!!

……わかった

おほえかしん
大祓果刃
この身をもって

……うか

私のせい
なのだな

私……の……

そなたへの
責任を取ろう

……ッ!?



…ほんとに
いいのかわよ…

…
言いながらも
触っているでは…

すま…ない

何故か
変な声…っ

…が…

ぜ善処…
する…っ

あ!!

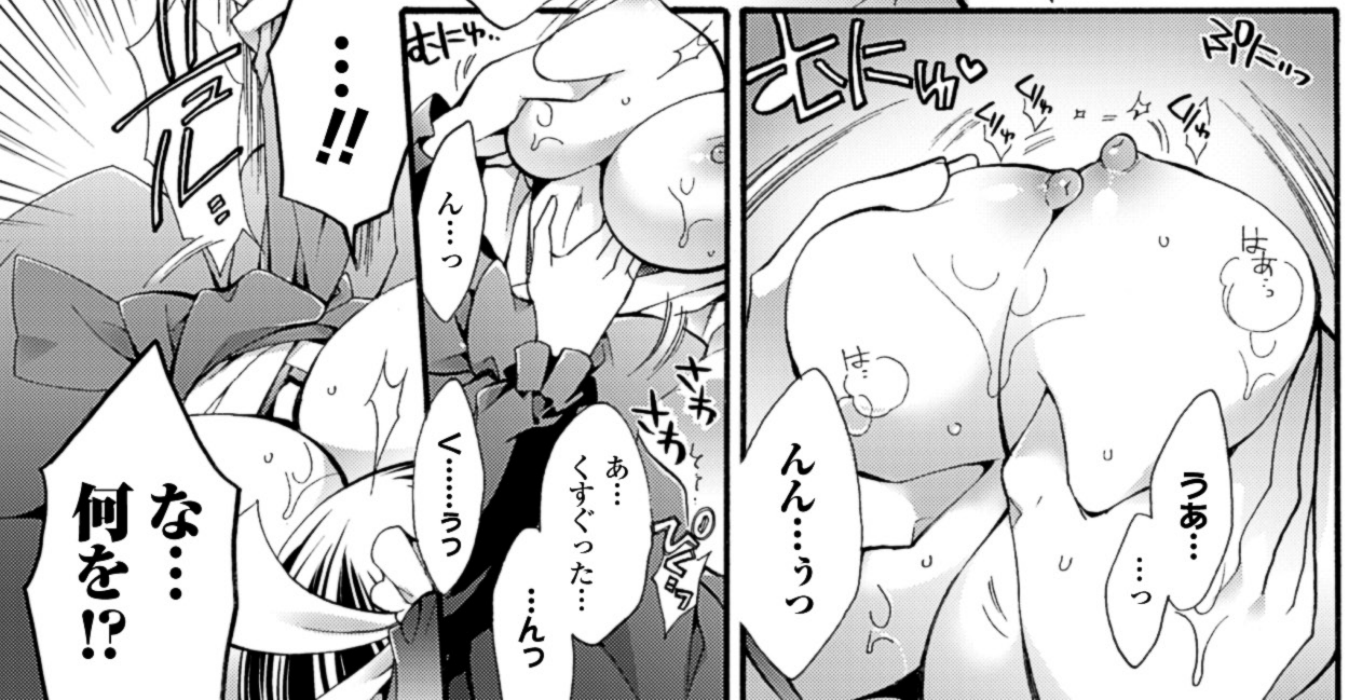
く…う…!!

声は…
いや
むしろ
聞きてーけど

大きさは
抑えとかねえと
魔物に感づか
れるぜ

ん…う

ん…っ



じあ…
…っ

ん…う…

あ…
くすぐった…

…ん…

く…う…

!!

な…

何を!!

…?

責任取るつ
つったじゃん

は…!!

んなモンもつと
たまっちまう
だろーが

は…!!

お…

男は…
女の乳を触れれば
満足するのでは
ないのか?

い…!!

いいから…
オレにまかせろつて

は…

…!!

は…!!

すげ…

もう
ぐちよぐちよに
なってるぜ…

…!!

く…!!

…!!

これならすぐ
大丈夫だろ…

あ…
まっ
待…!!

まかい
おうじょ
魔界王女
金眼のファルジア

恥辱の牝肉奉仕に
美姫の理性が軋みをあげる！

第三話 雌豚王女

小説 / うえだ
NOVEL / **上田ながの**

挿絵 / **ピエール☆よしお**
ILLUSTRATION

登場人物紹介



ファルシア=メルル=カナル=レリアア

魔界六名家の一つであるレリアア家の王女。短気でワガママ傲岸不遜な悪魔っ娘。



夜霧東子

ファルシアを人間界でサポートする役目を負う。優しく気立てがよい。



エリス=クライトン=敷島

転生六名家の一つである敷島家令嬢。無口で表情に乏しく何を考えているのかわかりにくい。

前号までのあらすじ

魔界六名家が最後の独りになるまで殺しあう儀式「魔神転生の儀」。ファルシアは六名家末席のアレイアを倒し、編入した先の学園で女王のごとく君臨するが、ガレスに敗北し陵辱されてしまう。

「魔神転生の儀は、必ず止めを刺さなければいけないというわけではない。そのことはお前も知ってるよなファルシア」

勝ち誇った表情でガレスが笑う。

「だから決めたよファルシア。俺はお前を殺さない。お前には俺のベットになってもらう。そう、俺の屋敷の庭に繋いで……下級妖魔共の母体にもなってもらおうか。くく、楽しみだな……。ファルシアの出産ショー。想像するだけで勃起するなあ」

どこまでも耳障りな声。

「……だ、黙れ……」

ポツリッとファルシアは呟く。

「ああ？ 何だって？」

聞こえているだろうに、わざわざガレスは聞き返してきた。わざとらしく耳まで突き出してくる。

「黙れと言ってるのっ!!」

悪魔少女の口から言葉と共に殺気が溢れ出した。同時に、身体中に振りかけられたガレスの精液が蒸発する様に消えていく。

「な、何だ？」

ファルシアの全身から溢れ出すのは封じられた筈の魔力だった。

「魔力変換……」

ポツリとエリスが呟く。

「ええそうよ。その通り……。本当はこんなことやりたくはなかったんだけどね」

大気を震わす程の魔力を放ちながら、ゆつくりと金眼の悪魔は立ち上がった。半分腕がされたワンピースも、魔力によって再生する。

「あんななんかの汚い汁を吸収するなんて、ホント虫酸が走るわ。でもね、私はそれ以上にあんたが生きることが許せない」

精液とは精気の塊の様なものだ。ある意味でガレスは自分の魔力をファルシアに与えたに等しい。その力をすべて自身自身の魔力に変換した。ただそれだけで、小柄な身体に充ち満ちる力は、ガレスのそれをあつさりと同様にする。

少女の周囲が漆黒に染まっていき、空間自体がぐにやりと歪んだ。大気そのものが腐っていく。撒き散らされるのはただの魔力ではない——死そのものだった。

「だから、ぶつ殺す。もう一秒たりとも生かしておかない!!」

殺気と魔力を進らせながら、ファルシアは壮絶な笑みを浮かべる。

「こ、このっ！ このガキがっ！」

慌てた様にガレスも魔力を解放させようとするが、先程まで散々ファルシアを犯していた時に見せていた余裕は、一瞬で消え去ってしまった様だった。伸ばされるガレスの腕。掌に魔力が集中していく。

だが――

「ごああああああっ！」

魔力を撃ち放つよりも早く、贅肉の詰まった醜い腕は、ズタズタに引き裂かれた。まるで裂けるチーズの様に、腕が裁断される。

「……もうあんなには何もやらせない。あんなにで

きるのには、自分の姿がボロ雑巾の様に変えられていくのを見てることだけ——簡単に死ねると思わないことね！」

言葉と同時にガレスを睨んでいたファルシアの金眼が、キラッと妖しく輝いた。

「……ッが！ うぎやああああああっ！」

見えない刃が肉達磨の身体を襲う。ガレスの右足が吹き飛ぶ。更に間髪入れずに幾本もの刃がガレスに向かって降り注いだ。

両足、両腕は勿論、ぶくぶく太った身体がスライズされていく。贅肉が横の刃でハムのように輪切りにされ、続く縦の刃でサイコロステーキの様に切り裂かれた。凄まじい量の血糊が周囲に飛び散っていく。血の雨でも降ったかの様に、学校の屋上は真っ赤に染まっていった。

「ひ、ひいひいっ！ ゆ、許し、許してくれ。た、頼むファルシア。ファルシアアアアアアアッ！」

そしてガレスの首だけが残る。血の海に転がる醜い顔。そんな状態であっても命は取り留めている様だった。が、先程までの余裕は完全に消え去ってしまった。無様なまでに顔に恐怖を張りつかせ、必死に命乞いをしてきた。

「助けろっ！ エリスッ！ 俺を助けろおっ！」

人間などにまで救いを求める始末である。が、エリスは動かない。当たり前だ。たかが人間の力で魔神を止めることなど決してできないのだから。

「……何かいい残すことはある？」

ファルシアはガレスを足下に見た。

「なあ、た、頼む……助けてくれ。お願いだ。わ、悪かったと思ってる。す、少し巫山戯過ぎただけなんだ。す、済まない。あ、謝るからさ……」

媚びる様な表情が浮かぶ。あまりに無様過ぎる姿に、正直ファルシアは呆れた。溜め息まで漏れる。

「……分かったわ」



「え？ お、俺の気持ち分かってくれたのか？」
ガレスの顔に歓喜の色が燈った。それを見てファ
ルシアも唇で弧を描く。

「ええ……本当に……」

笑いながら金眼の悪魔は肉達磨の頭部を掴み、醜
い頭を持ち上げた。

「そ、そうだよな。お、俺達のな、仲だもんな。へ
へ、さ、流石ファルシア……ま、魔王の器だ……」

頭だけで媚びた笑みをガレスが浮かべる。あまり
に醜い姿。

「……あなたが死にたがってるってことが……ね」
言葉と同時にファルシアは空いた手で肉達磨の両
目を潰す。ブジュリッ指先に柔らかいものが潰れ
る感触が伝わってきた。

「……ッッ!!」
言葉にならない悲鳴がガレスの口から漏れる。指
を引き抜くと、噴水みたいに両目からドス黒い血が
飛び散った。

「消えなさいっ!!」
返り血を浴びることも斟酌しない。少女悪魔は血
で真っ赤に染まりながら、醜い頭部を無造作に投げ
た。その頭に向かつて右腕を突き出す。

「我に刃向かいし罪、万死に値する。地獄の業火に
焼き尽くされろ——断罪の極炎!!」

大気さえも腐らせる魔力がガレスの頭部一点に集
中する。刹那。

「ぐぎやあああああああああああつ!!」
赤ではない。黒い炎が肉達磨の頭部を包み込む。

ガレスの口からは凄まじい悲鳴が上がった。

業火に包まれる悪魔の頭部が、ポトリッと屋上に
落ちる。

「うがっ! うがあああつ! たすけっ! だずげ
でぐれえええつ! だのむうううつ!!」

炎に包まれて猶、魔神は死なない。絶叫し続ける。

肉の焦げる匂いが、ファルシアの鼻にも届いた。
そんなガレスの頭部にゆつくりと近付いていく。
彼の頭を再び足下に見据え。金眼の悪魔はゆつくり
と足を振り上げた。

「さよならっ!!」
短く吹き、容赦なく足を振り下ろす。

グシャッ!
肉が潰れる感触が足裏に伝わってきた。脳髓が割
られたスイカのように周囲にぶちまけられ、ガレスの
魔力が辺り一帯に四散する。飛び散る血肉。血溜まり
が辺り一帯に広がっていった。

「はあはあはあ……」
ファルシアは肩で荒い息を吐く。変換した魔力が、
止めと同時に身体から離れていくのが分かった。小
柄な身体がふらつく。立っていることができず、そ
の場に膝をついた。

「わ、私が勝つ……私こそが、魔王となるべき……
……そ、存在なんだから……お前みたいな肉達磨に、
負ける筈な、んか……ないの……よ……」

意識が遠のいていく。本来ならば自分のものでは
ない力を、無理矢理自身の魔力に変換した代償だっ
た。ゆつくりと少女悪魔はその場に倒れていく。

「……ありがと」
意識を失うその瞬間、エリスの吐ききりがファルシア
の耳に届いた。

(な……に?)
一瞬覚える違和感。だが、ソレを考える間もなく、
少女悪魔の視界は暗転した。

(……あ、諦めちゃ駄目よ。助ける。私が助けない
と……ファルシア様は私を助けてくれた。その私が
諦めてどうするの)

学園外で夜霧東子は決意する様に頷いた。未だ校
舎を取り巻く結界は健在。これを打ち破らなければ
ファルシアはまともに力を發揮することもできない
筈だ。それくらいのこと東子にも分かる。

(早くしないと)
あの肉達磨みたいな悪魔の手で、ファルシアが殺
されてしまうかも知れない。

(私が諦めちゃ駄目なんだ!)
何もできないといつも思っていた。結局は足手ま
といにしかならない自分。そんな自分が嫌いだった。
だから正直何もできないものだと言いつつ諦めかけていたけ
れ、今ここで動けるのは自分しかないのだ。

「やれる、私はできる——いえ、やらなくちゃいけ
ないの。だから……」
胸に手を当て、意識を集中させる。

「我が夜霧の血よ。私に力を……。封じられし漆黒
の力を……黒翼の鍵」

東子は魔力発動のキーを口ににする。これに呼応す
る様に、少女の身体からは人間のものとは思えない
程の魔力が、滲み出る様に溢れ出した。目に見える
程に濃密な魔力。少女の身体を包み込むソレは、ま
るで黒い翼の様に見えた。

「まずはこの結界を解析す——」
「させないわよ」
「……っえ!!」

東子の決意に介入する様な声が、背後から聞こえ
てきた。慌てて少女は振り返る。そして、そのまま
硬直した。

「う、嘘……何で貴女が……」
一人の女が視界に映る。

胸元が大きく開いたドレスに、紅髪のセミロング
ヘアの女。美しい切れ長の瞳が、東子の姿を捕ら
えている。同性の目から見ても美しい女だった。だが、
その美しさ以上に東子が目を引かれたのは、その頭

部から生える二本の角。一見するとアクセサリのように見えるのだが、明らかにそれは女の頭部から生えている。

「久しぶりねお嬢ちゃん。私のこと……ちゃんと覚えてた？」

忘れる筈がない。

「あ、アレイア……アレイア……ミール……ソレイユ」

思わず東子は呟いた。

「そうよ。よく覚えていたわね……。そのご褒美にたっぷり天国を見せてあげろわ」

悪魔は妖艶に微笑む。それと共に、東子の足下に青白く輝く魔法陣が出現した。その中から、数十、数百匹の不気味な蟲が姿を現す。

「……ひいっ！」

東子の顔が一瞬で青白く染まった。

「悪いわね。邪魔させるわけにはいかないの。あの生意気なクソガキが始末されるまで、私の玩具になつてちょうだいね」

そして——地獄が始まる。

*

「なあ、こいつが詫びるってマジか？ 絶対有り得ないと思うんだけど」

「それに詫びたくらいで俺達の怒りがどうにかなると思ってるのかよ」

「まったくだ。謝罪程度じゃ収まらないぞ」

何か声が聞こえる。ざわつきが耳に届く。不快なノイズの様な声だった。

「……う、う……何よ……五月蠅いわね……」

ファルシアの遠ざかっていた意識が、耳障りな声によって引き戻される。ゆつくりと閉じていたまぶたを開く。視界に映ったのは、三人の男子生徒達の姿だった。彼らがまじまじとこちらを見ている。晒された珍獣でも見るかの様な表情を全員が浮かべていた。

「うおっ！ 起きたぞっ！」

こちらが瞳を開けた途端、生徒達は一斉に後退る。「大丈夫……。何もできない」

彼らの身体にはファルシアへの恐怖が染みついている様だった。が、そんな彼らを宥める声の一つ。声の主はエリスだった。相変わらずの眠たげな表情。ただ、僅かではあるが口元には笑みが浮かんでいる。

「……エリス……これはどういうつもり？ 貴女の主はもう滅びた筈なんだけど……」

既に彼女が戦いに参加する理由は失われた筈だ、ギロリツと彼女を睨みつつ、ファルシアは即座に自分の状況を確認した。

場所は教室。教卓が撤去された黒板の前に、座らされている。言葉の内容から、こちらに対して恨みを持っていない。容か、男子生徒達に見覚えはない。というか、男子生徒の顔を覚えていたことだ。多分偶然居合わせたので連れてこられたのだらう。椅子に座るこちらを、興味深く見つめている。椅子から立ち上がることはできない。

（魔力拘束か……。それに私の力も戻ってない）

どうやら未だに結界の効果は持続している様だった。ただ、そんな状況であっても傲岸不遜な態度は改めない。最早ガレスは滅びたのだ。たとえ結界の効果があるとはいえ、人間如きに後れを取るつもりはない。

「……違う。主などいない。主は私。私の主は私だけ……」

こちらの言葉に対して、エリスは首を横に振り、語り出した。彼女にしては信じられない程の饒舌ぶりである。

「……転生六家の一つクライトン家の目的は、魔神転生の儀に助力することじゃない……」

ほとんど表情はないままに、少女は言葉を紡ぐ。「転生六家の目的が……儀式の助けじゃない？ 何

を巫山戯たこと……」

「巫山戯でない。私の……クライトンの目的はこれ。魔神を滅ぼし、その力を奪うこと。魔神を超えた人間になる。だから感謝してる。お前のお陰で、ガレスの力を奪えた……こんな風に」

「なにっ——くああああっ！」

そこまでエリスが語るのとほぼ同時に、唐突にファルシアの全身を稲妻の様な魔力が駆け巡る。痺れを伴った激痛が走り、思わず悲鳴を上げた。

「……ぐ、くう……な、何を……た、たか……人間如きが……わ、私に何をっ?!」

「ただの人間じゃない……。私は魔人。魔神の力を得た、人を超えた存在」

ファルシアの言葉を否定する。エリスは不敵な笑みを浮かべながら、自分には人ではないと宣った。その言葉を裏付ける様に、金髪少女の小さな身体から人の身では考えられない程の魔力が溢れ出す。

「……まさか……ほ、本当にガレスの力を……」

吸収したというのか？ たかが人間が……

「ガレス……だけじゃない。アレイアからも奪った……。次はお前の番……」

そこで一度エリスは言葉を切り、教室に集めた同級生達を睥睨した。

「ファルシアがみんなにお詫びしたがつてる。謝りたいっ」

「何を言ってる——」

そんなつもりはさらさらない——筈なのに、勝手にファルシアの身体は動き出そうとする。

「な、これはっ?!」

魔力の糸に身体が絡め取られているのが分かった。駄目っ！ 人間如きに自由にされるなんて。そんなの絶対に駄目よっ！

矜持が許さない。必死に魔力を集中させ、敵の拘束を解こうともがく。だが、結果は未だに健在であ



り、指一本すら自由にできなかった。意思に反する肉体。行動を止めようと力を込めると、神経の一本一本が悲鳴を上げた。

肉体は勝手に椅子から立ち上がってしまう。自分の意思ではどうにもできぬままに、生徒——人間達の前に土下座しようと思つて居るの!?」

「やめさせなさい!! こ、こんなことをこの私にして、ただで済むと思つて居るの!?」

必死に身体を止める。まるで誰か上から押さえつけられているかのように感じた。その状態のまま、エリスに殺気を送らせる。が、人間の少女は魔神の殺気さえも意に介さない。眠たげな表情を浮かべたまま「土下座」と短く呟いた。

「くああっ!」

途端に全身にかかる魔力負荷が増幅する。肉体を止めることができない。人間達の前に跪き、両手を床につけてしまう。そのまま完全に土下座の体勢を取ることになってしまった。床に頬が密着する。

「謝罪」

そこに更にエリスの言葉が飛ぶ。

「(何で私が謝罪なんかっ!)」

すぐにいい返そうとした。しかし、それは言葉にならず、代わりに口を突いて出たのは——。

「……あ、い、今までのことはわ、悪かったわよ。お、お前達に振るつた無礼の数々……こ、ここに詫びさせてもらうわ……」

「何なの? 何なのよこれ? 何で私が人間なんかに謝つてるのよ!」

言葉さえも敵の意のままになってしまふ。自分の行為がまるで理解できなかつた。屈辱に身が震える。頭を下げられた生徒達でさえ、ざわついてた。

そんなファルシアの耳元にエリスが唇を寄せる。

「彼らに精気を吸い出させる。それを私がもらう」

「——人間なんかに? こ、この私が精気を吸われ

るなんて有り得ないわ」

「……身体の自由は奪つた。もう私の思うがまま」とても信じ難い言葉だった。たかが人間如きにと

いう想いばかりが強くなる。だが、エリスの言葉は真実だった。「今更土下座くらいで許せると思つてるのかよ!」

「大体謝罪なのにその口の利き方は何だよ! 礼儀つてもを知らないのか?」

と息巻く生徒達に対し、ファルシアの身体は自分の意思とは関係なく動き出し始めてしまふ。

「分かつてるわ。だから……お、詫びの証として……あんだ達にこの私が奉仕してあげるわ。感謝しなさい」

「勝手に何を言つてるの? 誰が人間なんか奉仕を……く、動かない。私の自由にならない。どうして? 何故人間如きの術で、この私があつ!」

ガレスとアレイア——二人の魔神の力を吸つたエリスの能力は本物だった。操り人形にでもされてしまったかの様。まったく身体が利かない。

「……奉仕つて、な、何をするんだよ」

「こそ、そうだぞ。生半可なものじゃ許さないぞ」

生徒達は互いに顔を見合わせ、震え声で宣つた。どこか緊張している様にも見える。何を想像しているのかは、その姿からすぐに想像することができた。

(たかが人間が、この私で不埒な妄想を。それだけで万死に値するわ。殺す。バラバラに引き裂いて、豚の餌にでもしてやるんだから!)

反射的にファルシアの脳裏には罵り言葉が浮かぶ。だが、それだけ。言葉が口をつくことはない。

「分かつてるわよ。たつぷり気持ちよくさせてあげるから」

それどころか、彼らの言葉に素直に頷いてしまつてた。土下座の体勢から顔を上げ、生徒の一人に近付いていく。その手が勝手に男のズボンを抱み、

何の躊躇もなく下着ごと引き下ろした。

「な、何するんだよ!」

唐突な行為に、男子生徒は声を上げる。ある程度予想はしていたのだから、いきなりこんなことをされるのには慣れていない様だった。とはいえ、激しい抵抗をすることもない。

(く、人間なんかの粗チン——臭い。それに包茎最低よ。そんな汚いものをこの私に見せるんじゃないのっ! き、切り落とすわよ!!)

本来ならば反射的に漏れ出す筈の言葉だったが、心の中だけで完結してしまふ。代わりにファルシアの口から発せられたのは、

「……緊張なんかする必要はないわ。大丈夫。すぐに気持ちよくしてあげるから。だから、あんだもたつぷり射精しなさいよ」

などという言葉だった。

少年のペニスはその言葉だけで簡単に勃起する。室内に漂う魔力に影響されているのか、人間のそれも包茎ペニスのものとは思えない程に巨大だった。

吐き気を催させる様な臭気も同様に漂い始める。(ち、ちゃんと皮の中まで洗ってないんじゃないの。チンカスの臭いが溢れ出てるじゃない)

「くっさいチンコね……。触るだけで腐っちゃいそう。まったく……こんなに硬くしちゃつて!」

意思と行動が剥離する。ファルシアの手は躊躇することなく勃起包茎ペニスを掴んだ。男子生徒が悲鳴を上げる。手袋越しに肉棒の熱気が伝わってきた。

ピクピク掌の中で震えるペニス。その先端部に指をかけ、亀頭を隠していた包皮を剥き始めた。

「うあつ! だ、駄目だつ! い、痛いって……」

慣れない行為に少年の口からは悲鳴が上がる。ただ、悲鳴が聞こえたからといって行動は止まらない。

ファルシアの手によって、綺麗な紅い色をした亀頭が剥き出しとなった。が、未使用のペニスだからと

いつて完璧なまでに綺麗だというわけじゃない。「やっぱりチンカスが沢山ついてる。ちゃんと掃除しておきなさいよね……でも、この臭いが堪らないわ。触ってるだけで濡れちゃいそう」

(……臭すぎよ。私の手が腐っちゃうじゃない)

恥垢の付着した肉棒など、触れるどころか見るのさえ我慢ならない。だというのに、表情は妖艶なものとなり、積極的に肉棒に指を絡めてしまう。そうして肉棒を握ったまま、男子生徒に対し「火傷しちゃうくらい熱いわね。私の手の中でビクビク震えてるわ」などといったつ、少年達に見せつける様に腰を前後に振ってみせてしまう。自らスカートを捲り上げると、誘う様に指先で秘裂をなぞった。この行為に肉棒は、より硬く、大きくなっていく。

「ふふ、もつと大きくなった。臭いもきつくなって触ってるだけで吐きそう……最悪なチ●ポね」

笑みを浮かべながら、ファルシアはグチユグチユと口腔内に唾液を溜めると、それを肉棒にだらりと垂らした。唾液が肉棒を濡らしていく。

「また大きくなった。最悪とか言われたのに、興奮しちゃうの？ ホントどうしようもない変態ね」

腰を振り、妖艶に微笑みながら、掌で肉茎全体に唾液を塗りたくっていった。指を動かすだけで、ニチャニチャと音が響く。そのたびに少年の口からは「あっあっ」と少女の様な悲鳴が漏れた。

「男に喘がれても全然嬉しくないんだけど。最悪。ホント人間ってサイテーね」

じゅごっじゅごっじゅごっ！

といったつ、決して手の動きを止めない。それどころか、より速度を速めていく。自分の掌まで唾液塗れになっていくことも気にしない。肉根からカリ首、先端部まで余す所なく扱き立てる。

(熱い。それに硬い。な、何でこの私が男のチ●ポなんかを扱かなくちゃいけないのよおっ！)

必死に自分にいい聞かせるのだが、意思と肉体は完全に剥離している。

「あゝ最悪。変態。この下変態」

といいながら、肉棒を弄び続けるのを止めることができなかった。

しゅごっしゅごっしゅごっ！

「な、何が変わったよ。お、お前のほうがよっぽど変態じゃないか。こ、こんな痴女みたいなこととしてそんなにチ●コが好きなのかよ！」

掌で肉棒を扱き上げる。肉茎を撫で上げるたび、ペニスは激しく震え、より大きく勃起していった。鼻を突く匂いもより強烈なものになっていく。肉先から溢れ出す先走り汁が、掌に絡まる感触が不快だった。ただ、それでも肉体は止まらない。そんなファルシアに対し、遂に罵られるだけだった少年がこちらの行為をなじる様な声を上げる。それに対して操られた肉体は、

「ええそうよ。チ●ポが大好きなの。こんなに硬くて臭くて……握ってるだけでイッチャいそう。あんただってそうなんですよ？」

語りながら誘う様に腰をうねらせつつ、ファルシアは空いた手まで動かし、肉棒だけでなく少年の玉袋にまで手をかけた。優しく指と指で玉を転がす。

(私が……何でこんな……ああ、気持ち悪い) ドクンドクンと手の中で肉棒が脈動する。より多く分泌される肉液によって、ぐちゅぐちゅと嫌らしい音が響いた。龟头が不気味な程に膨れ上がる。

「ほらほら、正直になりなさい。チ●ポが震えてる。射精したいんでしょ？ どびゅどびゅザーメン吐き出したんでしょ？」

弄ぶ手の中で、肉棒は不気味な程に膨れ上がっていた。既に龟头部はパンパンになっている。

「あっあっ！ も、もう駄目だ。で、射精するっ！」 遂に男子生徒は限界を告げた。肉棒が跳ね上がる

様に震える。瞬間――

びゅぱっ！ どびゅるっ！ どびゅるるうっ！

と大量の白濁液を撃ち放った。

「んあっ！ ちよ、あ、熱いじゃない。ああ……もう、私の顔があ……」

激しい射精。顔にまで白濁液が届く。

(汚い。ほ、誇り高い、気高い顔を！ この私を――たかが人間があっ！)

頬や鼻にこびりつくザーメン。粘つく熱液が、皮膚上を垂れ流れていくのが分かった。掌もべとべとに穢される。指と指の間に、白濁液が糸を伸ばした。掌が熱い。

「おい、今度は俺達の番だぞっ！」

「そうだ、もう我慢できねえっ！」

その光景に、見物しているだけだった男子生徒達が、肉棒を突き出してきた。

(あんなに……巫山戯ないでっ！)

「分かっているわよ……ホント人間って堪え性がないんだから」

肉体に意思は届かない。微笑みながらファルシアは、今度は肉棒を口に咥えた。

べちゅっ！ くちゅっ！ じゅっぽじゅっぽ！

口腔に感じるペニスの熱感。腐臭が広がっていく。既に肉棒からは先走り汁が溢れ出しており、舌が痺れる様な苦味を感じた。

(臭い！ 不味いっ！)

それでも肉体の自由は戻らない。汚く不味い肉茎に自ら舌を絡ませてしまう。そのまま躊躇することなく、ジュボジュボと顔を前後に振り始めた。舌と唇でペニスを扱き立てる。同時に腕を伸ばし、口で咥えきれない男達の肉棒を握った。

「ど、どほ、きもひいい？ んぼっんぼっ！」



た。晒されるのは情けない顔。口腔で肉棒が何度も震える。喉奥が亀頭で塞がれ、息が詰まった。

「お、俺も頼むよっ！」
そこにもう一人の生徒が肉先を向けてくる。カウパー塗れのペニスを頬に密着させてきた。

（ぶ、無礼者っ！）
肉棒を切り裂きたい衝動が生まれる。

「わふあつへるわよ。んもっ！ ぶもおおおっ！」
が、切り裂くことなどできる筈もなかった。そこどころか、小さな口を限界以上に押し開き、もう一本の肉棒も同時に啞える。

「んごっ！ ぶごおおっ！」
（さけ、裂けるっ！ 私の口が裂けちゃううっ！）
二本のペニスに内側から押され、ブクツと両頬が膨らむ。閉じることのできない口端から、だらだらと大量の唾液が溢れ出した。

「すげっ！ マヌケな顔だっ！ うあつ！ もつと舐めてくれよ！」
「お前とチコが擦れあつて気持ち悪いんだけど。き、気持ちいいな。ほら、もつと啞えてくれよ」
魔力に影響されているのか、異常な状況も少年達はずんなりと受け入れ、ファルシアの肉体に斟酌することなく、無理矢理腰を振り始めた。

ぶごっ！ じゅぶごっ！ ぶじゅごっ！
「おごっ！ んえっ！ ぶぶえええっ！」
二本のペニスが交互に喉奥を突く。そのたびに目の前が真っ白に染まった。亀頭と口腔粘膜が混ざりあう。ぬちゃぬちゃと口腔内で粘糸が伸びているのが、分かってしまった。食道まで届きそうな程に肉棒を押し込められ、吐き気まで湧いてくる。それでも勝手に動き続ける肉体は、肉棒に舌を絡め、カリ首を締め上げる。無様に広げられた口唇で、肉茎を抜き上げた。二人の肉棒を掌で包み、先走り汁と唾液を塗りたくる。

（く、くさつい。臭くて、不味くて、く、るしい）
喉奥を激しく突かれ、思考さえも麻痺しかけていた。苦しみしか感じられない。
「おい、おいひっつ、おひいの！ おつ、おぼっ！ もっほ、もつほづいでええっ！」
だというのに、口は勝手に男達を求める。

「何だよそれ。そんなにチコが好きなのか？」
「やっぱ淫乱だな。たつぷり味わわせてやるよ！」
この求めに男達は興奮を高め、より激しく腰を振り始めた。

じゅごっつじゅごっつじゅごっつ！
「ぶぐっ！ むぐっ！ げほおっ！」
玩具の様に小さな顔が前後に振られる。ピストンのたびに肉棒は硬度と熱気を増していく。あまりに喉を突かれ、舐めには涙さえ浮かんでしまった。ビクビクと震える肉棒。そして――

「うあつ！ で、射精るっ！」
「俺もだっ！」
二人の男子生徒達が同時に限界を告げ、どびゅっ！ びゅぶるっ！ どつびゅるるうっ！

「んぶえっ！ おぶっ！ んげえええっ！」
（で、射精てるっ！ 私の口の中に、人間なんかの汚い汁が射精てるううっ！）
口腔内に濃厚な白濁液が撃ち放たれた。小さな口など一瞬で埋め尽くす程の量。まるで熱湯を注がれているのではないかと思う程に、口の中が熱い。同時に耐え難い程の臭気まで、広がった。口端からビュブルツとザーメンが溢れ出す。

（不味い。汚い。汚い汚い汚い汚いっ！）
あまりの嫌悪に、ぶつぶつと鳥肌が立った。
「うあつ！ サイコー！」
「これがフェラかあ」
ファルシアとは対照的に、少年達は本当に気持ちよさそうな表情を浮かべると、じゅぶつと肉棒を口

腔内から引き抜いた。
「うおえっ！ げろっ！ うえええっ！」
自由になる口腔。途端に金眼の悪魔はたつぷり注がれた白濁液を吐き出した。何度も咳き込み、喉奥に溜まったザーメンを最後の一滴まで吐き出そうとする。何度も何度も咳き込むファルシア。その為に鼻水まで垂らしてしまつたが、それを気にするだけの余裕はなかった。

（腐るっ！ 私の口が腐る！）
精液が口腔に溜まっていると想像することさえおぞましい。床と口の間に、白濁液が糸を引いた。

「立場が分かった？」
そんなファルシアに、エリスが言葉を向けてくる。眠たげな顔が腹立たしい。

「だ、黙りなさい……。あ、あんたこそ、自分の立場を理解しなさいよね。私にこんなことをして、無事で済むとは絶対に思わないことね」
精液を垂らしながら、少女を睨む。するとエリスは珍しく笑みを浮かべた。

「まだ分かってない。なら、もつと屈辱を与える」
パチンツと彼女は指を鳴らす。すると、射精を終えた男子生徒達がまるで操り人形の様に動き出すかと思うと、こちらの腰を掴み、無理矢理引き上げてきた。犬の様な四つん這い体勢を取らされる。

「な、何をっ！ 放しなさい！ 放すのっ！」
が、勿論その言葉は届かない。男達はファルシアの言葉を受け流し、突き上げさせた下半身のスカートを捲り上げた。そのままショーツに手をかけ、それを引き裂く。

「やめなさいっ！ 本当に殺すわよっ！」
尻尾の生えた白く艶やかな、張りのある尻が人間の前に晒される。呼吸に合わせて蠢く尻肉。衣装に隠された乳房が、下向きになったことで僅かにボリュームを増している様に見えた。

「やめなさいっ！ 本当に殺すわよっ！」
尻尾の生えた白く艶やかな、張りのある尻が人間の前に晒される。呼吸に合わせて蠢く尻肉。衣装に隠された乳房が、下向きになったことで僅かにボリュームを増している様に見えた。

「やめなさいっ！ 本当に殺すわよっ！」
尻尾の生えた白く艶やかな、張りのある尻が人間の前に晒される。呼吸に合わせて蠢く尻肉。衣装に隠された乳房が、下向きになったことで僅かにボリュームを増している様に見えた。

「やめなさいっ！ 本当に殺すわよっ！」
尻尾の生えた白く艶やかな、張りのある尻が人間の前に晒される。呼吸に合わせて蠢く尻肉。衣装に隠された乳房が、下向きになったことで僅かにボリュームを増している様に見えた。

「やめなさいっ！ 本当に殺すわよっ！」
尻尾の生えた白く艶やかな、張りのある尻が人間の前に晒される。呼吸に合わせて蠢く尻肉。衣装に隠された乳房が、下向きになったことで僅かにボリュームを増している様に見えた。

「やめなさいっ！ 本当に殺すわよっ！」
尻尾の生えた白く艶やかな、張りのある尻が人間の前に晒される。呼吸に合わせて蠢く尻肉。衣装に隠された乳房が、下向きになったことで僅かにボリュームを増している様に見えた。





プライドの高い金眼の悪魔にとつては、耐え難い程に屈辱的な行為。だが、それだけでは終わらない少年達は白い尻に手をかけ、無理矢理左右に押し開く。桃色の肛門が、人間達の眼前に映り込んだ。

「いやっ！ 見るなっ！ 見るんじゃないわよ!!」
ヒクヒクと震える小さな菊座。そこに男達の顔が近づく。鼻息が届くのが分かった。

「たっぶり流し込む」

そんなこちらの様子を眠たげでありながらどこか楽しげに見つめつつ、エリスが呟く。彼女の手にはいつの間にか注射器の様なものが握られていた。中には透明な液体の様なものが入られている。

「な、何をするつもり……」

ソレが何なのか、ファルシアはすぐに理解した。だが、認めたくはなく、反射的に問いかける。しかし、エリスは答えない。無言のままこちらの背後に回り込んで来た。

「や、やめなさい。やめるの。いい、今ならまだ許してあげるから。だからやめなさい。あ、あんただってまだ死にたくはないでしょ……」

必死にファルシアは敵の行動を止めようとした。

「……お前は私から逃げられない」

冷たいエリスの言葉が届く。

悪魔少女は必死に身体を動かそうとした。尻尾が揺れ、僅かながらに腰も動く。とはいえ、本当に僅かな動き。艶かしく揺れ動く腰は、まるで男達を誘っている様にさえ見えた。

「浣腸」

短くエリスが間拔けな単語を口に出す。そのまま注射器の先端部を、菊座に密着させてきた。

「ひっ！ つめたっ！」

伝わってくるのはガラスの冷たい感触。反射的にピクッと腰が跳ねる。勿論、密着するだけでは終わらない。

「じゅぶっ！ じゅぶぶぶぶっ！

ゆっくりとした動きで、直腸内にガラスの容器が潜り込んで来た。

「うひっ！ こ、これ以上は許さないわよっ！ うあっあっあっ！」

腸内に冷たい異物感が広がる。思わず悲鳴を上げてしまった。

「……無様に汚物を撒けばいい」

浣腸器が腸壁を擦り上げる。冷たくエリスがいい放つ。

「だ、だめっ！ そ、それだけは、それだけはやめて、やめてえええっ!!」

想像するだけで身が引き裂かれそうな行為だった。流石のファルシアも悲鳴を上げてしまう。だが、敵

にこちらの懇願が届く筈もなく――。

「ずじゅっ！ ぎゅじゅずずっ！」

「うほっ！ ほおおっ！ は、はいつてくっるっ！ つ、冷たいのが、私のお腹に広がるうっ！」

浣腸液が直腸内に流し込まれた。冷たい液体が下腹部に広がっていくのがはつきりと理解できる。肛門が、キュウツと窄まり、太股が震えた。

「あっ、はあああっ！ んあああっ！」

分泌される脂肪。ファルシアはその金眼を無様なまで見開き、荒い吐息を漏らす。尻尾がピンツと伸びていた。

「全部入った」

大量の浣腸液で、下腹部が張る。エリスは満足そうに呟くと、キュポソツと音を立てて浣腸器を引き抜いた。

「んひんっ！ く、んんんんっ！」

肛門にされていた蓋がなくなり、すぐに液が逆流しそうになる。ファルシアは括約筋を総動員させ、必死にそれだけは耐えた。絶対に漏らすことだけはできない。

「こ、この……よ、よくも……」

ギョルルソツとはしたくない音が鳴り響く。そんな状態のまま、ファルシアは敵を睨みつけた。

「まだ終わらない。今度はこれ」

エリスはその視線を涼しい顔で受け流しながら、空になった浣腸器を捨て、新たなものを取り出す。ソレは小さな卵の様なものだった。

「そ、それは……」

「……妖魔の卵。溢れ出すお前の魔力を吸って成長する。お前に子供を産ませてやる」

「よ、妖魔？ こ、この私がそんなもの、う、産む筈がな――んぎいいいいっ！」

「じゅごっ！ じゅぶごおおおっ！」

エリスの行為は素早く、躊躇がなかった。まるで流れ作業の様に、卵を握った手を、ファルシアの剥き出しになった腔内に潜り込ませてくる。

「むっ！ おっ、おおおっ！ も、もうはいらっないっ！ はいらないのおっ！ ほおおおおっ！」

エリスの腕で蜜壺が拡張されていく。身体の中に穴を穿たれているかの様だった。上がる悲鳴。だがエリスは止まらず、遂に腔奥に達する。そして――。

「ぼごっ！ ぶごっ！」

「おほっ！ ほおおおっ！ し、子宮！ しぎゅうに、うでがはいっでるうっ!! おっおっおっ！」

子宮口まで押し開かれ、妖魔の卵を着床させられてしまった。

「……本番はこれから」

エリスが笑う。

*

「うわっ！ 何あれ？ サイター」

「おいおい、すげー光景だな。この学校で雌豚なんて飼ってたっけ？」

男子生徒、女生徒――ありとあらゆる生徒達が、ざわめく。彼らが言葉を向ける先には、当然の様に



ククク
老いたるとはいえ
上弦の男の精が
一度や二度で
尽きるものか

もう一回…
って…
あう

終わらぬ陵辱にナリカとハルカは



ナリカ…
ごめんなさい
…パパ…



…う
う…う…う



それとも逃げ出すか？
お前一人なら
見逃してやらんでもないぞ



ふん何だ
羨ましくなったのか
メス犬

もう...やめて...
...あんまりですつ
私が代わりますから...



よからう
このさもしい穴で
男共を安心させてやれ

ぬかしおる
そんな様で仲間の
心配とはのう

ひぐろっ



はい...そうです
羨ましいんです...
だから...

.....

キーッ

せきッ

せきッ

せきッ

…う…
み皆さん

大丈夫…

私…私達が
必ずお救いしますから

わ私の…っ

ハルカの…ココで
お相手致します
…から

もう少しだけ…
待っていて…下さい…

うっ

ちゅっ

ひっ

超次元 超次元 超次元

立待月「影絵」

MISS BLACK
原作 アリスソフト
ORIGINAL
©ALICESOFT





んん...
んん...

うっあ...
じ自分から...



あ...?

うう...
す...つげ...

あ
やべ...っ!



ごごめんっ
中...っ

いいえっ
いいんです...

...我慢なさって
いたんですね...

あっ



み皆さ…



んっ？



ああっ

まだまだ！
まだ抜かないで…
もう一回…
もう一回…



お俺も
はやく…

俺も



あ…や…皆さん
落ち着いて…っ

んむっ

あうま待って…

じじゃあ俺は
ここに…っ

おろろっ

んぽっ♡

こんな体中に
熱いので…されたら…っ

あせおおっ♡

いーっちやせーっ
♡…っ…っ…っ

クッ
クッ
クッ

んんん
かお

んんん
んんん

スッ
スッ

んんん

かっ

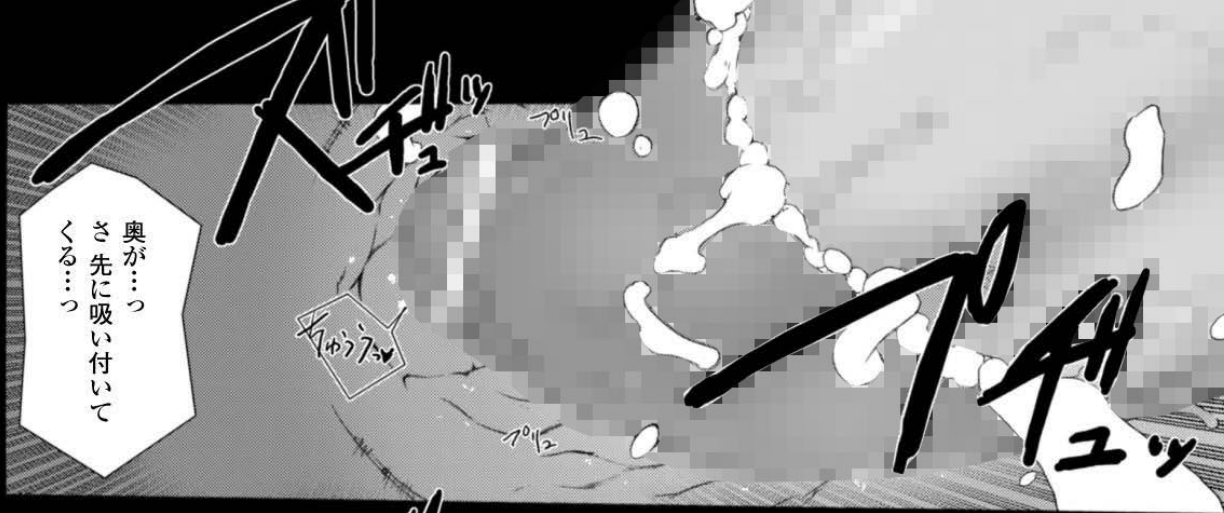
かっ

かっ

クッ
クッ
クッ

クッ
クッ
クッ





奥が...
さ先に吸い付いて
くる...



うあ...舌が
巻きついて

おおお...



アッ...

アッ...

ドクッ

ドクッ



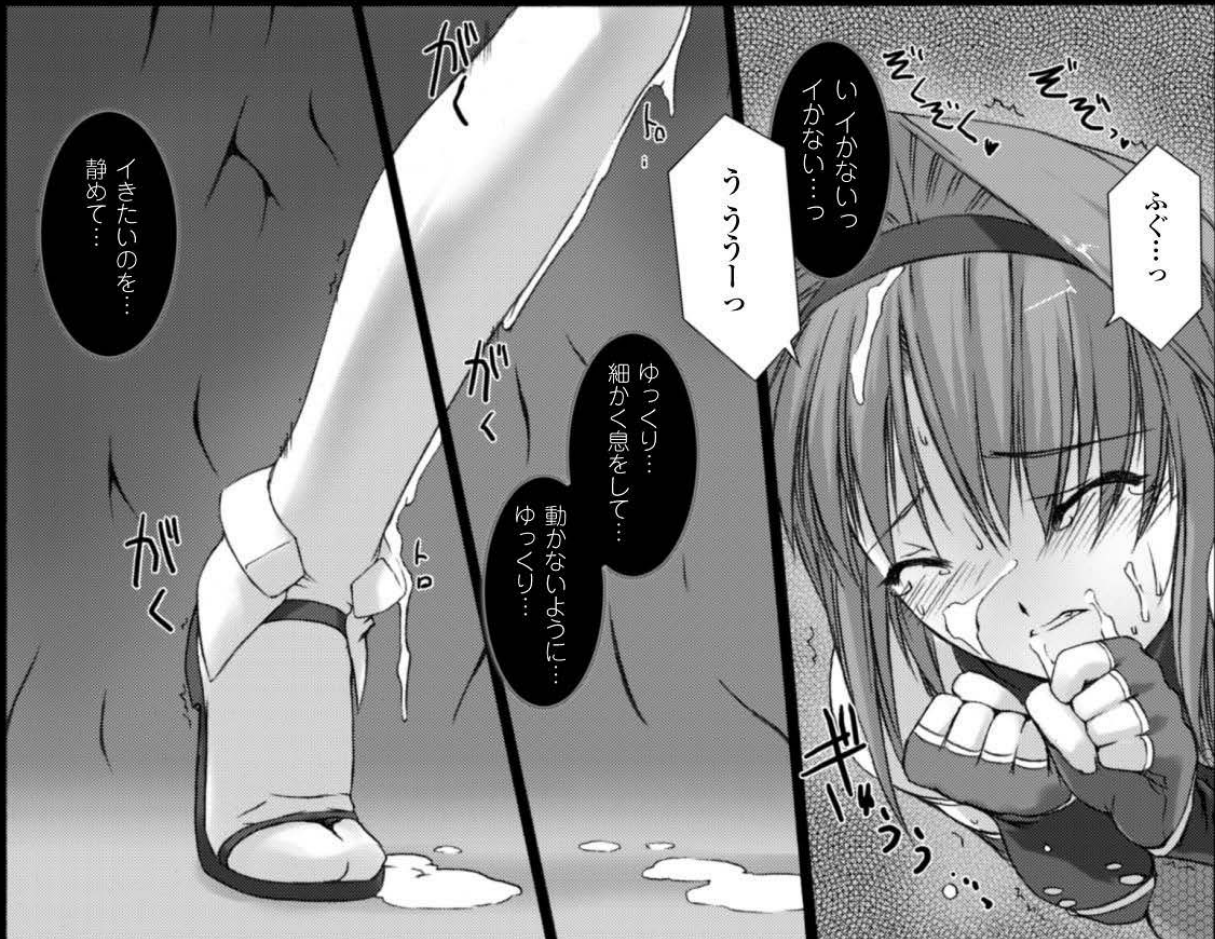
あああっ♡

うう

びくんっ♡

びくんっ♡

ジュル



いきたいのを...
静めて...

いかないっ
いかない...っ

うううーっ

びくん...り

ゆっ...
細かく息をして...

動かないように...
ゆっ... 動かないように...

かぐ

かぐ

かぐ

びく

ぞんぞん

ぞんぞん

ジュル

イセリア 英雄戦記

the legend of the Aecyria war



屈辱の強制奉仕!!

ミノタウロスの脅威から逃れたフィオナとエルス。
疲労困憊の彼女たちにオークの群れが迫る！
豊満な身体の姫と槍騎士に課せられる、

第6話 槍騎士陵辱と壁画の謎

ふでまつりけいすけ
小説 **筆祭競介** 挿絵 **牡丹**
NOVEL ILLUSTRATION

イセリア公国の地下にあるメイズVII。その地下五階で、槍騎士エルスは皇女フィオナを背中に守りながら、ミノタウロスの集団と対峙していた。

「……この数が相手では、とてもフィオナ様を守りきれませんわ」

エルスは冷静にそう判断した。

しかし、逃げるにしても牛魔人たちの間を突っ切る必要がある。ランズナイトは手にした槍を強く握り締め、背中の皇女に対して口を開いた。

「今からこの部屋に来た時のように敵を突破しますわ。フィオナ様はしっかりとわたしに掴まってください」

「は、はい！」

「じゃあ、僕はここにするよ」

どさくさまぎれに胸元にしがみついていたチビ精霊・ルシィフにかまっている暇はない。エルスは意識を聖槍セルフェザーのみに集中させて、すぐさまマイハ反応を発動させた。そして――

「セフナ・セイバーッ！」

皇女を抱えたまま一本の光の矢と化して、一瞬で牛魔人の集団を突っ切る。エルスはそのまま限界までマイハ反応を発動し続け、敵を遥か後方に置き去りにしてから立ち止まった。

「な、なんとか逃げましたわね」

後を振り返ってもミノタウロスたちが追ってくる気配はなく、ホッと安堵の溜め息を吐く。

「……くっ」

直後、全身を襲う猛烈な疲労感に耐えきれず、思わず片膝をついてしまう。

「大丈夫、エルス！」

肩で息をしている槍騎士に、皇女が慌ててしゃがみ込んできた。主君に心配をかけさせてはいけないとすぐに立ち上がるうとするのだが、マイハ反応の連続使用に伴う、この極度の疲労感だけはいかんともしがたい。

「メイズにいたのはミノタウロスだけじゃないんだから、グスグスしてる暇はないんだよ。お姉ちゃんたちもつと急いでええ」

対してルシィフは、蹲るエルスの前を気軽にブンブンと飛び回る。

「わ、わかっていきますわ」

槍騎士はそんな精霊をシッシッと手で払い、フィオナに肩を借りながら何とか立ち上がった。

「虫みたいに扱わないでよ。ほら、こつちこつち――ぶぎゃ!!」

メイズ内を先導しようとした精霊がコーナーを曲がった直後、何かにぶつかり勢いよく跳ね返ってきた。ルシィフはそのまま「きゅう」と呻き意識を失ってしまふ。

「んっ? 今のは何だブヒ」
その曲がり角から現れたのは豚獣人

――オークの集団だった。

「うわっ! 人間だブヒ！」

「メイズのこんな下の階まで来てるなんて強い奴らに決まってるブヒ！」

「スゴイ槍を持つてるブヒ！」

「だれだブヒ! 七階に行けば人間の牝とやり放題って言った奴は！」

「だから俺は最初から、こんな下まで

来るのは反対だったんだブヒ！」

「ヤバイブヒ! 逃げるブヒ！」

オークたちはこちらに気づくくなり、激しく浮足立った。

彼らが言う通り、通常のコンディションならオークのような下級モンスターなどエルスの敵ではない。

同じ獣人でも桁外れたパワーを持つ先ほどのミノタウロスとは違い、身体的にはオークは人間とたいして違わないからだ。

極端に面倒くさがりなだけに筋肉が発達することもなく、でっぷりと太っているのも、ようは食べすぎと運動不足による肥満である。

つまり彼らは豚の頭をしているだけで、戦闘力は人間並み。ザコモンスター

の典型だった。見たところ、六匹いる

ようだが普段ならばセルフェザーのひと振りて蹴散らせる。

しかし今は度重なるマイハ反応の使用で体力は限界。持ち主の気が伝わる聖槍も、いつもの戦闘時なら青白い光を放つのだが今はただの槍のままだ。

(……ま、まずいですわ)
加えてフィオナもかなり疲労している。先ほどルシィフを悪魔から精霊に戻す魔法を使ったことにより、力をほぼ使い果たしてしまっただようだ。彼女の場合、魔法が使えなければ、戦闘で戦力にならないことは言うまでもない。

エルスは何はともあれ、フラフラになりながらも槍を構えて豚獣人たちを威嚇した。このままオークたちが、そ

の臆病さに駆られて逃げてくれることを、心の底から願いながら。

「……エ、エルス」

しかし、背中に守るフィオナが立て続けのモンスター集団との遭遇に動揺してしまっていた。エルスの激しい消耗も、その一因だろう。

弱みを見せることこそが、今もつともしてはいけないことだが、戦闘慣れしていない若い皇女では致し方ない。

「ブヒ? ちょっと待つブヒ。なんだかコイツら随分弱ってるブヒよ」

そのためか、とうとう中の一匹が目敏くこちらの状況に気づいてしまふ。人間並みの戦闘力しかなく、極度の面倒くさがりである豚獣人たちが、モンスターとして生き延びているのはその狡猾さ故である。しかも臆病なだけに、相手の状態を見極める観察眼だけは侮れないものがあつた。

「たしかにそんな感じだブヒ。それによく見るとすごい上玉だブヒ」

「あつちにいるのが姫様で、こつちのデカ乳女がそれを守るナイトって感じだブヒ。どつちともやりたいブヒ」

「ここは一応、戦っておくブヒ」

「ヤバそうになったら逃げるブヒ」
「ブヒヒヒヒヒ」

棍棒を持った六匹の豚獣人たちが、エルスたちになじり寄ってきた。

※
ガギンッ!

オークたちの振り回す棍棒に、エルスは聖槍セルフェザーを大きく弾かれ

てしまった。そして——ドガッ!

「ぐふあっ!!」

プレストプレートの上からだだが、もろに棍棒の一撃を食らい、とうとうその場に蹲ってしまふ。

「エルス!」

それまで背中に庇っていた皇女が、そんな自分を抱きしめて、オークたちから守ってくれる。

「プヒヒヒッ」

「もう諦めて、降参するプヒ」

女騎士が取り落とした聖槍を、オークの一匹が速くに蹴り飛ばす乾いた音がカランカランとメイズに響く。

それが防戦一方だった戦闘の終わりを告げる、物悲しいフィナーレとなった。

「しかしこうして近くで見ると、ふたりともすごいベツピンだプヒ」

「もうたまになくなってきたプヒ」

豚獣人たちは、いきなり腰に巻きつけていたボロ布を取り去り始めた。

「……ッッ!」

蹲るエルスのまさに目の前に、オークたちの赤黒い牡生殖器が、すでに猛った状態で次々と露出していく。

それは握れば手のひらに収まってしまふ程度のサイズで、体格からするとかなり小さい。しかし贅肉で緩む身体と違い、赤と青の血管がくつきり浮き出るほどバキバキに筋ばっていた。

肉先が瘤のように盛り上がり、その独特の形はグロテスクこの上ない。

「そ、そんな汚らわしいものを出して

何をするつもりです!」

皇女が蹲る女騎士を庇ったまま、気丈に豚たちを一喝する。

対して戦闘で勝利したオークたちは出会い頭の時のように怯えることもなく、悠然とふたりを見下ろしていた。

「ほれ。さっさとしゃぶれプヒ」

「そっちのデカ乳女は、おっぱいも使えプヒ」

極端に面倒くさがりな豚獣人たちは、自ら動いてこちらを穢そうとはせずに、いきなり性的な奉仕を求めてきた。

しかしエルスがそんな命令に従うわけもなく、醜い豚面たちをジッと睨み上げるのみだ。隣ではフィオナも同じ表情をしている。

「プヒヒヒ。命令を聞かなければ、あとにはヤルだけプヒ」

「ひんむいてズコバコだプヒ」

すると中の一匹が興奮気味にフゴフゴと鼻を鳴らし、

「こいつら処女のおいがするプヒ」と指摘してきた。豚獣人たちのテンションがさらに上がる。

「俺たちにヤられるか、自分たちでヤルか。お前たちで決めるだプヒ!」

「……くっ」

仕方がない。ここで無駄に抵抗して、姫の貞操を危険に晒すわけにはいかない。彼女の処女を守るために、自分ができるだけのことをしよう。と、エルスがそう覚悟を決めた時である。

「そ、そんなことお断りです!」

逆にフィオナは部下である自分を守るためだろ、抵抗の意思を崩さない。

「こいつ、生意気だプヒ!」

「お前からズコバコだプヒ!」

怒った豚たちが皇女に襲いかかろうとして、女騎士は慌てて口を開いた。

「や、やりますわ! あなたたちの言う通りいたしますわ!」

屈服のセリフに、豚獣人たちは満足そうにプヒヒと鼻を鳴らす。

「で、でもエルス!」

フィオナがおも言葉を重ねようとして、素早く彼女の耳元でささやいた。「とにかく今は時間を稼いで、魔法の力を回復してください」

ルシィフは気絶し、自分も疲労しきっている。この状況で逆転するには彼女の魔法に賭けるしかない。誇り高い姫君は悔しそうに下唇を噛んだが、最後にはコクツと頷いてくれた。

「何、コソコソしてるプヒ」

「無駄な抵抗はするなプヒよ。どっちかがヘンなことをしようとしたら、もう片方をボコボコにするプヒ」

その間、オークたちは手際よく三匹ずつのグループに分かれて、それぞれエルスとフィオナを取り囲み、ペニス突きつけてきた。

(これも……フィオナ様を守るため) 槍騎士は悔しさを強く奥歯を噛み締めながら、豚獣人の肉槍を掴んだ。オーブンフィンガーの手袋をしているために、指が直接牡生殖器に触れる子供の腕ほどあつた悪魔化したル

シィフの男根に比べれば、そのサイズは爪楊枝のようなものだった。

(……でもすごい硬さと熱さですわ)

処女であるエルスにとつて、この牡槍はその大きさに関わりなく、身の毛もよだつ肉凶器に違いはない。

しかも鋼のような硬度と、火傷しそうなほどの熱を帯びている。それが自分に対しての劣情の強さの表れだと思うと、ますます気分が悪くなってくる。

それでもエルスはゆっくりと手を上下させ始めた。隣の集団でも、フィオナが同様の行為をさせられている。

(くっ……こ、こんな豚ごときに) イセリアの三大美女と称えられたうちのふたりまでもが、性奴隷として奉仕することを強要されていた。

しかし処女の自分たちができることと言えばこれぐらいである。行為を開始した当初は盛り上がりつつ豚たちも、すぐにその熱気が冷めてきた。

「もつと気合い入れろプヒ」

「手だけじゃなくつてしゃぶれプヒ」

エルスたちのおざなりな奉仕に満足するはずがない。しきりに熱のこもった奉仕を求められるが、こればかりはどうしようもなかった。

「……いいこと思いついたプヒ」

すると中の一匹が、唐突にニヤリと口を斜めにした。

「それじゃあ今、お前たちがそれぞれ相手してる三匹を先にイカせたほうだけ犯さないでおいでやるプヒ。その時点でイッてない残りのオークに、イカ

せられなかった牝はズコバコだブヒ」
「ブヒヒ。ナイスアイデアだブヒ」

エルスは血の気が引いた。
思わずフィオナの横顔を窺うと、彼女も硬い表情をしている。

「こうなったら、ワザと手を抜いてわたしを身代わりになりますわ」
と女騎士がそう決意した直後である。

自分を見下ろしていたオークが狡猾そうに眼を細めた。
「それじゃダメブヒ。こいつらは仲間のために自分が犠牲になる気だブヒ。友情とか献身とかいう奴だブヒ」

「ブヒヒ！ まったくメンドクサイ奴らだブヒ！」
「それじゃ設定を逆にするブヒ！ 先に全員イカせたほうをズコバコだブヒ！ 仲間がやられたくなくかつたら、一生懸命シコシコしろブヒ！」

オークたちの策が決まった。極端に面倒くさがりだからこそ、悪知恵だけは異様に働く奴らだった。
「さつさと始めるだブヒ！ この松明の炎が消えた時点でイッてないオークは、お前らに種付け確定だブヒ！」

タイムリミットを設けることにより、手を抜くことを徹底的に禁止してくる。しかも掲げられた松明は、すでにかなり芯が小さくなっていた。
「……っ……」

仕方なく、エルスは両手に握らされた肉棒を必死に扱き出す。
「人間の牝は手だけでもスベスベしてて、チョー気持ちいいブヒ」

だらしない口を半開きにして、恍惚とした表情を浮かべるオークたちを、女騎士は睨み上げ続けた。
「ブヒヒヒ。この反抗的な目つきも、たまらないブヒ」

それすらもこの下劣な豚どもを喜ばせることを知り、腹の底から湧き上がってくる怒りに身体が震え出す。
「しゃぶれブヒ」

その怒りに震える口元に、三本目のペニス突きつけられた。
鼻の奥にツンと突き刺さる強烈な獣臭さに、思わず顔を背けてしまう。

「そんな顔すると、ますますしゃぶらせなくなるブヒ」
正面のオークは自ら肉槍の根元を持つと、背けたエルスの横顔にその醜悪な肉棒をビタビタと叩きつけてきた。

柔らかな頬を打つ骨のような硬度。ジンと染みる牡豚の淫熱。その硬さも熱さも、エルスの嫌悪感をさらに煽り、本気の殺意がこもった視線をオークに向けさせる。
「そんな目をしていいブヒか？ このまますぐ隣の姫様マコにこのチポをぶち込んでいいんだブヒよ」

「……ぐ、愚劣すぎますわ」
「ブヒヒひひっ。それが嫌なら、さつさとお前の口マコに唾えろだブヒ」
フィオナの口を持ち出されては、抵抗のしようがない。

こんなゲスの命令に従わなければならぬ屈辱が、誇り高い女騎士の胸に猛烈な嫌悪感を刻み込む。

それでも、細かく震える唇を開け、ゆっくり顔を近づけるのだが――。
「……くっ」

やはり思いきれない。何度か口を開け閉じしては、忸怩たる躊躇を繰り返す。
「ホレぶひ。ほれほれブヒ」

相手のオークはそんなエルスの態度にイラつくどころか、葛藤する口元をおちよくなるように肉槍で突いてくる。完全に玩具扱いだ。
肉体だけではなく、女騎士の精神までもいたぶって楽しんでる。

「あんまりグスグスしてたら、松明が消えちゃうブヒよお？」
タイムリミットを指摘されて、エルスはハッとした。
「……フィオナ様」

己のブライドよりも守らなければならぬものがある。覚悟を決めた。まさに敵と戦う凛々しい顔つきで女騎士は口を開き――。
「ぶひっい。気持ちいいブヒ」

先の尖った醜悪な肉棒を唾える。
「……なんてにおいなんですの」
口内にブワッと広がる刺激臭。舌尖に滲み出す生臭さ。たまたらず吐き出すうとしたが、後頭部を思いつきり掴まれてそれも許されない。

口を犯すオークはそのままゆっくりと腰を突き、イラマチオを楽しみ出した。不幸中の幸いだったのは、豚ペニスがないことだ。醜い豚面の表情を窺い、反応を確かめながら指の動

「このままじゃ、牛みたいにでっかい乳が勿体ないブヒ」
すると手コキ奉仕を受けている豚たちが、プレストプレートを器用に外し上着を強引に引き裂いてきた。
ぶるんっ、と完全に収まりきつていなかったバストが剥き出しにされる。
「くっ……。こんな奴らに、胸まで見られてしまいましたわ」

それはミルクを溶かしたような白い肌、鮮やかな雉色の突起を小さく乗せた美峰乳。大きすぎて合うブラがないにもかかわらず、見事な釣鐘型を保っているのは持つて生まれた肌の張りに加え、徹しい鍛練の賜物でもある。
「思った以上にデカイブヒ！」

「俺のチコ、擦りつけるブヒ！」
その見事すぎるバストに興奮した左のオークが手コキ奉仕をさせたまま、男根を胸に擦りつけてくる。
二匹とも狙いはその頂点だった。
「……んんっ?! ツツ……んんっ……」

敏感な乳首を灼熱の肉棒に突かれ、ペニスを唾えた口からくぐもった呻き声をもらしてしまふ。
ニッブルを押し込められたり、擦られたり、時には乳房の形が歪むほど、豚たちは夢中でバストを責めてきた。
悔しい。本来、赤子を育むための母性器官を、こんなザコモンスターどもの欲情の玩具にされるとは……。

それでも今はこのオークたちに奉仕をしなくてはならない。醜い豚面の表情を窺い、反応を確かめながら指の動

きを奴ら好みに調整していく。豚ペニスを自らの胸に擦りつけていく。

「それもこれも——」

「おら、もつとしっかりやれブヒ」

「そんなんじゃ萎えてくるブヒ」

「でもこのタドタドしさに、逆に萌えちゃう自分を否定できないブヒ」

隣では若き姫の初々しい手コキ奉仕を、豚たちが楽しんでる状況だった。そして左右の手にあぶれた残りの一匹は、可憐な唇にペニスを突きつけて、口での奉仕を求めている。

（フィオナ様を、こんな奴らに穢させるわけにはいきませんわ）

自分の目の前で、つい先ほど主君が蕩触手に陵辱された時の悔しさが胸中に蘇ってくる。

処女を散らされる以前に、もう二度と皇女に怪物の汚液を浴びさせるわけにはいかない。一刻も早くこいつらを満足させ、彼女に群がっているオークたちも自分が引き受けなければ——。その思いがエルスの行為をよりいっそう大胆なものにさせた。

超一流の槍騎士として磨かれた実戦的な対応能力が、処女とは思えないテクニックを繰り出させる。

「ブヒヒッ!!」

「こいつ、なかなか上手いブヒ」

手首に捻りを加えながら左右の男根をリズムカルに扱く。尖った肉先を自らの豊かな胸に埋めるように擦りつける。すると、どちらのペニスもビクリとさらに硬度を増して、その先から透

明な汁が噴き出してきた。

啞えたペニスも同様だ。

唇で肉幹を絞りながら思いつきり頭を振り、金髪縦ロールを振り乱すようにしてむしゃぶり回すと、先端から生温いヌルみが滲み出してきた。

（こ、これは……何なんですか？）

舌が痺れるような苦味に加え、鼻孔の奥に突き刺さるような生臭さである。対して三匹のオークは軽く顎を上げて、ブヒブヒと気持ちよさそうに鼻を鳴らし出した。

「俺たちの先走りでおっぱいがヌルヌルになってきたブヒ」

「も、もうイキそうだブヒ」

「もつとだブヒ。もつとズリズリおっぱいにチチ擦りつけるだブヒ」

ペニスから滲み出ている未知の体液は、どうやら「先走り」と言うらしい。

エルスは言われるまま、豚ペニスをさらに積極的に胸に擦りつけた。

ズにゆんずりずり、むにゅズリリつ。もつとも柔らかい肉厚な下乳に先端をめり込ませ、はね上げるように乳首まで擦り抜く。すでにガチガチに硬直している己の乳首で、同じく硬直

きつた男根をコリコリと愛撫する。先走りの効果でいくらか強く擦りつけても痛みはない。二本の男根とふたつの美峰乳がヌルヌルと淫らに絡みあう。

「ひくん。ひくひくん……」

そんな行為を続けていると、身体に僅かな違和感を憶えた。

おかし。妙に身体が火照っている。

（……何か……ヘンですわ……）

男根と密着した乳肌から、その淫熱が胸の奥へと染み込んできている。ピンピンに硬直した乳首を尖った肉先で弾かれる度に、こめかみ辺りにビリビリと官能のバルスが響いてくる。

「……ツツ!!」

それは紛れもない肉体的快感。嫌悪の対象ではない豚モンスタに奉仕することによってもたらされる、背徳の肉悦だった。

（う、嘘ですわ。……こんな……何かの間違いですわ）

しかしいくら頭で否定しても、継続的に胸元から響いてくる熱気を帯びた愉悦は消えはしない。どれほど忌み嫌うゲスが相手でも、健やかに育った女騎士の若い肉体は性に正直だった。

乳首という特別敏感な性感帯を執拗に責められることにより、官能の細波がそのグラマーな女体内で発生する。あるいは口にしたら先走りの粘液に、媚薬的な効果でもあるのだろうか……。

両手が、胸が、そして口が、豚たちのペニスと密着している部分が熱い。

オークたちの淫熱によって暖められているだけでなく、己の身体が戦闘時とはまるで違う火照り方をしている。

「この牝、さっきまで俺たちをすごい視線で睨み上げてたにせよ、目がエロ

いカンジにトロンとしてきたブヒ」

「俺たちのチチポをしゃぶりながら感じ始めてるブヒ。とんでもないドスケベだブヒ」

自分を見下ろす豚面に、見下しきつた表情が次々と浮かび出した。

（まさか、そんなはずありませんわ）

口々に浴びせられる嘲りを頭で繰り返して否定するのだが、現実には己の肉体で発生している現象は無視できない。

そして、オークは非力なザコ獣人として生き抜いているだけに、相手の状況を正確に見抜く目だけは侮れない。「コイツSと見せかけて、実はDMだブヒ。なじられて身体が小さくビクビクしてるブヒ。たまらんブヒ」

それだけに今見せているエルスの反応がより豚たちの興奮を高め、限界を早めさせる。

中でもフィニッシュに近いのは、終始エルスが右手で扱っていた右側のオークだった。

「イ、イキそうブヒ！ もつと乳首にズリズリ擦りつけるだブヒ！」

今にも血管がはち切れそうなほど肉棒を漲らせた豚獣人が、自ら腰をカクカクと小刻みに振り出した。

（な、なんて激しさなんですか?!）

その尋常ではない昂り方は、悪魔化していたルシィフが絶頂した時と酷似していた。筒状にした手のひらにペニスをガムシヤラに突き入れながら、肉先を深くバストに埋め込んでくる。

ドリユドぶどりゅんっ!

男根以上に熱い肉汁が、尖った先端から噴き出した。それはゼロ距離から豊かな胸を直撃して——。

「んんんッ! ツツッッんんんんッ!」

ペニスを啜えたまま、エルスはその熱さと勢いにくぐもった悲鳴をあげさせられる。噴き出した汚液はプバアと飛散し、鶉色の乳首から見事な半円を描く下乳に至るまで、ドロドロの白濁液塗れにした。

(……こ、これが牡の精液……)
先ほど自分が浴びたのは萬触手の粘液だ。本物の生殖液ではない。しかし今身体に浴びているのは、子宮に注がれば孕む危険のある人型モンスターザーマンである。

それだけに嫌悪感は一際大きかった。「こっちもイクプヒ！ □マ■コで思いつきり中出してやるプヒ！」

仲間の白濁液に穢された美峰乳に興奮したのか、口腔を犯していたオークも限界を告げる。

(ま、まさかこのまま口の中に!?)
根元まで男根を啜えさせられて、後頭部を掴まれては逃げようがない。カクカクと腰を振りたくり口腔性交で果てようとする牡の為すがまだ。

「プヒ！」

豚の股間に密集している剛毛に唇が埋まり、口内に今までは比較にならない生臭さがドッと溢れたその直後、ドギョーンッ！ ドブどりゆめどぶん！

口蓋に射精の直撃を受ける。
(なんて勢いなんですの！)

その灼熱の衝撃は凄まじく、口腔の真上にある脳を揺さ振られ脳震盪を起こしそうなほどだった。

「ぶぐっ!? つぐう……んっぐうっ」

エルスは根元までペニスを啜えさせられたまま、その脈動に合わせてくぐもった声をもらし続ける。脂ぎったオークの体臭を煮詰めたような、生臭い味もたまらない。

(しかも、とんでもない濃さですわ) 口腔を満たす、ドロドロとしたザーマンの感触と合わせて吐き気を催す。
「ぶひ！」

思う存分、口内射精を決めたオークは最後の一滴まで絞り出すと、満足そうに一鳴きして腰を引いた。

やっと口が解放され、すぐさま口内の汚液を吐き出そうとする——しかし。「吐き出すんじゃないプヒ！」

まだイッていない残りの一匹に止められた。そして前髪を掴まれると俯きかけた顔を強引に上に向かされる。

(これ以上、何をやる気なんですの) エルスは口内に溜まる精液の生臭さでまともに鼻孔で息ができず、今にも窒息しそうだった。

対して興奮しきった豚獣人は眼を血走らせて激しくペニスを扱っている。

その尖った肉先は真っ直ぐこちらに向けられていた。
「口を開けるプヒ！ ち■ぼ汁に浸ったお前の口の中を見せろだプヒ！」

鼻で息ができない以上、僅かばかりでも空気を吸うには命令通りにするしかない。

(いったい何がしたいんですの……) エルスは口内にこもる生臭さに耐えかねて唇を大きく開いた。濃密な白濁

液に桃色の舌がどっぷりと浸っている姿を晒すことになる。直後、こちらを睨むように見詰めていた豚が、

「飲めプヒ！ ごっくんしろプヒ！」
地団太を踏むように両脚をパタパタさせながら、切羽詰まった上擦り声ですらに無茶な要求をしてくる。

(なっ!? そ、それは……)
我が耳を疑うその命令に、エルスは思わず首を小さく左右に振った。

「何を今さら嫌がってるプヒ！ お前が嫌なら、あつちの牝に俺のシヨンベシとチ■ボ汁を飲ますプヒ！」

あまりの理不尽さに、手のひらに爪が深く食い込むほど両手を強く握り締める。目の前ではフゴゴゴと尋常ではない鼻息の荒さで豚が肉棒を抜きながら「早くしろ」と急ぎ立ててくる。

エルスの胸には絶望が広がっていた。人外の化け物に口内射精を許し、その肉汁まで飲み干せば、騎士としての誇りはおろか、人としての矜持すらも地に墮ちる。

騎士団団長として部下の生死を分ける命令を下すこの口が——将来夫となる人と永遠の愛を誓うためのキスを交わすこの口が——。

豚の劣情に穢され尽くす。
もう二度と、今までと同じように高い言葉を紡ぐことができなくなる。

(ああ、そ、それでもわたしは……) アムデルト家に生まれ、マイハのミドルネームを得たからには、イセリア

公国を——フィオナ皇女をこの身を挺して守らなければならない。

たとえそれが、死よりも辛く厳しい道だとしても……

エルスは言われるまま口を閉じ、ギユッと瞳を閉じた。そして、たつぷりと躊躇した後に——。
ごっくん。

反らすようにしていた剥き出しの咽を大きく上下させる。まるで糊のように粘りつくザーマンが咽に強く絡みつきながら、ヌルリと食道を通っていく。

「プヒ！」
それを見た正面のオークが一鳴きし、びちゃびちゃびちゃアアアッ!

反らした咽に新たな肉汁をぶちまけられた。咽の内側も外側も、生温かな豚の精液塗れとなる。
「飲んだプヒ。俺たちのち■ぼ汁を、この細くて白い咽をゴクゴクさせて飲んだプヒ」

射精したばかりのオークは、自分の吐き出した汚液を、自らの肉棒で執拗に女騎士の咽から頸の裏にかけて塗り伸ばしてきた。

(わ、わたしはこんな豚どもに……)

顔だけではなく、身体の中まで精液を注ぎ込まれた。肉体的にも、精神的にも、今までの自分には二度と戻れないと改めて実感させられる。

最後に頬で汚液の残滓を拭かれて、やつと三匹目のオークから解放された。

しかし今のエルスに休む間などない。「途中からずっと見てたプヒ」

「コイツとんでもないエロ牝だプヒ」



「約束通り、俺たちがお前を女にしてやるブヒ」

皇女に群がっていたグループの三匹が、新たにこちらに向かってきた。

「だ、だめ、エルスにこれ以上ひどいことしないであげ——きやつ！」

それまで懸命に手コキ奉仕をしていたフィオナが、エルスを庇うために

オークたちを引きとめようとするのだが、邪魔だとはかりに荒々しく押しつけられてしまう。

極端に面倒くさがりなオークたちでも、欲情に火をつけば、獣のように積極的になることは先のオークが証明済みだ。しかも新たな三匹は当然今まで

フィオナの奉仕を受けていた。つまりそれだけ昂っている。牡として、生殺し状態だったとも言える。

「ちよ、ま、待つて——ううっ!？」

精飲まで強制されて呆然としていたエルスは、騎士としての本能で自分に

群がる豚たちに無意識に抵抗しようとした。しかしその上げた両手を掴まれると、左右のオークによって上半身ごと

とメイズの床に押しつけられてしまう。「くっ。そ、そこは……」

続けて下半身に回ったオークに、騎士団の前布を横に捲られ、スリットの

入ったミニスカートの完全な捲り上げられてしまった。

「ブヒっ。処女のくせして随分派手な下着を穿いているブヒ」

そして黒の紐下着に至っては、毫りともるように引き千切られてしまう。慌

てて足を閉じようとしたが、両手を押さえつけている左右のオークによってそれも阻止される。

「まだ何にもしてないのに、もう毛までびしょびしょに濡れてるブヒ」

自分を取り囲む豚獣人たちに、金髪

の茂みの下で息づく、乙女の秘部を覗き込まれてしまった。

豊かな胸と同様に肉厚な大陰唇が、

オークたちの指摘通り透明な粘液——愛液でぬるぬるに照り光っている。

「み、見るなっ! み、ツツ!？」

強烈な屈辱感の後、精飲よりもさらに過酷な陵辱が、この身に降りかかる

うとしていることを自覚し声に詰まる。「おら。目を開けるブヒ」

「お前のせいでパーズン破られちゃうデカ乳ナイトをちゃんと見てるブヒ」

しかし、隣から聴こえてきた声に、

エルスは慌てて視線をそちらに向けた。そこでは先ほどまで自分に群がって

いたオークたちに、フィオナが取り囲まれていた。無遠慮に胸や尻などを弄

られながら、横に背けた顔を強引にこちらに向けさせられている。

そちらの豚たちはすでに一度射精しているためか、その手つきに猥褻みだら

荒々しさはない。文字通り手慰みといった風に、気軽に皇女の胸を揉み

尻から太腿にかけてを撫でている。「ああっ。ごめんなさいエルス」

心優しい姫君はそれにはまったく抵抗できず、家臣が今まさに犯されよう

「ブヒヒ。よくそこで見てるブヒ」

正面のオークがフィオナに向かって鼻を大きくブヒッと鳴らしてから、

エルスの両脚の間に両膝をついてきた。牡の肉槍が自分の股間に宛てがわれる。

「フ、フィオナ様……わ、わたしならこれぐらい——っひいっ!？」

強気を装うセリフも、ペニスの侵入に伴い裏返る。

豚の牡生殖器が、己の処女孔に。女騎士は自らの股間に視線を移した。

その表情は、今までの辱めとは比較にならないほど固く強張っている。

「ブヒヒヒ。心配するなブヒ。お前みたいなの玉をすぐに壊したりはしないブヒ。初めてなんだから、ちゃんと優しくしてやるブヒ」

ぶにと弾力に溢れた大陰唇を左右に広げるようにして——。

ぬぐッ。ぬズぬぬッ。赤黒い肉の塊が己の身体にゆっくりと埋まってくる。それに伴い、咽元に

迫り上がってくるような圧迫感が股間から否応なく湧き上がってきた。

それこそが豚の顔をした獣人と、身体をひとつに繋げるリアルな感触だ。

「や、やめる、やめ——んはあっ!」

臍の奥から、パンッ、と肉体の芯を砕くような衝撃に襲われて、言葉にならない悲鳴がもれた。腰の奥で何かが

破裂したようなその激痛に、股間に向けていた顔が大きく仰け反る。

(……わ、わたしの初めてがッ)

悪知恵が働くだけの、非力で臆病な

ザコモンスターに散らされてしまった。女騎士のアーモンド型の瞳の端に透

明な珠が結ばれる。それは決して破瓜の痛みのための涙ではない。

「きついブヒ。さすがランスナイトだブヒ。身体の縮まりが半端ないブヒ」

満足そうな声から覆いかぶさってきた。エルスのしなやかな腹筋の上

に、処女を奪ったオークが、醜く緩んだ脂肪腹を乗せてきたためである。

「コイツ、初めてのクセしてマコが奥までヌルヌルのズルズルだブヒ」

たっぷりとした処女孔との初結合の余韻を楽しんでから、豚獣人が自らの腹を揺するようには腰を動かし始めた。

「っ……っくぐッ」

強く奥歯を噛み締められていても、思わず声ももれてしまう。

最初は痛みしか感じなかった。それが熱した槍のようなペニスに

じつじつと膣壁を擦られる度、鮮烈すぎる肉悦が湧き立ち始める。

(こ、こんなの嘘ですわ……そんなはずありませんわ!)

先ほどの豚ペニスによる胸責めで、女体の芯に植えつけられた官能の種火

それはオークたちが射精しても消火することなく、グラマーな女体の奥でく

すぶり続けていたようだ。「こいつ、やっぱりとんでもないドスケベだブヒ。処女喪失したばかりなのに、もう感じ始めているブヒ」

「見るだけじゃ我慢できないブヒ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>